

奈良県立大学「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」

2021年度 記録集

# 超教育学としてのアートプロジェクト

## はじめに

西尾咲子（CHISOU プログラムマネージャー／編集統括）

奈良県立大学「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」は、長い歴史と文化が息づく古都奈良において、同時代の実験的・先端的・複合的な芸術表現を介して、古来より多文化混淆に富む奈良の多層性を掘り起こし、その一元的な表象のあり方を再考し、地域資源を創造的に活用しながら語りを多声化していくための共有空間をつくるアートマネジメントの技法を修得することを目指しています。

2020年夏に始動した初年度は、①読解編「地域の多層性を読み解くレクチャー」②表現編「アートプロジェクトの企画・制作・運営」③共有編「アートプロジェクトのアーカイブ実践」の三つのプログラムを開講し、多領域にわたる本学の教員とゲスト講師が連携してレクチャーやワークショップ、フィールドリサーチを行いながら、地域で芸術文化活動を行う過程で必須となる読解・表現・共有の各フェーズにまつわる思考と技法について学びました。

2年目となる本年度は、読解・表現・共有の概念を発展的に継承・融合し、4組のアーティストたちが奈良の各地でアートプロジェクトを構想するなかで浮かんできた「感覚」「生態」「時間」「共有空間」をテーマとする四つのプログラムを設けました。各プログラムでは、アーティストと受講者によるプロジェクトチームを編成し、講師によるレクチャーや専門家との対話を通して各テーマについて思考を深めました。それと並行して、美術や音楽、空間デザインなどの芸術領域を横断するアートプロジェクトを企画・制作・実施することで、読解・表現・共有のプロセスを幾重にも重ねながら、多角的かつ総合的にマネジメントするための技法を実践的に修得することを試みました。

それぞれのアートプロジェクトやレクチャーの詳細については本書の各章に譲りますが、「感覚」の招聘アーティストである listude と岩田茉莉江、「生態」の長坂有希、「時間」の山城大督、「共有空間」の西尾美也と鈴木文貴という4組のアーティストたちは、各々のキャリアと思想の変遷を踏まえた上で、新しいアートプロジェクトを立ち上げました。奈良のそれぞれの土地で自治体や民間団体、住民と連携し、2021年秋から冬にかけて、参加する人々が能動的に関わ

り合える体験型の公演や展覧会を開催しました。受講者はアーティストと併走しながら、地域の中でアートプロジェクトを行う際のプロセスや課題について体験的に学んでいきました。

プログラムごとに受講者の立ち位置や役割は異なりますが、どのプログラムにおいても、アーティストが真剣勝負で表現することと、受講者が学びの機会を得てアートプロジェクトを自分事にしていくことの両方を重視しなければならないことは、同じ業界の専門家だけでつくる通常のプロセスとは異なり、切実さの度合いやスピード感、思い描くイメージの違いなど、たくさんの齟齬や歯痒さを伴いました。年齢も経験も多様な人々がわかり合えなさを抱えながらも耳を傾け、対話する態度だけは諦めない、その特異なプロセスを経てつくり上げられたアートプロジェクトは、アーティストや受講者、スタッフのみならず、関わる全ての人たちの無数の物語の交点にのみ表現が立ち現れることをまざまざと感じさせるものでした。一人ひとりの足下に積み重なる歴史の層と、放射状に広がる関係性の網の目を手繰り寄せることこそが、CHISOUの手強さであり醍醐味なのだと思います。

本書では、各プログラムの過程で交わされた言葉や思考を、大略の印象でまとめようとするのではなく、できる限りそのままのかけらを残しながら積み重ねていくように構成しています。これまでCHISOUと関わってくださった方々も、これから新しく活動に加わってくださる方々も、本書を紐解きながら、この1年間にわたる一度限りの試行錯誤を掘り起こし、自らの掌に残るかけらを独自の文脈でつなぎ直し、新たな層を生み出す手がかりとしていただけましたら幸いです。

## 目次

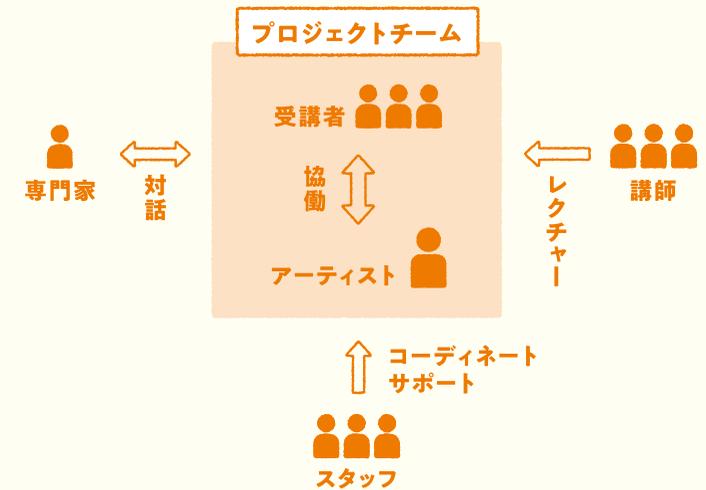
002	はじめに	
006	「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」について	
009	<b>プログラム1</b>	
	「感覚」——「聴く」から創発する身体／コミュニティ	
	listude×岩田茉莉江「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」	
014	プログラム1「感覚」TIMELINE	
030	レクチャー「サウンドスケープ入門」中川真	
040	レクチャー「音から読み解く『万葉集』と明日香村」井上さやか	
050	レクチャー「芸術祭『MIND TRAIL』が奥大和にもたらす可能性」齋藤精一	
060	レクチャー「明日香村の風土と景観」井原縁	
070	レクチャー「多様な人と共に表現を捉え直す試み」田中みゆき	
081	<b>プログラム2</b>	
	「生態」——Life's Manual／天と地の間で生きる技術	
	長坂有希「Ethno-Remedies: Bedtime Stories ⇄ A Life's Manual」	
084	プログラム2「生態」TIMELINE	
102	レクチャー&ワークショップ「Ethno-Remedies: Sri Lanka」 ラナシンハ・ニルマラ	
112	トーク①長坂有希、山口未花子、吉岡幸次、吉岡伸次	
122	トーク②長坂有希、長岡綾子	
133	<b>プログラム3</b>	
	「時間」——地を移動し、時間を旅する、新たなツーリズム	
	山城大督 with 奈良時間旅行団「TIME TRAVEL NARA——香りの頒布会」	
136	プログラム3「時間」TIMELINE	
154	レクチャー「時間と香り」西山厚	
164	レクチャー「ume, yamazoe——人の感覚が優くなる環境をつくる」梅守志歩	
174	レクチャー&ワークショップ「調香教室」石田理恵	
185	<b>プログラム4</b>	
	「共有空間」——再生する生活、そして新しい日常へ	
	西尾美也×鈴木文貴「DATSUEBA」	
188	プログラム4「共有空間」TIMELINE	
206	レクチャー「『共有』と『私有』を行き来する」人文系私設図書館ルチャ・リプロ	
216	レクチャー&ワークショップ「共有空間のモックアップをつくってみる」小山田徹	
226	レクチャー「“つながり”について考える」梅田直美	
	<b>付録</b>	
238	「超教育学としてのアートプロジェクト」西尾美也	
241	2021年度 受講概要	
243	エッセイ「受講者から実践者へ」古江晃也	
244	CHISOU企画運営スタッフ	
245	講師略歴	

## 「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」について

生きる技術は、  
あらゆる物事を多角的な視点から  
読解・表現・共有することの  
循環と重層から育まれる。

地域のコンテキストを緻密に読み解き、  
領域に捉われない  
アートプロジェクトを編みあげ、  
記録・アーカイブすることで未来へとつなぐ。

それらのプロセスを通して、  
生彩な「知の地層」を生みだしていく。



奈良県立大学「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」では、アートプロジェクトの実践を通して学び合い、答えのない時代を生きる技術を育みます。読解・表現・共有のプロセスを幾重にも重ねながら、美術や音楽、空間デザインなどの芸術領域を横断するアートプロジェクトを、多角的かつ総合的にマネジメントするための技法を実践的に身に付けます。

2021年度は、「感覚」「生態」「時間」「共有空間」をテーマとする四つのプログラムを開講。各プログラムでは、アーティストと受講者によるプロジェクトチームを編成し、講師によるレクチャーや専門家との対話を通して各テーマについて思考を深めながら、アートプロジェクトを共に企画・制作・実施することで、フィールドリサーチやインタビュー、アーカイブ制作などの技法を修得します。年齢や経験、学生・社会人など所属を問わず、文化芸術や地域創造に関心のある誰もが受講できるプログラムです。

Program

# 1

## 「感覚」

——「聴く」から創発する身体／コミュニティ

Istudeと岩田茉莉江による新しい試み「地奏」を通して、その瞬間、その場でしか生まれない音から、土地に積み重ねられた層と感覚の広がりを経験するアートプロジェクトを、奈良県明日香村で行いました。多領域の専門家と学び合い、フィールドリサーチを重ねて、まち歩きと食、音楽ライブからなる1泊2日のツアー型公演を企画制作し、そこで得られた体験をドキュメンテーション展示の場で広く共有することを試みました。

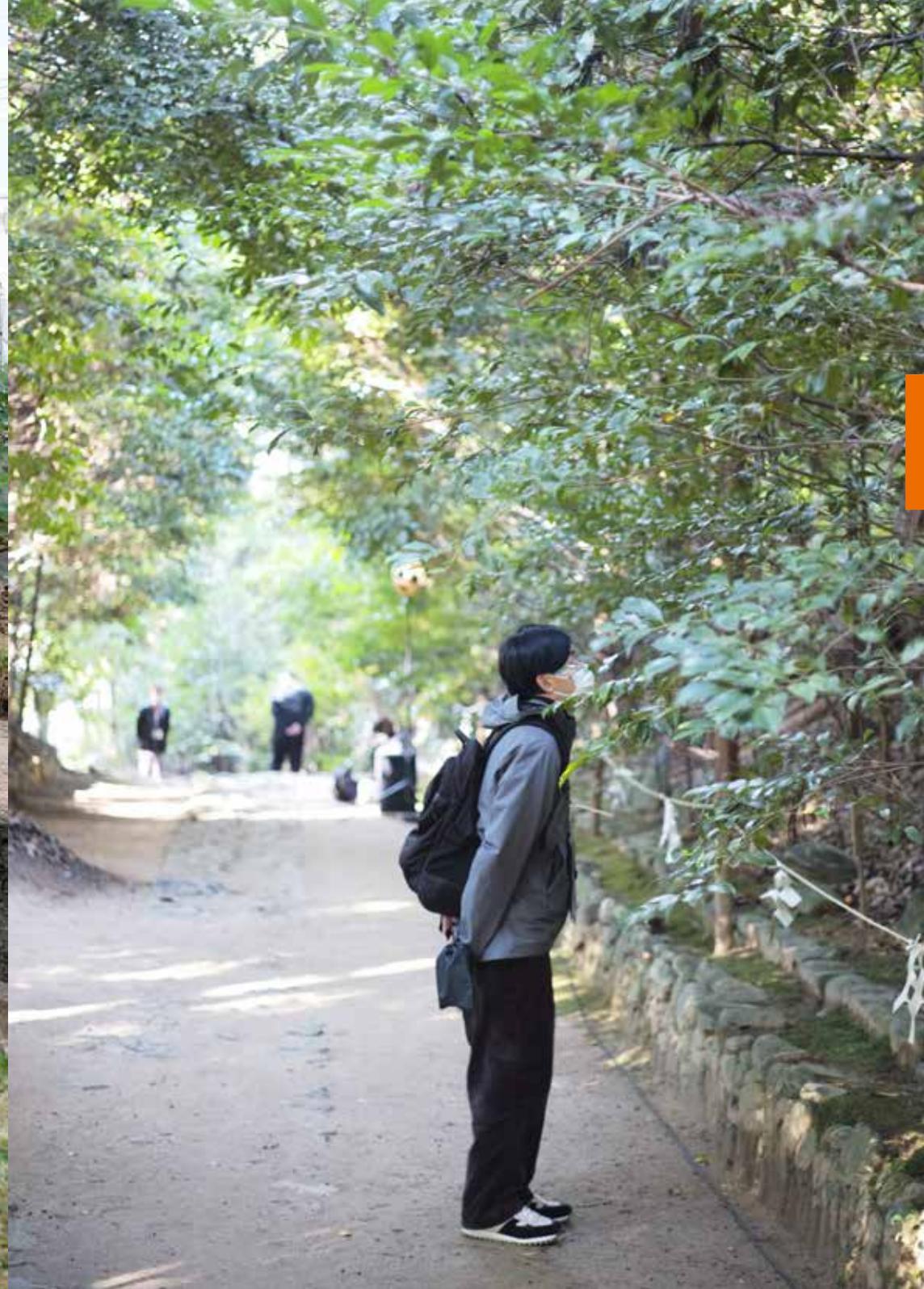
本書に収録されている各レクチャーの文章は、講師が口述した言葉を書き起こし、企画運営スタッフが再構成しました。本書の内容の一部または全部を、無断で複写、複製、およびデジタル化することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。



「地奏 -CHISOU-」とは、その場、その時でしか生まれない音を通じて、土地に積み重ねられた層と感覚の広がりを経験するプロジェクトです。2021年2月に奈良県宇陀市を舞台に開催されたvol.1に続き、同年秋にvol.2を奈良県明日香村にて開催しました。

参加者は「まち歩き」「食」「音楽ライブ」からなる2日間のプログラムの中で、古代から紡がれる飛鳥の土地や歴史の視点を交えながら、自らの耳/身体/感覚を開き、そこに立ち上がる音風景に触れていきました。

大化の改新により律令国家の建設を始めた飛鳥の地では、法や政治の整備が進み、時間やものの価値に対する客観的な指標が多く誕生しました。人々の感覚は「感情」と「理性」の間で大きく揺れ動いたことでしょう。そのような古代の大都会の痕跡を多く残し、現代では自然豊かな農村の風景により郷愁をもたらす明日香村。オーバーレイされた時間と空間を「音」を通して体験する2日間となりました。





2021年7月4日

オリエンテーション

listudeと岩田茉莉江さん、受講者の皆さんがCHISOU lab.で初対面。各アーティストから、これまでの活動や、これから協働して実現させるプロジェクト「地奏」について話を伺った後、受講者も自己紹介。年齢も境遇も様々な、個性豊かで熱い志を持つ受講者と、アーティスト2組によるプロジェクトチームが始動。



2021年7月18日

レクチャー「サウンドスケープ入門」  
(中川真)

サウンドアートやサウンドスケープ、コミュニティアートなど幅広い分野で、ユニークな研究活動を行っている音楽学者の中川真さんを迎え、「聴く」ことの意味や、サウンドスケープの考え方について話をしていた。

2021年8月1日

レクチャー「音から読み解く

『万葉集』と明日香村」(井上さやか)  
奈良県立万葉文化館で、『万葉集』を研究している井上さやかさんから、明日香村の歴史と、『万葉集』からみるサウンドスケープについて話を伺う。当時の日本人は音を頼りにどのように世界を捉えていたのか。これからプロジェクトを進めていくにあたり、重要な知識と感覚を得られる時間となった。

2021年8月8日

ワークショップ

「耳をひらき音で遊ぶ  
夕暮れ音さんぽ 奈良・別所」  
(岩田茉莉江)

音風景研究家の岩田茉莉江さんが全国各地で実践してきた「音さんぽ」のワークショップを、岩田さんの暮らす奈良市別所町で開催。田畑や森林、神社などを歩きながら、普段は聴き過ごしている音に耳を澄ますための様々なワークを行う。音を頼りに感覚がだんだんと開いていく体験をする。



2021年8月28日

レクチャー

「芸術祭『MIND TRAIL』が  
奥大和にもたらす可能性」  
(齋藤精一)

クリエイティブディレクターの齋藤精一さんから、奈良の奥大和エリアを舞台にした芸術祭「MIND TRAIL」など、「感覚」をテーマに手がけてこられたプロジェクトの数々について話を伺う。アートと経済の関係性、アートが持つ力など、話題はどんどん広がり、リアルとオンラインの受講者から質問が相次いだ。



2021年9月16日

レクチャー「明日香村の  
風土と景観」(井原緑)

環境デザイン学が専門の井原緑さんに、明日香村でレクチャーとまち歩きをしていただく。前半のレクチャーでは、ランドスケープの観点から明日香村の特徴について学ぶ。後半のまち歩きでは、明日香村を語る上で外せない飛鳥川を辿り、明日香村の歴史に思いを馳せながら、様々な視点からまちを捉えていくことを試みた。

2021年9月20日

レクチャー「多様な人と共に表現  
を捉え直す試み」(田中みゆき)

キュレーターやプロデューサーとして活躍している田中みゆきさんから、これまで企画に携わった展覧会やパフォーマンス、映画、ゲームなど、領域をまたぐ多様な活動について話をさせていただく。「どのように企画をつくるのか」「どのような姿勢でアートマネジメントを実践するのか」について問い直す機会となる。

2021年8月～11月

明日香村フィールドリサーチ



夏から秋にかけての3か月間、アーティストと受講者で、「地奏」の舞台となる奈良県明日香村のフィールドリサーチを重ねた。飛鳥坐神社や飛鳥資料館、甘樫丘など、明日香村の旧跡名所や自然、様々な道を辿り、明日香村に暮らす人々のお話を伺い、飛鳥時代の歴史と文化を感じながら、この地についての読解を深めていった。



2021年11月6日～7日

「地奏-CHISOU-vol.2 ASUKA」

リハーサル実施

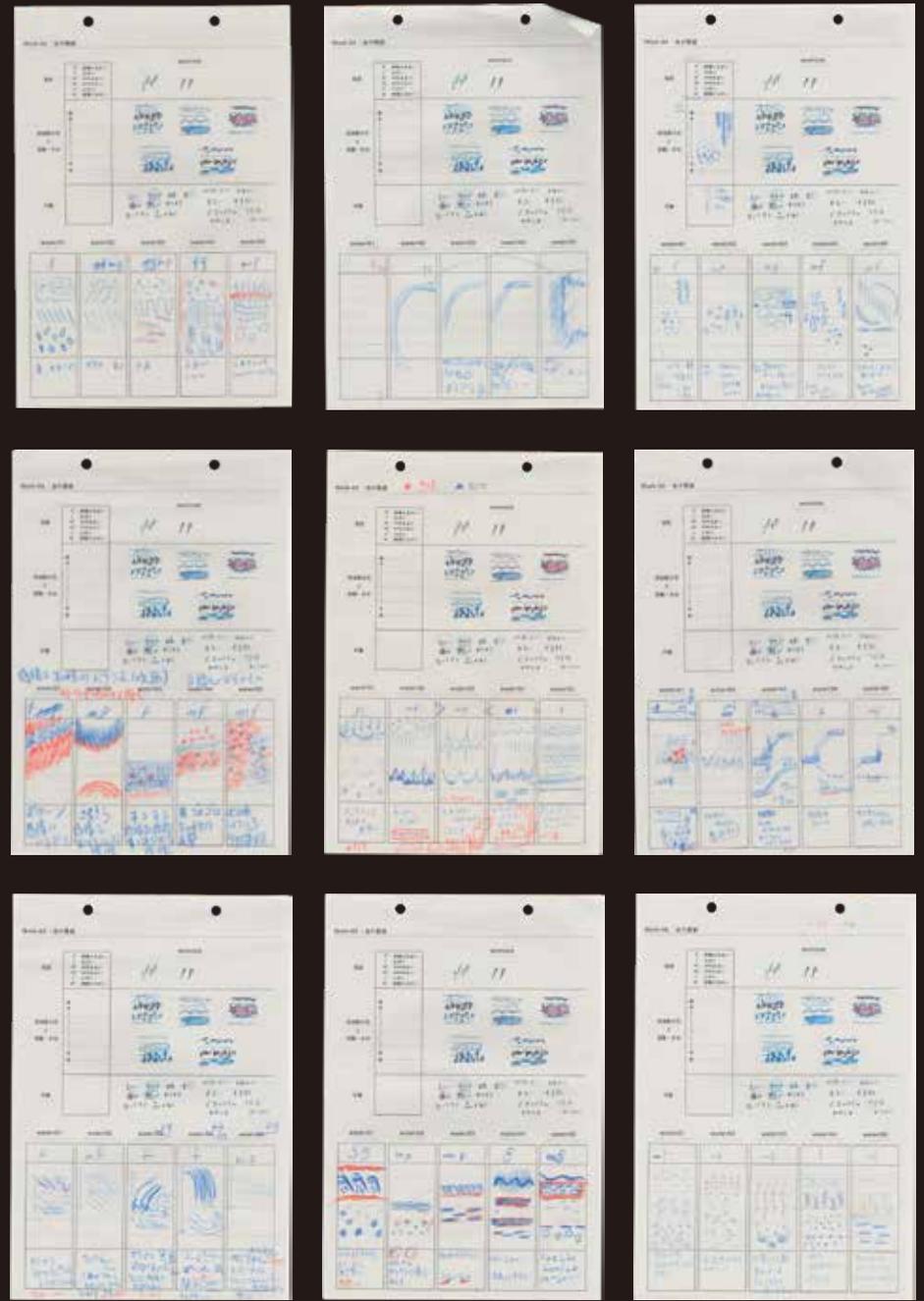
公演までちょうど1週間前という時期に、本番と同じタイムテーブルと役割分担で、実際のルートを辿りながら、リハーサルを行う。アーティストと受講者、スタッフで課題を洗いだし、改善点について話し合い、当日の動き方について最終確認をする。

2021年11月13日～14日

「地奏-CHISOU-vol.2 ASUKA」開催

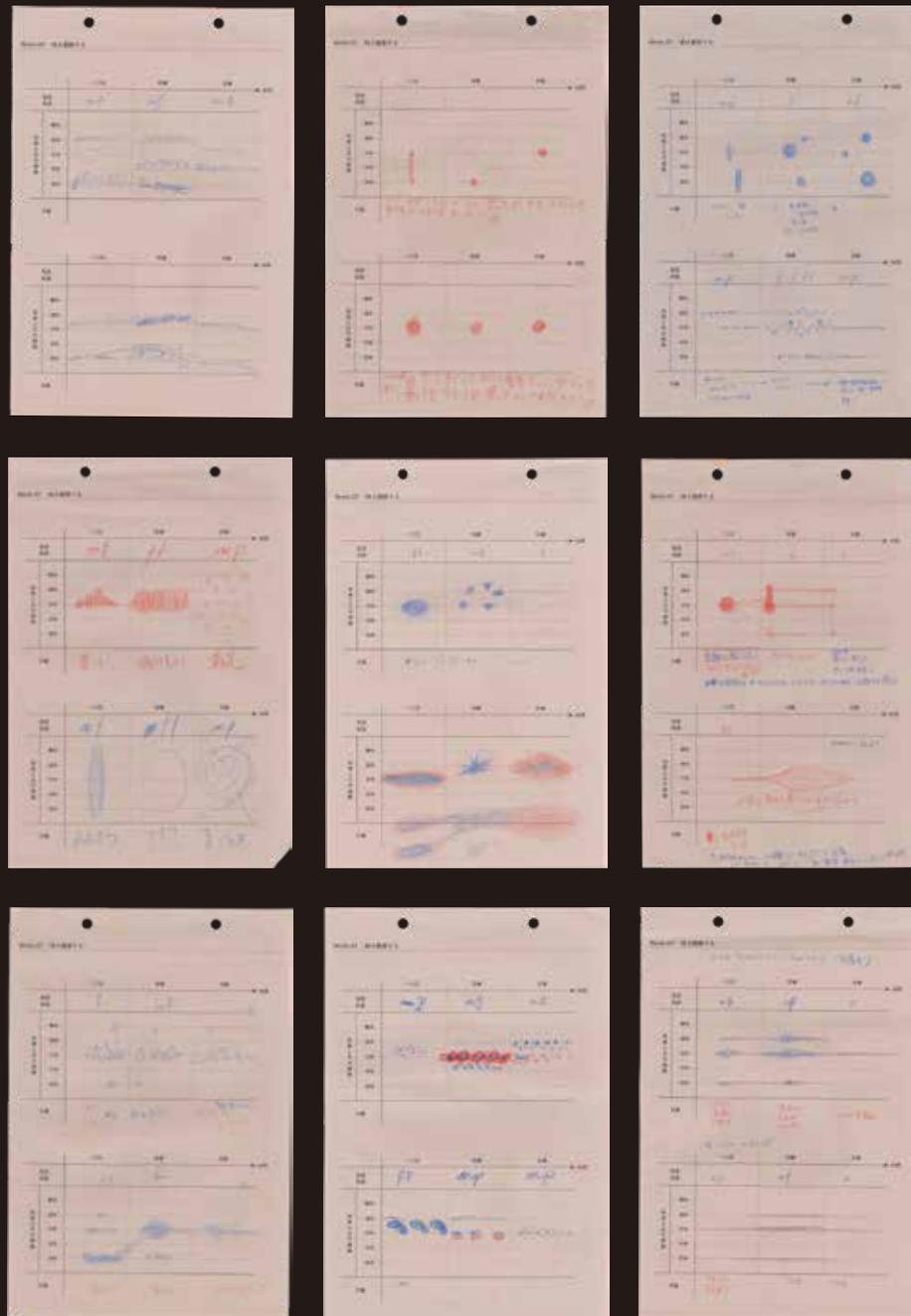


いよいよ公演当日がやってくる。奈良県明日香村で「まち歩き」「食」「音楽ライブ」からなる1泊2日のツアー型公演「地奏-CHISOU-vol.2 ASUKA」を開催。10名の参加者を迎えて、アーティスト、受講者、スタッフが連携して全身全霊で運営に取り組む。



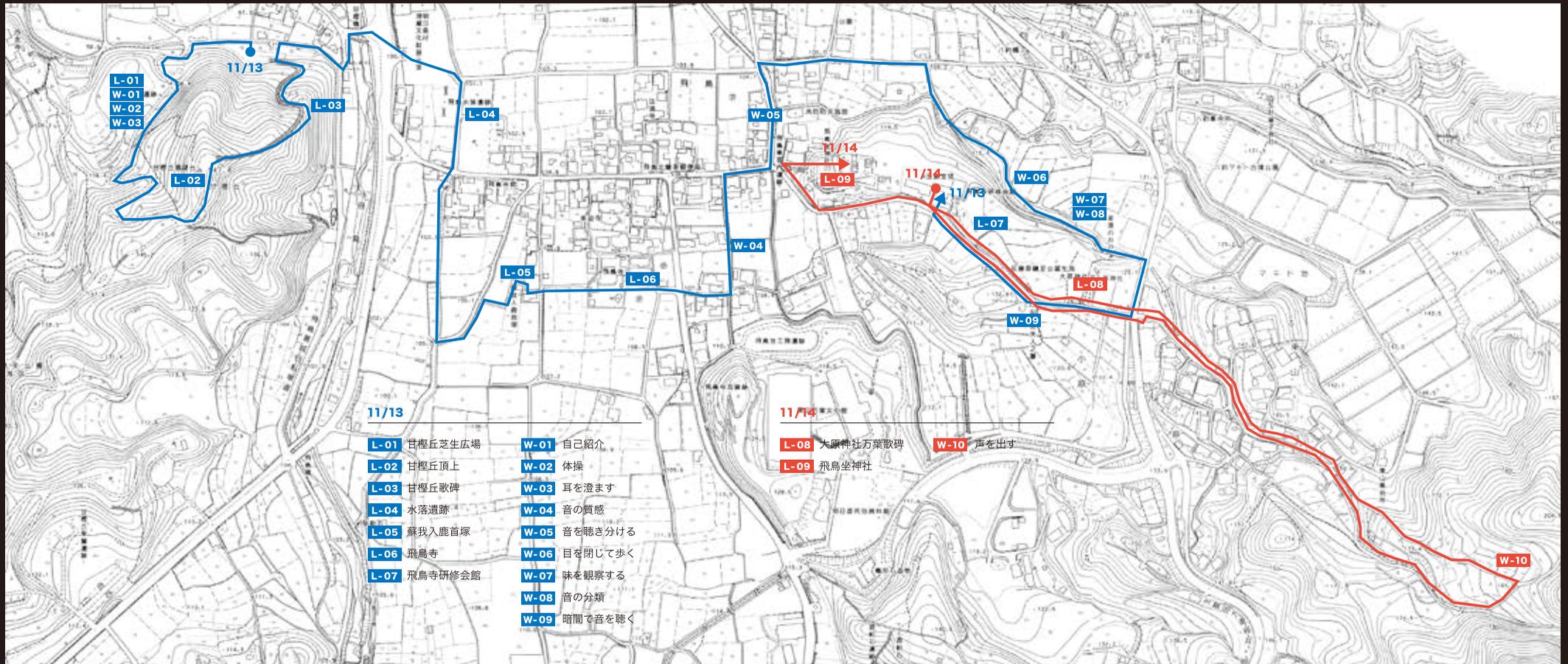
「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」の参加者が、「感情」と「知性」で聴く方法を意識しながら、「音の質感」について、それぞれ赤鉛筆と青鉛筆で書き分けたワークシートより抜粋





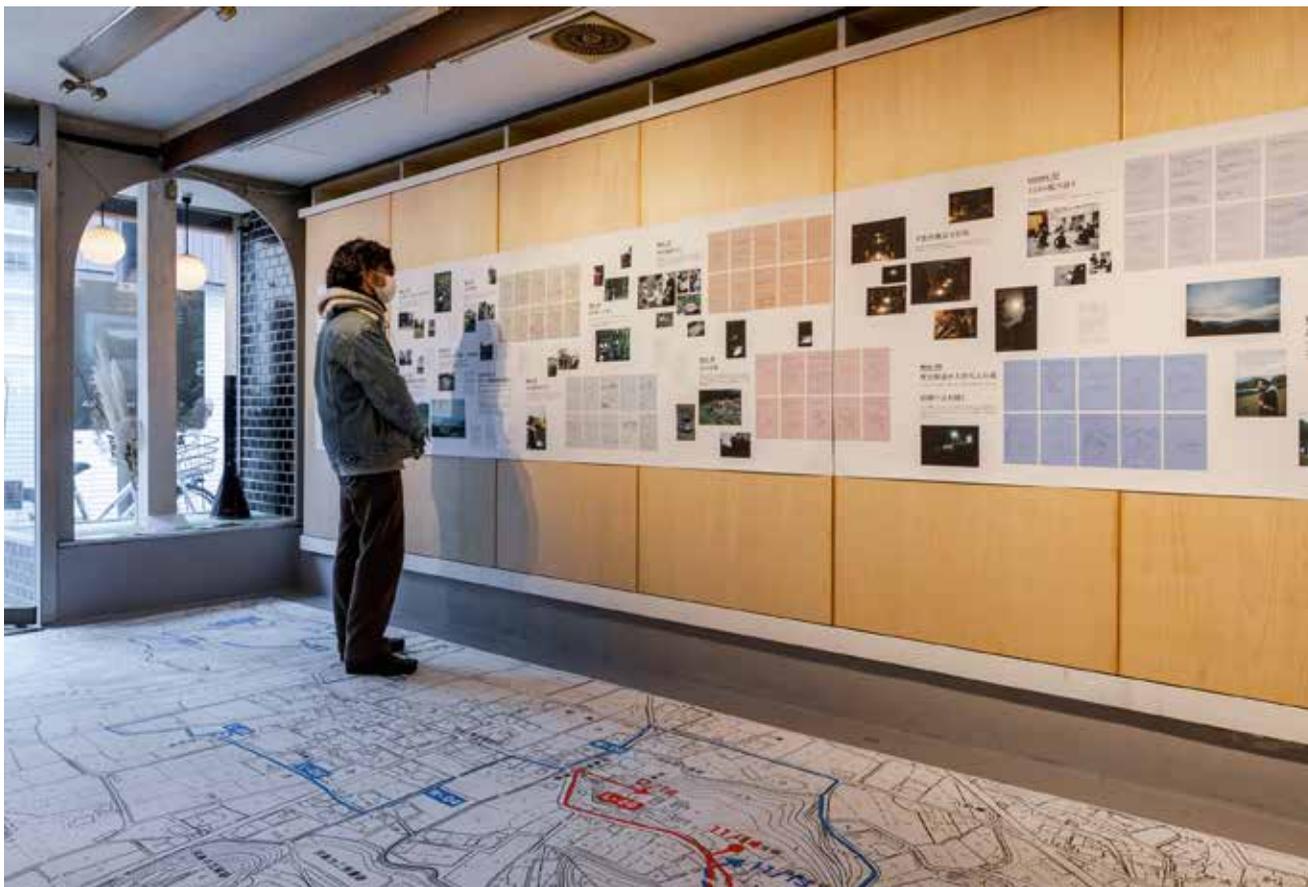
「地奏-CHISOU- vol.2 ASUKA」の参加者が、「感情」と「知性」で感じ取る方法を意識しながら、口にした葉子の「味」について、それぞれ赤鉛筆と青鉛筆で書き分けたワークシートより抜粋





「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」の参加者が巡り歩いた道、各ワークを体験した場所とその内容について記したルートマップ

2021年12月25日～26日  
「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」  
ドキュメンテーション開催



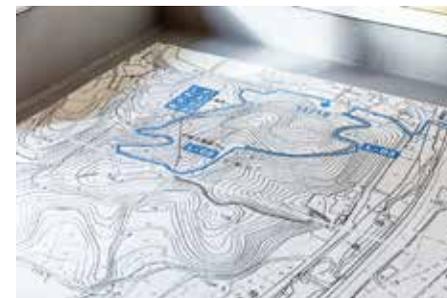
2021年12月23日～24日

「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」

ドキュメンテーション搬入・設営

公演から1ヵ月が経ち、より多くの人々に「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」について伝えるべく、受講者が主体となって、映像や写真、テキスト、資料を用いたドキュメンテーション展を企画制作する。会場のDear Gallery NARAで、インストーラーの高橋和広さんから手ほどきを受けて設営作業をする。

いよいよ展覧会当日を迎える。2日間で約150名の方々が訪れて、思い思いに展示を鑑賞していただく。受講者は来場者を案内しながら、自らの言葉でプロジェクトの趣旨や経験について伝えられるよう心がけた。



## 「サウンドスケープ入門」

中川真（音楽学者／大阪市立大学特任教授／奈良県立大学学術研究員）

サウンドアートやコミュニティアートなど幅広い分野でユニークな研究活動を行っている音楽学者の中川真さんによるサウンドスケープ入門のレクチャーを実施しました。プログラム1「感覚」のキーワードである「聴く」ということの根源的な意味について、また、音を通して世界の捉え方や身体のある方が変容していくことについて、これから考えを巡らしていくための重要な知識とアイデアが得られる時間になりました。

### 「聴く」ことの根源的な意味

「聴く」という字の原型は、中国古代の象形文字に遡ります。「聴」と「聞」という二つの字がありますが、もとになる字はパーツの形がすごく似ています。二つの字はもともと一緒だったのですが、ある時に分かれて二つの字になり、現代では我々も若干使い分けています。私は象形文字が大好きでして、形がすごくシンプル。「聴」の字には人間のパーツが含まれており、一生懸命に人間が音を掴もうとセンサーを広げている姿が表されています。

この「聴く」という字の根源的な意味は何なのかについて考えてみましょう。色々な物音を聴くということが思い浮かびますが、この字に表される人間はどんな音を聴こうとしていたのでしょうか。この字にはパラボラアンテナのような形が含まれていますが、この人間が聴いているのは一体何なのでしょう。

### ものすごく遠いところにいる神様が発する小さな音を聴く

実は、この人が聴いているのは、天にいるカミの声です。いわゆる宇宙を統括しているような超越した存在で、その声をキャッチしようとしている。漢字学者の白川静の解釈によると、祭事と関係する字と共通するパーツがたくさん使われている



るので、「聴」という字の原点は神様との関わりが非常に強いことがわかります。

しかし、カミの声って聴こえるものでしょうか。なかなか聴こえないですよね。ものすごい努力や集中力が必要だし、頑張っても聴こえないかもしれない。どれくらいの距離かわかりませんが、ものすごく遠いところですよ。漢字圏の人々にとって「聴く」という行為は、すごく遠いところの、聴こえるか聴こえないかわからない小さな音をキャッチすることであったということが伺えます。

そのような聴き方を、現代の我々はしているのでしょうか。せいぜい数百メートル圏内の音を聴くぐらいですよ。「聴く」という行為がそもそも持っていた意味から、我々はかなり遠いところにいます。「聴く」という言葉を使う時には、ものすごく遠いところの小さな音に耳を澄ますことが原点なのだと、まず認識してください。

これから皆さんは、一連のフィールドワークを通して、耳や身体を変えていくことになります。そんなにセンシティブな耳になったら気が狂うのではと思います、我々は耳にフィルターをかけて何とかサバイブしてきたので、いきなり古代人の耳を持つと気が狂うかもしれない。だから、スイッチのオンオフの切り替えができるような身体にしていくことが大事ではないかと思えます。

### 現代において神様の声を聴こうとする人々

20世紀前半、ハンガリーにバルトーク・ベーラとコダーイ・ゾルターンという有名な作曲家がいました。ウィーンやパリなどのヨーロッパの中心から少し離れたハンガリーで、オリジナルなクラシック音楽をつくらうと、彼らはハンガリーの村々を訪れ、民謡を録音して回りました。その録音した音からアイデアを得て、すごく面白い音楽作品をつくりました。およそ90年が経ってから、私も同じ村を訪れて、「昔、バルトークという偉い作曲家が来ましたよね」と話しかけても、誰一人覚えていない。村には言い伝えも何も残っておらず、皆が「知らない」と答えるのです。

そのような中、ある村を訪れた時に面白い話を聞きました。村人全員で1年に1回だけ集まり、ある丘の上に登って、空を仰ぎ天の声を聴くのだと。その辺りではキリスト教が信仰されていたのですが、丘に登って天の声を聴くこととキリスト教は関係がなく、その村に代々伝わっていた神様との関係でした。キリストはもっと身近にいるけれど、ずっと向こうの方にいる神様の声を1年に1回聴くとのこと。あながち古代の中国だけの話ではなく、現代でもそのようなことをしている人たちがいるのですね。

#### 聴こえない声に耳を澄ましていた祖父

私は奈良県大和高田市で生まれました。祖父が寺の住職で、小さい頃に不思議なことがありました。祖父が突然、袈裟のような着物を着始めて座敷で座っていると、トントンと木戸を叩く音がして、「村で誰々が亡くなったので来てください」と言われる。「わかった、わかった」と祖父は答えて出かけるのです。そういうことが何回もあったのですが、子どもながらに「順番がおかしいのでは」と不思議でした。木戸が叩かれて「誰かが亡くなった」と聞いてから、慌てて着物を着て出かけるのが必然的な流れなのに、なぜ祖父はその前に着替えているのか。祖父に尋ねると、「その時になったら村からざわざわと声が聴こえてくるから着替えるのだ」と。普通は子どもの方が圧倒的に聴覚が良いのですが、私には全然聴こえない。子どもに聴こえないのに祖父は聴こえる。そのやりとりに関して、村の人も何も不思議に思っていないのです。

今思うと、祖父の耳は、先ほどの「聴」の字の人間にかなり近かったのでしょう。普通では聴こえないような声に、祖父はずっと耳を澄ましていました。子どもだった私は、「どこそこの誰れさんが危ない」とか意識がなく、全く耳を澄ましていなかったけど、祖父は耳を澄ましていたから、村の中で何かあった時にすぐわかったのです。

祖父は耳の聴こえが良すぎて、自分が亡くなる前に横になっていると、遠くの道を歩いている村の人々が「あのお寺のおじいさん、もう亡くなるね」と話しているのが全部聴こえてきたと嘆いていました。そのような人がかつては当たり前のように存在していましたが、近頃は耳の感覚が急速に落ちてきているようです。

#### 歴史資料が伝える音にまつわる話

『日本書紀』には、飛鳥時代に伊豆諸島で海底火山の爆発が起きた時のことが書かれています。太鼓みたいなドーンという音が、奈良の飛鳥でも聴こえたと記述されていますが、これは歴史的にも正しいと証明されています。桜島の火山についても、奈良時代に平城京で聴こえたという記述が残っています。かなり離れた場所からの音が、当時の人々には聴こえていました。

また、約30年前に昭和から平成に変わる時、鳴物停止の令が出されました。各音曲を3日間止めるように政府から命じられて、日本中が静かに慎みました。平成から令和に変わる時には、天皇が亡くならなかったため、鳴物停止の令は出ませんでした。音には火山の爆発など自然の音だけではなく、人間が発する音もあり、それならコントロールできる。音の鳴る領域まで権力が制することによって、人々を支配していたという社会的な出来事です。

江戸時代後期に、仙洞御所で後桜町天皇が亡くなった時は、御触れが出ました。町触というのは法令のようなもので、京都の町触を集めた資料集が京都町触集成なのですが、その中に「鳴物普請停止に候」と書かれている。鳴物とは音楽のことで、三味線や路上での音楽、パフォーマンスを止めなさいと。普請とは建物の工事のことで、それらを全て止めなければならない。普請は途中で解除されたのですが、鳴物は2カ月間停止、さらに魚屋も商売を3日間止めるように命じられました。天皇が亡くなった時に最も忌み嫌われたのが音でした。



天皇が亡くなり新しい天皇に変わる大嘗祭では、寺々は鐘や音を仏事で鳴らしてはいけなくなりましたが、火事が起きた時だけは鐘を鳴らしても良いと言われました。地理的にすごく広い範囲で静寂が求められたのですが、まさに音によって人々をコントロールしてきた歴史があるのです。このように歴史資料の中には、空間的かつ時間的な問題が様々に交差している音の地層を読み取ることができます。

#### 聴くことは、測ること

今日は「聴く」ことについて、いくつかの観点からお話ししていきますので、皆さんには「聴く」とは一体何なのかを自分なりに考えていただきたいと思っています。そのために、まず「測る」という観点から「聴く」ことについて考えてみましょう。測るというのは、自分と対象との関係を明らかにすること、例えば5メートル先に何かがあるとか、あるいは自分が今どういうところに立っているのかということを確認することですね。音を通して世界を測ってみることが、「聴く」ということなのではないでしょうか。

#### 音によって空間を測る——ロバート・フラッド「天球の音楽」

ロバート・フラッドが描いた「天球の音楽」という絵があります。ギリシャ時代にピタゴラスが書いた宇宙と数と音の世界を表していますが、まるで地球のような形をしています。当時は天動説が信じられており、宇宙も同じような形をしています。ギリシャ時代の人々は、宇宙には数理的にすごく合理的な法則があると考えていました。太陽や月など色々な星がぶつかることもなく非常にうまく動いていることを、数によって合理的に説明しようとしていました。そして、音の世界も非常に数理的に説明することができるということに、ピタゴラスは気づいたのです。

一本のピンと張った糸を弾くと、一定のピッチで音が鳴ります。それを半分にす

ると、完全に1オクターブ上の音になります。これを3対2にすると短い方はソの音になり、長い方はドの音になります。4対3にすると短い方はファの音で、長い方はドの音になります。1対2、2対3、3対4という非常にシンプルな張り方によって、4度とか3度とか5度になり、半音などになることをピタゴラスは発見したのです。

音の世界のように宇宙も振動していると考えて図に描かれたのが、「天球の音楽」です。この絵は、宇宙が素晴らしい音を立てて響いている姿なのです。素晴らしい音が響いている故に、宇宙は完全に調和しています。その後、哲学者は皆「聴こえない」とすごく悩んだらしいのですが、それ以降もケプラーや様々な学者が、惑星とメロディの関係や宇宙と音の関係について思索してきました。彼らは音が宇宙を捉える物差しだと考えて、音によって空間を測ろうとしていました。

#### 音によって季節を測る——安藤昌益

江戸時代の医者であり農学者であり革命家でもあった安藤昌益は、音によって季節の変化、すなわち1年の周期を測っていました。彼の書物を読むと、雪中で鳴くキジの声や、雌を愛する鶏の声を聴いて、冬から春に変化していくことを知ったり、中春になって鳴る雷の音の変化でツバメがやってくることを知ったり、モズが始めて鳴くのを聞いて中夏であることを知るなど、自然の様々な音を聴いて季節の変化を知る様子が描かれています。安藤昌益は中国の『礼記』の思想を下敷きに、日本の農業を軸とする大地との対話を通して、このような音の世界を感じていました。

#### 音によって空間を測る——アルヴィン・ルシエ

アメリカの作曲家であるアルヴィン・ルシエは、音によって空間が持っている性質を知ろうとしました。例えば、この空間では空調の音がずっと鳴っていますが、空調の音を消して、電気も消して、全く何も動いていない状態でも、この空間に



は微かな音が鳴っています。この空間自体が持っている共鳴周波数音です。例えば、大きな太い筒を耳に当てると、ポーッという低い音が聴こえます。小さい筒であればポーッという高い音が聴こえます。ビール瓶を耳に当てても、そのような音を聴くことができます。空間には、その空間が持っている響きが必ずあるのです。

それをちゃんと聴いてみようというプロジェクトが、ルシエによる「I am Sitting in a Room」です。タイトルでもあるこのフレーズを彼自身が朗読して録音した音を、スピーカーで再生し、その再生した音をもう一度録音します。それを何度も繰り返していくうちに、すでに2回目くらいではっきりとわかるのですが、その空間の持っている響きのようなものが感じられます。2回目から3回目にかけての段階で、風呂の中で喋っているような感じになっています。その空間自体が持つ反響音をキャッチして、最後には反響音ばかりの音になり、特定のピッチの音だけが強調されて、全く変わってしまうのです。

#### 音によって時間を測る——ビル・フォンタナ

アメリカのアーティストのビル・フォンタナが、オーストラリアのアボリジニの村で実施した、音によって時間を測るプロジェクトについて紹介しましょう。海の上に架かる栈橋に、下まで貫通している丸い穴が8つ開いており、フォンタナは8つのマイクロフォンをそれぞれの穴に入れて録音しました。

海には満潮干潮があり、海面が下がったり上がったりする動きに合わせて、栈橋の下のスペースが広くなったり狭くなったりする。満潮になるにつれてピッチが高くなり、「チャッポンチャッポンチャッポンという音になる。干潮になってピッチが低くなると「ジャッポンジャッポンジャッポン」と音が下がっていく。その音を72時間ずっと録音するプロジェクトです。聴いてみると、満潮と干潮の間で時間が動いていることがわかるのですが、10分くらい聴くだけでは全くわかりません。

満潮と干潮は1日に2回あって、6時間とか12時間くらい経つとピッチが変わっているのがわかるのです。

この作品はオーストラリアのギャラリーで展示されましたが、天井に設置された8つのスピーカーから、リアルタイムで現地から送られてきた音が降りてくるというインスタレーション作品でした。まさに音によって時間を測るというアプローチですね。

#### 音によって心理を測る——清少納言『枕草子』

上述した例は、外部にある空間や時間を音によって測っていると考えられますが、心理的なものを測ることについてもお話ししましょう。清少納言が書いた『枕草子』の中に、「ものへだてて聞くに」という特徴的な記述が何度も出てきます。清少納言はかなりの引っ込み思案で、あまり前に出てこない。物を隔てて色々なものを聴くことで、自分とそのものとの関係や、物理的あるいは社会的な距離を測ろうとしていました。

国文学者の石田謙二は、清少納言のこのような書き方は非肉体的であると論じましたが、私はそれとは真逆の考えでして、ここにこそ清少納言という人間の肉体的な特性が現れていると思います。耳は肉体の一部ですから、何かを隔てて聴くということに、清少納言の身体性が現れている。例えば、当時は通い婚だったので、男の人がやってきて指でポツポツポツと叩く。中で聴こえてはいるのですが、あえて意地悪をして反応しない。少しだけ衣の音をシュッシュシュと立てて、向こうに気づいてもらおうとする。そんなふうにも、ものを隔てながらやりとりすることで、音を通して心理的なものを測ろうとしていたのではないのでしょうか。

#### 聴いていない音——武満徹「音、沈黙と測りあえるほどに」

これらの例の他にも、もっと色々なものが音によって測れるのではないかと思います。

ます。これから皆さんはフィールドワークを通して様々な音を聴きます。空間を聴くかもしれない。時間を聴くかもしれない。心理的な音を聴くかもしれない。密林で鳥や虫の鳴き声がたくさん聴こえるように、自分と対象との関係性を音として感じるかもしれません。けれども、「聴く」ということは、聴いていない音があるということでもあります。今、皆さんは私の声に注目していますが、向こうで子どもが喋っている声は聴いていません。私の大きな声が皆さんを支配しているから、他の声が聴こえてこないのです。あえて私の声を避けて向こうの声を聴くことも可能です。どのような声や音を聴いていないのかが、すごく大切なのです。聴いていない世界は、ものすごく広いのですから。

20世紀を代表する作曲家の武満徹の代表的な作品に、「音、沈黙と測りあえるほどに」があります。沈黙がこの世界を覆っていて、サイレンスの世界の聴こえない音「unheard sounds」の中で、どんな音の捉え方ができるのかが、この作品のポイントだと彼は言いたかったのでしょう。聴こえている音って世界のほんのひとかけらでしかなく、その周りには聴いていない音がたくさんあるのです。

「聴」という字は、神の声など、果てしなく遠い場所の音に耳を澄ますことを意味していたとのことだが、日を追うごとにこの話が味わい深くなってきた。そもそも聞こえるか聞こえないかの微妙な音を「聴く」とはどういうことなのか。「聴く」ということは、ある程度は能動的な行為なので、「聴こえるだろう」という予測や、「聴いたことがある」という経験がなければ成立しないように思う。かつての人々は「神の声を聴くことができる」「遥か遠くの、あるかないかわからないような音が存在する」という確信があったのか、何もないところから音を見出していたのか。存在しているけれど「聴いていない」音に気づくということをもう一歩越えて、「ないかもしれない」音を「聴く」という、確信も予測もなく、想像もできない音に真摯に耳を傾ける行為をしようと思う。

馬淵悠美

中川先生の生き生きと時空を飛び超えるレクチャーの躍動感で、心が自由に解放された。特に興味深かったのは、サイレンスの世界の聴いていない音。そんなことは考えたこともなかった。サウンドスケープについて自分なりに調べてはいたものの、私の見解をはるかに上回る壮大な内容に、音への意識や感覚、感情が大きく変化した。聴こえてこない音、聴こえていてもあえて拾わない音。ひとかけらの音の向こうにあるサイレンスに投影される自分という大宇宙を垣間見た知的なショック。さらに印象的だったのは、「サウンドスケープとは何か」という問いに対して、「わずか20分で説明できる」と前置きしながら、あえてその答えを明言しなかった中川先生の聡明な示唆。これを素直に受けとめ、自分なりの「聴くとは何か」を見出したい。

かとうあつこ

## 「音から読み解く『万葉集』と明日香村」

井上さやか（日本文学・日本文化（万葉古代学）／奈良県立万葉文化館指導研究員）



『万葉集』の研究者である井上さやかさんによる案内のもと、奈良県立万葉文化館の展示室を鑑賞した後、『万葉集』の歌を手がかりに明日香村の歴史とサウンドスケープについて学ぶレクチャーを実施しました。これから明日香村でフィールドリサーチやプロジェクトの制作を進めていくにあたり、「当時の日本の人々は音を通して世界をどのように捉えていたのか」を想像するための糸口を掴むことができました。

### 『万葉集』の歌は声に出して歌うもの

『万葉集』の歌は、もともとは文字で書かれたものではなく、声に出して歌うものでした。そのような歌を後から文字で書いて残したのが『万葉集』です。現存する最古の歌集ですが、『万葉集』には今は残っていない歌集名がいくつか出てくるため、『万葉集』より以前に文字として書かれた歌集があったことがわかります。

平仮名やカタカナがない時代の書物でしたので、外国語の文字であった漢字で全て書かれました。全く言語体系の異なる中国語のためにつくられた漢字で、当時の大和言葉を表そうとしたのです。音声言語であった日本語を漢字で書く時に、様々な工夫をしていたことについて、五つの歌を例に挙げながら解説しましょう。

#### 1—寒過 暖来良思 朝鳥指 滓鹿能山尔 霞軽引

「寒」と書いて「ふゆ」、「暖」と書いて「はる」とよみます。寒い季節や暖かい季節という意味をそのまま当てたのでしょう。「冬過ぎて 春来<sup>きた</sup>るらし 朝日さす春日の山に 霞<sup>かすみ</sup>たなびく」とよみますが、漢字だけで書かれていると、よみ方もわからないし、歌かどうかさえわからない。幸い短歌ですから、五七五七七の31音というのがヒントになり、そのリズムに合わせて読んでいくこととなります。

「冬が終わって春が来たらしいよ、朝日のさす春日山で、霞がたなびいているから」という意味でして、季節の移り変わりを詠んでいる。朝日の「日」を表す字が「鳥<sup>からす</sup>」と書かれている。太陽神のお遣いとして鳥がいて、月神のお遣いとして蛙がいるという発想が中国から日本にやってきて、当時の政権にも浸透していました。「日」という字を書かず、あえて太陽神のお遣いである「鳥」と書くところが、ちょっと洒落ていて工夫を感じます。

「春日」と書いて「かすが」とよむのは、「飛鳥」と書いて「あすか」とよむように、独特な歌のきまり文句として定着しているからこそその書き方です。また「滓」と「鹿」という字を組み合わせると「滓鹿<sup>かすが</sup>」と読ませています。発音だけが重視されており、漢字の意味として良いか悪いかはあまり重視されていなかったようです。「来るらし」も「来良思」と書かれていますが、漢字の意味は関係なく、「良」は「ら」という発音として、「思」も「し」という発音として、「らし」という日本語の助動詞を表現するために、漢字を平仮名のように使っていました。

このように1字1音に対応しているものが用例として最も多かったのが『万葉集』だったので、万葉仮名と呼ばれていますが、木簡にも使われたり、『古事記』や『日本書紀』の歌の部分にも用いられたりしました。平仮名やカタカナと同じように、1字1音でないものは万葉仮名とは言いませんので、『万葉集』は全て万葉仮名で書かれているというのは正しくありません。

#### 2—若草乃 新手枕乎 巻始而 夜哉将間 二八十一不在国

「二八十一」もクイズみたいな書き方ですが、漢数字の「二」はそのまま「に」とよみ、「八十一」は「9×9=81」なので「くく」とよむ。当時から掛け算の九九はあって、山田寺の瓦にもヘラで書かれた掛け算九九の跡がある。建築関係など計算が必要な職業があり、ガラス玉や富本銭などをつくらっていた技術者は大陸から亡命してきた人々



だったようですので、技術と一緒に数学的な発想も入ってきたのでしょう。

この歌は新婚初夜を詠んだ歌でして、当時は一夫多妻制で複数の人と結婚することもあり別居婚が一般的だったようで、「新婚の最初の日到手枕を初めて枕いて、これから夜を隔ててしばらく通ってこないということはないよ、あなたのことが好きだから」という意味です。

### 3—毎見 恋者雖益 色二山上復有山者 一可知美

これは長歌の一部です。今でこそ和歌と言うと短歌ばかりで、五七五七七で一つの歌というのが一般的ですが、古代の歌には五七五七七……と続く長い歌も多く、五七を何回も繰り返すことで長い歌が簡単にできる。そのようにつくられたのがこの歌で、五七五七の途中を抜き出したものになります。

『万葉集』には浦島太郎の話も長歌として載っていますが、五七五七五七というリズムでずっと語られていく。現代だと物語と和歌は明確に分けられていますが、古代の人々は歴史を語る時もリズムに乗せて暗唱していた。文字がない時代からずっと語られてきたので、記憶術の一つとしてリズムをつけた言葉が用いられていたのでしょう。枕詞など特有の表現技法はその名残だと言われています。

古い歌で一般的だった五七五七五七五七というリズムでは、意味の切れ目が二句ずつであることが多いので五七調と言われます。平安時代になると、長歌が廃れて短歌ばかりになり、五七五で意味のまとまりができることが多くなります。現代のかるたや百人一首でも、五七五が読み札で、最後の七七だけが取り札になっている場合が多いですが、『万葉集』の歌をかるたにすると、非常に意味が取りにくくなったり、途中で途切れているような気がしたりして、古代の歌のリズムが平安時代以降の七五調とは異なることがわかります。

この歌は「見るごとに 恋はまされど 色にいでは 人知りぬべみ」とよみますが、

「山上復有山」は「山上にまた山有り」という漢文です。山という字を書いて、その上にもう一つ山という字を重ねて書くと、「出」という漢字に見える。「色に出でば」とは「そぶりに出す」という意味ですが、クイズみたいですね。「出」の字は簡単なので知っているはずですが、あえて「山上復有山」と五文字も使って書くのは、明らかに遊んでいる。このような表記の仕方を古代の人は面白がっていたようで、歌の意味だけを鑑賞していくと『万葉集』の面白さを取りこぼしてしまう気がします。

### 4—如是為哉 猶八成牛鳴 大荒木之 浮田之社之 標尔不有尔

「かくしてや なほやまもらむ 大荒木の 浮田の社の 標にあらなくに」とよみますが、「このようにして、いつまでも守っていくのだろうか、私は大荒木の浮田の社の標ではないのに」という恋の歌でして、「相手を守ってあげても何の利益もない」と嘆いているようです。

「牛鳴」は、オノマトペである牛の鳴き声を転写した言葉になります。当時の人は牛の鳴き声をどのように聞いていたのでしょうか。現代では牛の鳴き声は「モーモー」と聞こえますが、古代の人は「ムームー」と聞いていたらしい。なので、この2文字「牛鳴」で「む」とよませています。「なほやまもらむ」の助動詞「む」の音を「牛鳴」で表すという非常に面白い例です。

### 5—垂乳根之 母我養蚕之 眉隠 馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而

「たらちねの 母がかふ蚕の まよごもり いぶせくもあるか 妹にあはずして」とよみ、眉毛の「眉」という字で書かれていますが、意味としては絹糸をとる「繭」を表しています。このような当て字が『万葉集』ではたくさん用いられています。「蚕が繭にこもっているように、心がこもってうっとりしい」ということを意味しています。

「馬声蜂音」という文字ですが、2文字ずつ分けて、馬の鳴き声をどのようにに聞



いていたのかを考えてみましょう。現代だと「ヒヒーン」というのが一般的ですが、古代の人は「イーン」と聞いていたらしい。そのため「馬声」と書いて「い」を表します。一方の蜂は「ぶぶぶぶぶぶ」と飛んでいると当時の人は感じていたようで、「蜂音」と書いて「ぶ」を表します。

ということで、「馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿」は「いぶせくもあるか」と読みます。「いぶせく」というのが「心がこもってうとうしい」ことを表す言葉です。「くも」は昆虫の蜘蛛という字を当てている。本当に当て字のオンパレードでして、現代の国語が得意な人ほど逆に読めないのではないかと思うくらい、変な使い方をいっぱいしています。

#### 中国文化をアレンジして日本文化と融合させる

奈良時代になっても、このような表記方法は色々と使われているのですが、平安時代になると平仮名やカタカナができて、『万葉集』は読めなくなっていく。千年以上にわたって歌集としての研究資料が蓄積されているのですが、いまだに読めていない歌も存在しています。

初期の飛鳥の万葉歌をご紹介しますと思いますが、前提として飛鳥に都があったことをご承知おきください。平城京や平安京のような碁盤の目状の街並みの都ではなく、もっと古い形の都です。西安や長安など中国の都は、外敵から守るために街を全て高い堀で囲っていましたが、日本だと門はあっても横の堀は途中で途切れている。中国風の都城を真似て、碁盤の目状の街並みをつくりながら、それを全て囲う長大な壁はつくりたくないというように、中国文化をアレンジした形で取り入れています。もともと「都」の字は、堀で囲われた中国の街並みをイメージするのですが、日本に輸入された時には「宮がある場所」という意味で「みやこ」という発音はその字に当てられた。

日本には春になると芽が膨らんで植物が膨張していくという意味の「はる」とい

う言葉があり、その言葉が中国の「春」の字と融合していきました。そのように、中国の発音を日本風にした音読みと、日本語本来の語源を持つ訓読みの両方が日本語にはあり、複雑になるとともに、色々な表現が可能になってきました。

#### 都としての飛鳥

国の史跡である「飛鳥京跡」はかつては「伝飛鳥板蓋宮跡」と呼ばれていましたが、発掘調査で少なくとも三期にわたる宮の跡が重層的にあるということがわかり、名称が変更されました。舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、齐明天皇と天智天皇の後飛鳥岡本宮、そして天武天皇と持統天皇の飛鳥浄御原宮、少なくとも70年間に及ぶ歴代の天皇の宮跡が同じ場所から発見されたため、現在は「飛鳥京跡」と呼んでいます。

「飛鳥」と書くようになったのは、実際に鳥が飛んでいるからというより、概念として、鳥がたくさん飛ぶような場所には、鳥の餌になる生き物がたくさん棲んでいて、土地が豊かであることを象徴していたからではと考えられます。現在は「明日香村」と書きますが、万葉文化館がある辺りは大字名として「飛鳥」が残っている。『万葉集』では、「明日香」と書かれているものが一番多いですが、他にも「飛鳥」と書かれていたり、万葉仮名で「阿須可」とか「安須可」とか色々な当て字で書かれていたりします。飛鳥京跡からは「飛鳥寺」と書かれた最古の木簡が出土しており、少なくとも7世紀後半には歌の文句として定着した「とぶとりのあすか」に基づき「飛鳥」という書き方が用いられていたことがわかります。

#### 飛鳥の雪を詠んだ歌

サウンドスケープという観点から選んだ歌について紹介します。例えば、雪が降る音は、無音だと言った方がいいかもしれませんが、やはり気配を感じます。「我が



里に 大雪降り 大原の 古りにしりに 降らまくは後」という歌がありますが、「我が里」は、天武天皇が住んでいた飛鳥浄御原宮だと考えられます。当時、雪は天からの祝福だと考えられ、豊作を約束するものだったため、都に大雪が降ったことを天皇が自慢している歌です。しかも「あなたが住む、大原の古びた里に降るのはずっと後でしょう」と相手をからかっている。それに対して藤原夫人は、「何を言っているのですか、私の里の丘に棲む水の神に命令して降らせた雪のおこぼれが、あなたのところに降ったに過ぎない。本当に祝福されているのは私のところですよ」という歌を天皇に返しました。よほど親しい間柄でないと詠めないような歌ですね。

この藤原五百重という人が住んでいた大原の里は、今は「小原」と書きますが、藤原鎌足が生まれた場所だと伝わる藤原神社が残っている。鎌足が使ったと伝えられている井戸の跡もありますので、ぜひ秋のフィールドリサーチで訪れてください。飛鳥坐神社のすぐ近くです。

また、「大口の 真神が原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに」という歌にあるように、当館の辺りは「大口の真神が原」と呼ばれていました。「大口の」は枕詞で、「真神」は狼のことです。かつてはこの辺りに狼が生息していたらしい。「大きな口を持っている狼が住んでいるこの真神が原に雪が降っている。どうか激しく降ってくれるなよ、ここに家もないのだから」というような意味でして、女性が、雪が激しくなるのを見て、訪ねてきた恋人が帰っていくのを心配している歌です。

#### 水の流れを詠んだ歌

当時も飛鳥川が流れていたもので、水の流れについて頻繁に詠まれています。例えば、「明日香川 瀬々に玉藻は 生ひたれど しがらみあれば 靡きあはなくに」という歌の「玉藻」は藻ですが、水草に対する褒め言葉が「玉」でして、「玉のような赤ちゃん」という時と同じ意味ですね。その藻が激しい川の流れで揺れて絡み

合うように、私たちも互いに靡き合っていきたいが、しがらみがあるので靡き合えない、というような恋の歌です。

「ふさ手折り 多武の山霧 繁みかも 細川の瀬に 波の騒げる」には、石舞台古墳の奥にある細川が詠まれています。「多武峰に深く立ちこめた霧が濃いためか、細川の瀬の波音が激しく聞こえる」という意味で、川の流れの清らかさや激しさを表現しています。「明日香川 明日も渡らむ 石橋の 遠き心は 思ほえぬかも」も川の流れをイメージさせる歌で、背景に水の音がする気がします。「明日香川の名前の通り明日も渡ろう。川の流れの中に置いてある飛び石のように、自分の心は離れていないよ」という恋の歌です。

#### 時の移り変わりを詠んだ歌

「采女の 袖吹きかへす 明日香風 みやこを遠み いたづらに吹く」は、飛鳥から藤原に都が移った後に詠まれた歌として有名です。采女とは天皇にお仕えた才色兼備の女性のことで、身分がそれなりに高く、教養もある美しい女性だけになれる特別な役職です。その煌びやかな衣装の袖を翻す風を詠んでおり、高貴な人々が集う都のイメージを彷彿させますが、今はもう飛鳥には都がなく、誰もおらず、ただ風だけが虚しく吹いている、という隔世の感を表現した歌です。

飛鳥から藤原京まで実際はそれほど離れていませんが、都の在り方や仕組みが大きく変わったのがこの時期でした。飛鳥の時代の街並みは中国風の基盤の目状ではなく、衣装も韓国風でしたが、藤原京では中国風の衣装になっていった。時代の移り変わりが象徴的に詠まれています。

飛鳥では漏刻と呼ばれる水時計が初めてつくられました。水時計は水音と水位によって時の移り変わりを計ることができます。これも中国から渡ってきた技術ですが、人々に時報として鐘や鼓で時を伝えていました。「皆人を 寝よとの鐘は 打

つなれど 君をし思へば 寝ねかてぬかも」には、時を伝える鐘の音が表されていますし、「時守が 打ち鳴す鼓 数みみれば 時にはなりぬ 逢はなくもあやし」の歌からは、鼓の音が時報を担っていたことがわかります。

#### 飛鳥を懐かしみ詠まれた歌

奈良時代以降、飛鳥を懐古した歌が盛んに詠まれるようになり、鳥の鳴き声などがよく出てきます。「わが背子が 古家の里の 明日香には 千鳥鳴くなり 鳥待ちかねて」は、長屋王が謀反の罪で亡くなる以前に飛鳥を想って詠んだ歌です。「鳥」は人工の庭園を意味しました。天皇だけが持つ人工の庭園を、蘇我馬子も持っていたので、「鳥の大臣」と呼ばれていました。現在も鳥庄という地名が残っていますが、その鳥を待ちかねて千鳥が鳴くという表現が出てきます。

他にも川の水音や鶴の鳴き声と羽ばたき、蛙の鳴き声など、それらの音を通して飛鳥の古き都を懐かしく思ったり嘆き悲しんだりする歌が、奈良時代には詠まれています。春雨が降って激しくなった瀬の音を聴きたい、と詠んだ歌もあります。

#### 音と声、動物と人間を明確に分けない

当時は音と声をそれほど厳密に使い分けていませんでした。「音」という字で「おと」や「こえ」、「ね」という大和言葉を当てますが、「おと」という読み方にも「音」と「声」の両方の漢字を当てはめていた。「春風の声」と書いて「声」を「おと」と読ませたり、「ホトトギス 鳴くなる声の 音の遙けさ」では「声」と「音」とを重ねていたりする。現代とは違う感覚で音と声とを捉えていたように思います。動物と人間をそれほど明確に分けておらず、自然の音が非常に身近にあった時代に詠まれた歌が『万葉集』に残されているのです。

これまで『万葉集』と言えば、のんびりとしたイメージがあったが、井上先生のお話を伺って当時の生活や情勢について学ぶと、歌を詠むことは単なる娯楽ではなく、知識や思想を伝える方法であり、飛鳥時代や奈良時代の人々にとって生活の必須手段だと理解できた。それを踏まえると、飛鳥時代は激動の時代で、穏やかな印象から切羽詰まったものへと変わった。「地奏」でも、参加者の飛鳥や明日香村のイメージを覆すような、驚きを含んだ内容を伝えることができれば面白いのではないかと。

奥山祐

古代の人々は現代の人々よりも音に対して敬意を払い、音と共存していたように思った。歌の中には、動物や川、山などの自然環境が描かれており、それが人々の日常生活とつながっているように感じた。現代のポップスの歌詞でも、自分たちの周りがある環境が描かれているが、当時の人々による詞とは異なっている。レクチャーを受けて、現代では言葉や音に対してあまり意識していない点が多いのではないかと考えるようになった。誰かに何か伝える際には、SNSを使ってメッセージを送るし、しかも機械が音声変換や自動変換してくれる。また、携帯電話で音楽が聴けるようになったため、どこに行くにしてもイヤホンを持って行き、外の音をシャットダウンしてしまう。もちろん便利な時代になってありがたいけど、周りから意図せずに入ってくる音にも意識してみようと思った。

藤丸孝太郎

『万葉集』の歌から、人の心と自然が一体化していたことを知った。自然の音（または声）、景色、香りなどを、歌人たちは恋や趣、安らかさ、悲しさなど、自分の心と一体化させ、歌に詠んでいたことが感じ取れた。人間は自然の中で生き、他の動物と同じように自然を感じ、自分と照らし合わせることで自然と向き合うことが大切だ。今も昔も同じ人間なのだから、昔の人がしてきたことを私たちができないことはないはず。昔の人が自然を感じとり、歌を詠むことで自分の心と一体化させたように、私たちも自然と自分自身に真摯に向き合ってみる習慣をつければ、より研ぎ澄まされた感覚で生きることができるのではないかと。

椋田侑馬

## 「芸術祭『MIND TRAIL』が 奥大和にもたらす可能性」

齋藤精一（クリエイティブディレクター／パノラマティクス主宰）



行政や企業と国内外でプロジェクトを企画制作してきたクリエイティブディレクターの齋藤精一さんから、奈良の奥大和エリアを舞台にした芸術祭「MIND TRAIL」など、「感覚」をテーマに手がけてきたプロジェクトについて話を伺いました。世の中の価値観の変遷、アートと経済の関係性、社会におけるアートの意義など、これからの時代にアートをプロデュースする上で熟考すべき様々なことについて話題はどんどん広がり、受講者とのディスカッションが活発に行われました。

### 建築から広告、そして美術の分野へ

「感覚」は、僕自身も創作を考える上で根源にあるテーマです。商業的な作品、すなわちクライアントの依頼を受けてつくる作品もあれば、行政と一緒につくる作品も多くあります。もともとは東京理科大学とコロンビア大学で建築を学んだ後、ニューヨークの建築事務所で働き、自分で事務所を開いていた時もあります。その時、9.11が起りまして、建築の仕事自体がほぼ全米で全てストップしました。グラウンドゼロと呼ばれる場所に誰が建築を建てるかという話になり、驚いて建築業界を残念に思い、業界を一度離れました。その後、もう少し社会や経済と地続きの広告の分野に入り、ニューヨークの広告代理店で働きました。

しかし、大量消費を促すものをつくっていることに疑問を抱き、美術作家として作家活動を始め、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」に作家として参加したりしました。2001年に真鍋大度と共にライゾマティクスという活動を始め、2006年に同名の会社を立ち上げましたが、メディアアートという分野が芸術の領域になかなか入っていないという問題意識がありました。フリーランスのアーティストだと食いつぶれてしまうのなら、自分たちでお金を稼ぎながら作品をつくり続けられるエコシステムをつくれなにかと思い、アーティストが集まってつ

くった会社です。作品をつくりながらも、クライアントからコミッションワークを請け負うようなチームです。

### アーキテクチャーをつくることへの興味

ライゾマティクスは2016年に組織改革をして、リサーチ・デザイン・アーキテクチャーの3部門に編成されました。アーキテクトではなくてアーキテクチャーにしたのは、構造をつくりたいという思いがあったからです。建築的な構造のみならず、社会構造やチーム体制などにも興味があり、アーキテクチャーという名前を付けました。昨年末には組織変更してパノラマティクスというチームを立ち上げました。

色々なクライアントと付き合うなかで、アートやデザイン、建築、まちづくり、ソーシャルデザインなど、業界的に近しい分野がなぜ分断しているのかについて疑問を感じていました。Rhizome（リゾーム）はもともと超複雑系構造（根っこや地下茎のようなもの）を意味しますが、ライゾマティクスは、異なる分野をどんどんつないでいく存在としてつくりました。異なる業界をどのようにつないでいくか、つなぐことにより、文化という形で昇華させることができないかと考えています。分野を横断し共に考えて実装し、社会に還元することが僕の大きな役割だと思っています。

### 責任を担いながら行政や企業とつくること

2009年から全体を統括する、いわゆるクリエイティブディレクターの仕事が増え、広告代理店とも対等に渡り合いながら、お金の管理をしつつ直接クライアントに営業する仕事をするようになりました。それと同時に並行でライゾマティクスとしては色々な作品をつくっていました。2011年頃から、広告する商品の考え自体が間違えていると、クライアントに意見するようになり、自分たちが設計図を書く立場になりたいと思ったところもあって、広告のプランニングもしていくようになり

ました。より上の立場になるというよりは、責任をしっかりと担いながらつくるとい  
う方向にシフトしていきます。

例えば、企業と話し合うなかで、誰も使ったことのない場所でファッションショー  
や新車発表会を行いたいとなっても、法律や条例が理由でできないとなる。どのよ  
うな条例があり、なぜできないのか、という会話を自治体としていくと、条例自体  
が表現に対して開かれていないことがわかってくる。議員と法律について議論した  
り、自治体に規制緩和をするように働きかけたりして、市町村の首長と仕事をす  
ることが多くなりました。パノラマティクスへと変革してからは、ソーシャルワーク  
ショップや万博など行政への提案が増えています。この流れは、コロナ禍で立ち上  
がった奈良県奥大和エリアでの芸術祭「MIND TRAIL」にもつながっていきます。

#### 世の中の価値観は移り変わり、命の豊さの時代へ

世の中の価値観は移り変わり続けていきます。例えば、戦後のモノがない時代には、  
モノの豊かさが求められながら復興が進み、1964年の東京オリンピックがそ  
の象徴にもなり、その後、心の豊かさが求められるようになりました。さらに、コ  
トや文化の豊かさが求められ、1970年に大阪万博が開かれてバブルが訪れ、新し  
いスタイルやファッション、アート活動が生まれ、表現の場所が生まれたのが80  
年代でした。2000年代からはソーシャルという言葉が増え、社会の豊  
かさを謳うようになった。広告業界でも単に商品が安ければ良いということではな  
く、いかに社会性を持っているかが語られるようになってきました。2020年頃か  
ら言われるようになったのが、人の豊かさです。SDGsもその考え方から出てき  
たものだと思います。2020年3月に新型コロナウイルス感染症の問題が起きてか  
らは命の豊かさではないかと僕は感じています。人の命だけではなく、生物や環境、  
モノの命も含めて考えていかなければならない。

世界の仕組みや哲学は変わり続けています。SDGsは国連に加盟する国々が賛  
同し、それを目指して協働していますし、大阪関西万博もそれをテーマに定めて進  
めている。世界的な問題に群として立ち向かっていこうという時代になりました。  
2000年代後半からプラネタリー・バウンダリー（地球の限界）について、2020年頃  
からはアントロポセン（人新世）について言及されることが増えています。

#### 方程式が崩れて、分岐点に立たされる我々

もう一つの新しい価値観として移住があります。都市集中型ではなくて地方分散  
型になろうとしている。SDGsの話にしても、このまま気温が上昇し続けるのか、  
我々は分岐点に立っていて、いかに一人ひとりのマインドセットが変わり、人の営  
みに反映されていくのかが問われている。2020年に新型コロナウイルスが世界を  
襲って以降、多くの方程式が崩れたと思っています。今までならこの方法で商品が  
売れたとか、人はこんな住み方をするとか、そんなことの多くは全て崩れ去り、再  
構築する時期が来ていると肌で感じています。

全体的な傾向を見ていると、SNSでの発信もそうですが、コロナ禍で最初にア  
クションを取り始めたのはアーティストの方々です。アーティストは作品をつくる  
だけではなく、人間はこうあるべきではないか、こう変えていくべきではないかと  
いう、哲学を提示してきました。次に反応したのがクリエイティブの人たち。例えば、  
手を洗うポスターを制作したり、映像をつくったり、閉館した美術館をこのような  
形なら開けることができるのではないかと課題解決する。産業界がすごく遅かった  
ように僕は思っています。この構造自体がすごく象徴的で、どの時代でも起きてい  
るのではと考えています。



### 感覚をテーマにした展覧会「感覚の島」

「MIND TRAIL」を企画するコロナ禍より前に、人間の感覚に焦点を当てた芸術祭「Sense Island」を実施しました。会場は横須賀にある猿島という無人島で、陸から1.5キロほど離れており、フェリーで10分くらいの場所にあります。東京湾で唯一の自然島と言われています。社会の様々な動向の中で価値観が変わっていく今、人間は感覚についても一度考えなければならない、そして、自分自身が生物的に世界をもう一度知る必要があるという思いからつくったアートイベントです。

当初は行政の担当者から「ライトアップをしたい」という相談を受けたのですが、京都の神社仏閣が色々な形でライトアップされているのが生理的に受けつけず……やはり本来あるべき姿で見たい。そこで、真っ暗にすることを提案しました。そうすることで、最終的には人間の感覚をアップデートするようなイベントにしたいと考えました。

「MIND TRAIL」を企画する奈良県の方々も訪れ、非常に感銘を受けたとのことでした。芸術祭がスタンプラリー化しているという問題意識があり、インスタ映えも大事ですが、順々に作品の写真を撮って回るものになってしまっている。本来は作品と作品の間にある風景や人、食べ物こそ大事です。基本的に猿島では、携帯電話のライトも通話もネット検索も全部手放し、暗闇の中で感覚を研ぎ澄ます体験をしてもらうことを、行政主導で2019年に開催しました。主催は横須賀市都市魅力創造発進実行委員会で、文化庁の日本博の助成金も一部ありますが、ほぼ全て横須賀市の税金で賄っています。自分たちで責任を持って実施しないと継続していきませんので、できるだけ他のスポンサーを入れずに実施することを意識し、まずは自分たちの財源だけで実施することを市長に推奨し、実装していきました。

哲学の一手前ぐらいの内容だったので、どのように受け取られるのか不安もありましたが、非常に多くの方々を受け入れてもらえました。芸術祭では地元の人々

との協働が大切です。最初は横須賀市民向けのチケットはあまり売れませんでした。都心部からどんだん人が来て「私たちも行きたい」となり、最終的には横須賀市民も多く訪れるイベントになりました。

### 哲学の時代に向けた、歩く芸術祭「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」

2020年にコロナ禍で奈良県から「地域の観光を止めない方法はありますか」という相談を受け、真っ先に提案したのが「MIND TRAIL」でした。これからは哲学の時代になると思い、自然と人をつなぐ媒介として芸術が使えないか、芸術を再定義できないかと考えました。様々なアートイベントが中止や延期、オンライン化するなかで、多くのアーティスト活動の機会が失われました。コロナ禍という未曾有の危機に直面してアーティストが真っ先に反応したこともあり、彼ら彼女らの活動エネルギーを表現する場所をつくりたいと思いました。

奥大和エリアでの観光事業でしたので、まずは「歩く」ことを考えました。僕は葉山という海岸部のまちの比較的郊外に住んでいますが、家の中にずっと居るのは精神的に辛くて歩き始めました。歩いていると、「今日は満月だ」とか「金木犀の香りがする」とか「こんな場所に道祖神がいる」とかたくさんの発見がある。吉野であれば、修験道や金峯山寺、千本桜など色々な歴史があるエリアを、違うマインドで歩いてみたいと思いました。5月に相談を受けてからすぐに構想をまとめ、補正予算が決まると同時に並行して企画を進めていきましたが、予算については横須賀市と同様、全て奈良県の予算で賄っています。

奥大和は奈良県の中部から南部に位置する19市町村を含むエリアで、僕としては実はここには日本独自のサーキュラーエコノミーが存在しているのではないかと考えている魅力的な地域です。コロナ禍での開催のため、基本的には屋外展示にして、密な状況つくりないようにしました。また、我々の強みであるICTやデジタ

ルを活用し、電波やGPSが入らないような場所でも歩きながらマップを見られるようにしました。

#### 人間による創作物なのか自然なのか、作品の境界が曖昧になる感覚

実施エリアは吉野町、曾爾村、天川村ですが、それぞれ特性が異なります。曾爾村は屏風岩や兜岩が有名で、縄文の時代から繁栄した土地でもあり「地」をテーマにし、清流で名高い天川村は「水」、吉野は「森」がテーマです。短くて3時間から5時間、長くて8時間ほど歩くルートを設定しています。親しい友人が昨年、「作品がない」という感想を述べていましたが、気が急くと作品がなかなか入ってこない。僕自身も美術館に行くとバーっと見てしまうタイプなので反省したのですが、「MIND TRAIL」では立ち止まって、キャプションや風景を見て、食べ物を口にする。そうすると後半になるに連れて、どれが作品かだんだんわからなくなる。吉野は山全体が世界遺産ですので、倒木に生えている苔や景色が作品に見えたり、人間の創作物なのか自然なのか、わからなくなったりする感覚が表現されていたと思います。

僕がアーティストに一つだけ話したのは、「自然に勝とうとせず、自然を覆うことをせず、自然の美しさ、生命、尊さ、怖さなど様々な感情を、人間がつくる作品というレンズを通して呼び起こすような感覚で、作品を考え、自然の中に慎重に置いてほしい」ということ。僕もそうなのですが、作品をつくる時にどうしても何かを主張したくなるけど、自然とのインプロヴィゼーションを楽しんでほしい。実際は環境省や文化庁の管轄なので、どこにでも作品が置けるわけではなく。そういう意味でも慎重に置いていくことが大事だと思いました。

今秋も同じ哲学を胸に「MIND TRAIL」を開催します。僕は全体のプロデューサーとして、行政や地元の人、商店街、観光協会と調整するまとめ役をしながら企画を進めています。吉野エリアのキュレーターは西尾美也さん、天川エリアは菊池



宏子さん、曾爾エリアは西岡潔さんが担っています。『ソトコト』編集長の指出一正さんには、エリア横断キュレーターをお願いしています。昨年は自分たちで交渉し、お金のやりとりもして実装していたのですが、今年は満を辞してエリアごとにキュレーターを置いています。

#### これからの時代、芸術をどのように捉えるか

答えのない時代に「MIND TRAIL」をつくった意図についてですが、これからは時代の鏡として芸術をさらにつくり続ける必要があると思ったからです。芸術は今を追うのではなく、先に何があるのかを問われるようになってきていると思います。

これまで日本では文化にあまり投資をしませんでした。文化は補修保全するものとして捉えられ、新しい文化の発掘をしてこなかった。これからは、経済と文化の両輪で考えながら日本は発展していく必要があります。そういう意味で、芸術祭をつくる時には、経済効果までいかないとしても、地元の人とのつながりをどのように高められるのかが大事になってくる。それが最終的に経済発展になる場合と、文化発展につながる場合がある。経済系の人には文化の勉強を、文化系の人には経済の勉強をする必要がある時代になっています。文化はつくろうと思ってつくれるものではないので、地域から文化をつくっていく必要があります。

#### 自分の感覚を信じ、アクションを起こすことの大切さ

もう一つ、今日は感覚がテーマですのでお伝えしたいのが、もっと自分の感覚を信じること。経済の話をしましたけど、全てが数値化できる訳ではない。数字的な指標ではなく、ウェルネスやエモーションで社会を見る必要があります。コロナ禍で方程式が崩れたのであれば自分でつくっていくかなければならない。どのようなビジョンを持って、時代を、地域を、芸術祭をどのようにしていきたいのか。そのた

めには感覚を信じること。最初に取り組みを始める発注側の人は、依頼する相手の感覚をできるだけ信じることをしなければ進まないと思います。

コロナと共にあるこの時代に、芸術祭とはどうあるべきかを考え直す必要があります。僕の実験を実装する機会を与えてくれた「MIND TRAIL」は社会実験であり、地域創生プロジェクトであり、アートと地域、社会と時代を結ぶ試みだと思っています。かつてアーティストたちは社会なんて関係なく、こういうものをつくりたいという個人的な思いで作品をつくっていました。つくりたいものと社会がつながることによって、アートの定義も変わってくると思います。

今日はレクチャー形式でお話を聞いていただいているのですが、やはり何らかのアクションを起こすことが非常に大事です。例えば、アーティストの手伝いをしてみたり、SNSで何か発信してみたりとか。全体的にシンキングの段階で終わってしまうことが多くあると思います。デザインシンキングをネガティブに捉えているわけではないですが、シンキングばかりしていても、アクションを起こさないと次につながらない。コロナで方程式が崩れ、哲学的な問いが多い今だからこそ、アクションをどんどん起こして、文脈をつくっていかねばなりません。

物事を二分し対比して考えることは分かりやすく、これは誰もが経験する。しかし、今後は「分けて考えられた要素をつないでいく行為」がとても大切だと受け止めた。コロナ禍においては、生き方や暮らしの多くについて、テレワークが良いのか対面が良いのかなど、皆が考えさせられたと思う。どちらの考えにも寄らず、対立させるものでもない。両者の考えをしっかりと身に付け、場面ごとで活用していく。漢詩の中に「中庸」という詩がある。「勇力の男児は勇力に倒れ、文明の才子は文明に酔う。権力者は権力に溺れ、文明の利器に頼りすぎる者は、文明の利器が登場する以前からある物の良さを忘れ無味乾燥な人間となる」。その後「中庸であるべき」と説くが、物事に向き合う際に、中道的な見方をするのではなく、両者を身に付け、他分野も取り入れ、捉えていく。現代社会においては、様々な対比する場面があるが、私たちが企画する「地奏」の「感覚と知性」、そしてアートマネジメントを通じて学ぶ「多様な視点を身に付け、多様な現代社会を生きる」というテーマに、特に大切なレクチャーだと感じた。

平田孝文

「社会やものづくりが分断されている今、異なるメディアの地下茎をつなぐことによって、生みだせるものや文化として昇華できるものがあるのでは」といった、齋藤さんの提言・視点が興味深いレクチャーだった。「社会との接点がないと存在意義が認められにくく、距離感がわからないとオーダーしづらい／されづらい」という考えは、自分自身思うところがあり共感した。その考えを根底に抱きつつ、どのような思考・方法で様々な人や社会と関わっているのか、齋藤さんの視点をできる限り吸収したいと思いながらレクチャーを受講した。人によってアートの捉え方が異なるなか、どのように自分の中でアートを捉えたら良いかの落とし所を考えている。今回、齋藤さんの視点を知れたことは、自分の思考の補助線になった気がする。

中川なつみ

## 「明日香村の風土と景観」

井原縁（環境デザイン学・造園学／奈良県立大学教授）



造園学が専門で明日香村の景観委員会委員も務めている井原縁さんを講師にお招きし、奈良県明日香村でレクチャーとまち歩きを実施しました。前半のレクチャーでは、ランドスケープの観点から明日香村の歴史的風土の特徴や、国営飛鳥歴史公園を始めとする重要な場所について、詳細なお話を伺いました。後半のまち歩きでは、明日香村の歴史を語る上で外せない飛鳥川を辿り、明日香村の歴史に思いを馳せながら、様々な視点からまちを読み解いていきました。

### 明日香村の景観の特徴

私たちの眼前に広がる風景の裏側に積み重なってきた時間と空間の層を読み解いていくことで、今後のプロジェクトに活かしていただければと思っています。私の専門は造園学で、楽しみや憩い、美しさ、あるいはその地域らしさといった観点から風景をつくりだす実学です。その立場から、明日香村の景観委員会の委員を務めております。考古学や建築学、造園学の専門家と地元住民が、例えば、大規模な建物や工作物をつくる計画が持ちあがった時などに、明日香村の景観保全のあり方を具体的に議論する場です。

まず、物理的な景観から見ていきましょう。明日香村は奈良盆地の南東部に位置し、南部に連なる約600メートル前後の山から北に向かって、飛鳥川が村の中央を真っ直ぐ流れています。聖なる川としても有名ですね。その近くに高取川が流れ、この流域一帯の平野部を山や丘が取り囲む小盆地的な空間になっているため、全体として囲繞性の高い空間になっています。

### かつて政治や文化の中心地であった飛鳥の痕跡

「明日香」と「飛鳥」という二つの字がありますが、明日香は基本的に村の名称を指す時に使われ、飛鳥は村も含めたもう少し広い地域を指します。村を中心とした飛鳥地域は、我が国の律令国家体制が形成された飛鳥時代において、政治や文化の中心地でした。今ではゆっくりと時間が流れるのどかな場所ですが、飛鳥時代には非常に賑わっていました。

当時、政治や文化の中心として賑わっていた証拠が、物理的に土地に残っています。天皇の住まいであった宮殿や寺の跡、古墳など、文字通り基層の部分が残っており、それらを含めた埋蔵文化財が随所に存在しています。ちなみに飛鳥京跡は、複数の宮がつくられた遺跡群を総称する言葉で、一般的に飛鳥川の右岸のエリアを指しており、明確に区切られた都市があるわけではありません。

人が住まう場所には、建物の他に憩いの場が必ずあります。愛でたり、人を招いてもてなしたりするための庭がつくられていて、土地を削って池を掘ったりしてつくるため、その痕跡が残ります。時の流れと共に層が重なり、様々な土地利用に変換されていきますが、最もベースの土地利用のあり様は残っており、それぞれの宮にあった庭の跡には明らかにそれとわかる石があったりします。例えば、下野小遺跡で発掘された庭園遺構には、正方形の方池があります。現在、私たちが一般的に庭園で見るのは、池の汀の形が曲がっている曲池ですが、不思議なことに飛鳥時代の庭園遺構には方池が多い。池の護岸には石が積み重ねられており、水の流れがあったことを示す溝も発掘されています。

飛鳥は面白い石造物がたくさんある場所として有名ですが、中でも仏教の想像上の山で、仏教世界の中心をなすと言われる須弥山石があります。単なる石造物ではなく、噴水機能が備わっている。このように石を加工して造形し、さらに重力に逆らって水を外に噴き出させる技術は、当時としては考えられないほど高度です。そ



の結果が形として残り、土の下に埋もれていて、発掘によって出てきたわけです。

### 当時の人間活動や大陸の影響を伝える遺構

飛鳥時代は、大陸との交流が非常に盛んだった時代として知られています。とりわけ仏教は中国や朝鮮半島を経て大陸から日本に伝わってきましたが、飛鳥の庭園遺構についても当時の大陸の影響を直接受けていたことがわかっています。正方形の方池の起源も、シルクロードを伝って古代インドからと言われていますが、直接的には当時盛んに交流のあった百済を経て日本に伝来したと考えられています。百済の色々な宮や寺の跡で同様の方池が発掘されています。

飛鳥時代は長く続いたため、交流する国の事情によって途中で様々に変わりました。当初、朝鮮半島は百済を含めた3国に分かれていましたが、新羅に統一された結果、今度は新羅との交流が盛んになります。飛鳥川の右岸の河岸段丘で発掘された飛鳥京跡苑池遺構は、石造の噴水のある本格的な池を持つ庭ですが、方池と曲池の間のような形をしています。様々な情報を勘案したところ、このような庭園の形が当時広がっていて、まさにこの時代の新羅の影響を受けていたと考えられています。

日本の古代国家がどのように築かれてきたのかということと同時に、当時は中国大陸や朝鮮半島と非常に密な交流をして色々なものが生みだされていたということ。そのような古代の飛鳥の人々による活動の痕跡が、物や形として土地の基層に残っている。歴史文化遺産として土地の下にあり続けていることが、明日香村の現在の景観の基層になっています。

庭園遺構のみならず建築遺構や様々な工作物の遺構も確認することができます。これらの遺構は土地に刻み込まれた人間活動の痕跡でして、それらの一部は現在の風景において地上で視認できるものもあります。例えば、石舞台は本来であれば墳丘があったはずですが、墳丘がなくなり石室が露出している。けれども、多くは「埋蔵文化財」

と呼ばれるように、地下に眠っています。見えないけれども、長年にわたる考古学的な発掘調査の結果、先述したような様々なことが次々に明らかになっています。

### いかに現在の土地利用のあり方と歴史文化遺産を調和させるか

発掘調査で明らかになったものと現在の土地利用のあり方とをどのように調和させるかというのが、明日香村の大きな課題です。基本的な方針は、大きな復元整備をしないということにして、地上にどのような遺構があったのかを部分的に展示する。例えば、川原寺跡は一部だけ平面表示をしたり、部分的に展示したり、さりげなく展示しています。あるいは、説明板を置くだけにして、地面の下に埋もれたままにするなど、大きな手を加えることなく調和させています。

ですから、見えないものがすごく多いのですが、その中で一部だけ見えているものとして、古墳や寺、神社の建物などがあります。今ある建物は古代のものそのまま残っているわけではなく、つくり替えられたり、場所自体も移動したりしています。例えば、今年度の「地奏」プロジェクトを実施する予定の飛鳥坐神社も、もともとは甘樫丘の川向かいにある雷丘にあったという説があります。明日香では神の宿場所として、甘樫丘や雷丘など複数の説があります。一応その場所が見てとれるところもあるのですが、見えないものがすごく多い。見えないけれども確実にそこにある、何か独特の空気を漂わせており、その成果が色々な形で展示されているというのが、明日香村全体に共通しています。

数多くの貴重な歴史文化遺産が基層にあり、それらが集落や農地、山林などと一体となって独特の美しい歴史的風土を形成している。『万葉集』で歌われた飛鳥の姿が、今の明日香村の山や川を眺めていると何となく思い起こせる。奇跡的なことです。普通なら人間の暮らしは時間の流れと共に利便性の高い方へ土地をどんどん変えていきますが、明日香村は土地利用の改変の仕方が非常に緩やかです。



### 明日香村の歴史的風土を守る法制度の整備

このような飛鳥独特の風土性を表すキーワードが「歴史的風土」ですが、この歴史的風土と、それが形となって現れている景観は、各種法制度によって維持されてきました。もちろん法制度で継承せずとも受け継がれてきましたが、戦後の高度経済成長期に桁違いのスピードとスケールで形が変わった農村や都市計画が全国的に非常に多かった。明日香村は特に強い法制度を敷くことにより、継承されてきた固有の風土や景観を守る方向へ舵を切りました。それが今に至る明日香村の歴史的風土を守る基盤となっています。

甘樫丘からの風景は眺めが素晴らしく、大和三山が見えますが、特に注目していただきたいのが、西の地平線の方です。橿原がある方角ですが、建物の集合体が見えます。放っておくと土地開発の波が押し寄せてくるはずですが、人の意思によって明らかに食い止められており、田園が広がって、まとまりごとに集落が形成されています。

実は明日香村の全域には一定の規制がかかっているのですが、特に注目したいのが、第1種歴史的風土保存地区と第2種歴史的風土保存地区というもの。歴史的風土とは、歴史的な建築物や工作物、つまり人間の生みだした人工物とそれを取り巻く自然環境が一体となって醸しだしている土地の趣を示す言葉です。高度経済成長期に歴史的風土を守る手を何か打つ必要があるという動きが持ち上がるなかで古都保存法が制定されました。古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法です。これによって奈良公園の界隈も歴史的風土の名のもとに守られています。

明日香村においては、特定の場所を歴史的風土として守ろうというのではなく、村全域に対して適用したのが特異なポイントです。古都保存法には非常に厳しい歴史的風土特別保存地区と、もう少し緩い風土保存区域がありますが、歴史的風土特別保存地区に該当するものが明日香村全域にわたって適用されています。その中でもさらに強いものを第1種と第2種に分ける、明日香村独自の方針をとっています。

これによって、宅地を造成するとか、新築するとか、今の状況を変えるような何らかの行為をするためには、全てが禁止というわけではなく、そのあり方を一度検討するというワンクッションを置くシステムが適用されています。その他に風致地区や景観計画も村全域を対象にしており、色々な制度が幾重にも折り重なって、今の明日香村の歴史的風土を維持し、未来に向けて継承しているのです。

また、明日香村の特殊性として、歴史的風土を守ることと、住民生活の安定向上を二本柱にしていることが挙げられます。古都保存法の規制の対象となっている他の地域とは異なり、明日香村の場合は、住民の日常生活の場が同時に文化財の保存上のかけがえのない地域であることに特色がある。土地全体に古代飛鳥のあり様を示す貴重な歴史文化遺産が埋もれていて、その一部が地上に現れており、その上に、自然に即した農業を中心とする住民の生活の営みが積み重なって歴史的風土を生みだしています。だから、歴史を大事にする地区と暮らすための地区というように分けられておらず、常に一体性があるのが明日香村の大きな特徴です。

### 国営飛鳥歴史公園——甘樫丘、石舞台、祝戸

明日香村には全部で国営飛鳥歴史公園が5箇所あります。公園というとスポーツや遊びのための公共性の高いレクリエーション空間だと考えますが、国営飛鳥歴史公園は明日香村の風土や景観の特殊性を反映した特別な意味を持っていて、土地開発の波から歴史的風土を守る手段の一つとして生みだされました。まずは飛鳥川沿いに立地している甘樫丘、石舞台、祝戸の三つが認定されました。ものすごく大事なところを囲い込んで、国が責任をもって管理する都市公園にすると決めたのです。

最初に公園に認定された場所の一つが甘樫丘、もう一つが石舞台です。石舞台は非常に大きな石室でして、方形の古墳です。墳丘の盛土が残っておらず、本来は墳丘にある石室が露出しているという独特の形象です。江戸時代にはすでにこういう



姿だったという記述が残っています。天井石の部分が平らになっていて、まるで舞台のように見えるので、石舞台という愛称で呼ばれています。

この国営飛鳥歴史公園のポイントは、いかにも「公園」としての整備をしていないところ。先述の通り、守るために生みだされたものなので、いずれも現存の地形と植生を尊重しています。普通なら公園の範囲を示すために生垣や柵、塀で区切りますが、そのようなものを設けていない。また、施設にはできる限り自然素材を使用し、周辺の景観と調和して一体化するように最大限の配慮がなされています。日本のランドスケープにおける代表的な風景づくりの設計事務所が手がけているものですが、自分の存在感を強く表さない、引きのデザインで構成されているという点で高く評価されています。

三つ目の祝戸は、一般観光客にはあまり知られていない場所ですが、すごく大事な地区です。最初に三つの地区が選ばれた時、甘樫丘で重要なのはそこから眺める展望と散策。国指定の特別史跡である石舞台は、史跡の鑑賞。祝戸は展望と宿泊研修施設を整備することが構想されました。祝戸地区は、南の方に山が連なっていく入り口部分になります。この先に広がる奥飛鳥は飛鳥川の上流域から源流の辺りとして、古代からの土地利用のあり方、すなわち住民の暮らしや生業のあり方が形としてかなり残っており、伝統的な神事も多く伝えられている場所です。明日香は何度も足を運んでじっくり学ぶことによって、魅力がどんどん体に染み込んできて、見え方がどんどん変わってくる場所です。そのための拠点となる施設が必要だということで、明日香らしさを体感できる祝戸に宿泊研修施設を置くことが決まり、祝戸荘が開設されました。明日香村の歴史的風土や景観の保存活動を行っていた古都飛鳥保存財団が長年にわたって管理運営をしてきましたが、残念ながら立ち行かなくなり、どのように継承していくかを皆で議論しているところではあります。

奥飛鳥の地は2011年に国の重要文化的景観に選定されました。重要文化的景観

は、地域固有の風土と生活や生業が織りなしている特徴的な景観を価値づけ、それを維持継承していく自治体に与えられるものです。この辺りは見事な棚田が広がり、昔から水の利用が延々と続いており、古くは中世に遡る集落のまとまりが現在まで継承されている。『万葉集』に飛鳥川の源流の姿が謳われて、歌の情景と最もリンクする場所でもあります。

#### 国営飛鳥歴史公園——高松塚古墳、キトラ古墳

ちょうど明日香の歴史的風土保存や景観保存が多く議論されている1970年代に、彩り鮮やかな壁画が発見されて大評判となった高松塚古墳を中心とする周辺地区が、四つ目の国営飛鳥歴史公園として追加されました。ゴミ箱が自然石の中に設置されたり、周辺に広がる農村景観との境目がわからないような姿だったりして、周囲の環境と非常に調和する形でつくられています。

また、1983年にはキトラ古墳という一大発見があり、明日香村では現在進行形でまだまだ発見が続いていますが、国営飛鳥歴史公園は現在5地区に広がっています。眼前の風景の背景には、最も基層に歴史文化遺産があり、それと調和する住民の日常の暮らしや生業に支えられてきた土地利用のあり方がある。そして、それらが織りなす一体的な趣を必死で守ってきた民間を含む人々の思いがあり、今この場所に価値を見出して色々な形で伝えようとしている人の思いが重なっています。その代表的な存在が、飛鳥里山クラブという団体です。国営公園は行政だけで運営しているのではなく、民間のボランティア団体の協力を得て運営されています。長年にわたる活動の結果、飛鳥里山クラブは数百人ほどの組織体になっていますが、四季を通じて明日香の魅力を人々に伝えるための様々な活動をしています。

### 色々な時間スケールを通して見えてくる飛鳥らしさ

最後に明日香村の特徴としてお伝えしたいのが、一年を通じた四季の魅力という時間スケールです。他の季節にもぜひ明日香村に来ていただきたい。飛鳥時代に刻まれたこの場所のあり様が最も明らかになるのは冬です。私の思いだけでなく、この地に親しんだ研究者らもまたそのように言っています。山沿いの凍てつくような寒さの中、葉も落ちて、目を奪われるような彩りが全部なくなるからこそ、最もベースにある土地のあり様がはっきり見えてきます。歴史的な時間スケール、四季の時間スケール、そして一日を通じた時間スケールなど、色々な時間軸と空間変化を見ていくことが、飛鳥らしさを考える上で重要な視点です。これからプロジェクトの構想を練っていく時に、このような飛鳥らしさを意識してみてください。

この後のまち歩きでは、上流に向かって飛鳥川を歩いていこうと思います。まずは石舞台古墳に寄ってから、祝戸地区、さらに奥飛鳥へと歩を進めて、地域住民の土地利用がよくわかるエリアを見つつ、山に向かって真っ直ぐ登っていきながら、明日香の魅力を体感してみましょう。

自然と人間の営みによって積み重ねられてきた明日香村の景観について学んだ。通常、時代の流れと共に土地は利便性の良い方向へと改変される。明日香村は「明日香法」と呼ばれる法律を整えるなどして土地改変のスピードを遅め、景観を守ってきた。そのため、今でも『万葉集』に詠まれた景色を見ることができる。ただ、遺跡や文化財保存上かけがえのない土地であると同時に、ここは住民の日常生活の場でもある。歴史的風土と住民生活の健全性、両方を同じ重みで捉え村の未来を考えた政策を実施し続けてきたからこそ、明日香村には独特の美しい歴史的風土が形成されている。そのことに私は驚いた。井原先生が仰っていた「景観は風土の表れである」「歴史的風土は、人間が生みだした人工物と自然が一体となったものであり、人の営みが重なり続けることから生まれる」という考え方がプロジェクトを進めるにあたって重要なキーになると感じた。

中川なつみ

水の流れを頼りに奥飛鳥の手前の稲淵地区を少し散策したが、ここで田淵に流れていた水の音が、個人的に、他の水音よりもとても穏やかで心地良く感じた。井原先生がレクチャーで仰っていた、明日香の歴史的風土と重なる生業を人々がなぜ守りたいと思ったのか、身をもって実感した。人間が知らず知らずのうちに壊してしまったものの儚さとその過失の重大さに気づき(昨年度の宇陀の時よりも強く感じた)、奥飛鳥は井原先生のお話が身に沁みる空間だった。石舞台古墳公園も興味深かった。石舞台古墳の周りには、何もない原っぱがただ広がっているように見えるが、実はあえて自然な景観を演出するという人工的な工夫がかなりなされていて、その公園設計技術に感嘆した。

奥山祐

## 「多様な人と共に表現を捉え直す試み」

田中みゆき（キュレーター／プロデューサー）



キュレーターやプロデューサーとして分野を超えて活躍する田中みゆきさんから、これまで携わってきた展覧会やパフォーマンス、ゲームなどの多様な表現活動について話を伺いました。自らの活動の指針、社会の変化の兆しを捉えて企画を立ち上げる手法、さらに、試行錯誤してつくったものを丁寧に振り返り次のステージに展開するダイナミズムについて、具体的なお話を聞くなかで「どのような姿勢でアートマネジメントを実践していくか」を改めて問い直す機会になりました。

### キュレーター／プロデューサーであること

私はキュレーターやプロデューサーと名乗っていますが、どちらの肩書きでも企画するという過程においては同じことをしています。音楽や映画など、キュレーターという言葉が通用しない業界ではプロデューサーと名乗るなど、相手の都合によって使い分けています。

7、8年くらい前までは主に展覧会をつくる仕事をしていましたが、障害に関するプロジェクトに取り組むようになってからは、パフォーマンスや演劇、映画、ゲームなど、表現の幅が色々な方向へ広がっています。

### 展覧会と舞台芸術、それぞれの特徴

展覧会と舞台芸術の自分なりの分けについてお話します。展覧会は、作品と対峙する空間を設計することだと考えています。動線がある場合が多いですが、固定されておらず鑑賞者は選ぶことができます。全く別の出自や世界観のものが隣に存在していて、呼応したりしなかったりする。また、鑑賞者が別々の時間軸で見ても、できる限り同じ質の体験が伝わるようにするのが、展覧会の基本的な特徴です。

一方で舞台芸術は、演者と観客が共有する時間を設計すること。観客に体験して

ほしいナラティブやストーリーがあり、時間軸に沿って設計されたものを鑑賞者は見る。ストーリーに必ずしも必要のない動作や振るまいも見る対象になっています。客席が要素の一つになっているのも特徴で、同じ演劇でも日によって違うものになるのは、観客も一緒に舞台をつくっているからです。

### 興味のある四つのこと

自らの実践の指針となるような個人的な興味が四つあり、一つ目は「作品未満の表現、コミュニケーション」です。作品になる手前では、どのように見たら良いかが定まっておらず、どう見るかを観客がつくっていくことができる状態が好き。二つ目は「多分野の人と協働すること」。同じ業界の人だけだと、使う言葉も常識も同じで、どうしてもそこから出られないということが多々ある。別の分野の人と協働することで自分たちの常識の枠を広げるようにしています。

三つ目は「人が新しいものに触れる時の失敗も含めた態度」。どのように捉えたら良いのか悩むものに対して、自分なりの意見を持ったり行動を起こしてみたりする。それは失敗だったり、誤解だったりするかもしれないけれど、多様な意見や振るまいが起り得る状況自体が大事。四つ目は「作者ではなく、鑑賞者が主体となるもの」。作家がどのような意図でつくったかも大事ですが、鑑賞者がどう読みとるのか、そこにもう少しできることがあるのではと考えています。

### 「“これも自分と認めざるをえない”展」——社会の変化の兆しを捉える

2010年に佐藤雅彦さんをつくった「“これも自分と認めざるをえない”展」では、入り口で名前を入力したり、身長や体重を測ったり、何かの形を描いたりしてから会場に入りますが、それらのデータを活用して展示が構成されていきました。例えば、「属性のゲート」という作品では、鑑賞者は性別と年代、顔の表情で二つに

分類され、顔認証の機械が判定した方のゲートだけが開く。実年齢より高く判定されても、自分と認めてそのゲートを進まざるを得ない。「指紋の池」では、現在の人口レベルだと同じ指紋の人はほぼいないという前提のもと、鑑賞者から集められた大量の指紋の池の中から、少し前に放流した自分の指紋だけが自分のもとに泳いで戻ってきます。

この展覧会を準備していた頃、指紋を偽装して日本に入国する事件が報道されました。当時は、静脈認証や虹彩認証のような技術が話題になったばかり。技術だけが発展して、自分の属性が勝手に登録されたり追跡されたりする。自覚がなくても、社会はそれを自分として認識し、独り歩きしてしまう。そんな情報で特定される属性以外のアイデンティティとは一体何なのかについて考えることをテーマにしました。

このような展覧会のつくり方を私はずっと心がけてきたように思います。「この作家の新作が見たい」というような作家主導のつくり方よりも、「今、社会では変化の兆しとして何があるか」「それを伝えるためにはどんな表現が可能か」ということを考えて展覧会をつくっています。

#### 「骨」展——未来の骨としての義足の可能性

2009年に山中俊治さんとつくった「骨」展もそのように企画した展覧会の一つです。2007年に義足のアスリートが健常者のアスリートの記録を初めて抜いたというニュースが報じられましたが、義足のアスリートが美しく走る姿を見ていると可哀想な人とは全く思わない。人間の寿命がどんどん長くなる今、未来の骨としての可能性があるのではと思います、義足という存在に興味を持ちました。

それまで周りに障害者がいることがなく、これが私にとって最初の障害との接点でした。義足のユーザーの方々とトークイベントを行った際、普段着けている義足を何本か持参していただいたのですが、皆が思い思いに楽しんでいて、好きな布を

貼って義足をカスタマイズしたり、透明なアクリルで義足をつくり変えたり。ヒールを履いたりするための義足もあって、こんなにも人の身体は色々とデザインできるのかと面白くて、約5年後に「義足のファッションショー」を企画することになります。

#### 「義足のファッションショー」——見る／見られる関係の成立

「義足のファッションショー」では、未来の人類の身体を実験的にプロトタイプングしたもものとして、義足を捉えました。義足の人歩いていると「見てはいけない」と思いがちですが、舞台なら出演者は見られることを了解しているし、むしろ見ない方が失礼。見る／見られる関係に合意があることが障害を扱う上で大事だと気づき、それ以降のパフォーマンスにつながっていきます。ファッションショーという軸に沿って、彼ら彼女らの日常の振るまいと共に、義足の種類や機能を自然な流れで見せる。当時はあまり例のない企画だったので、反響がありました。

ただ、それ以降はファッションショーをしていません。義足が並んでいる姿は壮観で、わかりやすいのですが、それで良いのだろうかとかモヤっとする部分がある。難しいと感じるのは、見えないことや聞こえないことは想像の範疇にあっても、義足の身体に健常者が成り代わるのはどうしても無理で、そこにはどうしても距離がある。義足の人ってすごいねではなく、お互い良いところもあれば悪いところもあるよねとそのまま認め合えることをしていきたいと思い、その後のプロジェクトを考えています。

#### 障害のある人とのプロジェクトで実践している三つのこと

私のプロジェクトに共通することとして、障害のある人の存在を通して「表現の当たり前を疑う」、「鑑賞方法の選択肢を開拓する」、「知覚や感覚を拡げる」の三つ



があります。例えば、この場に目の見えない人がいることで全く状況が変わる。どんな人がいるか、何をしているか、できる限り説明しますが、それって場がすごく開かれて良いと思う。私たちが当たり前と捉えていることを、あえて口に出すのです。

また「見えない人にどう伝えたら良いか」「見えている状態とは一体何なのか」について、見える人も見えない人も一緒に考える、アクセシビリティの実践もしています。アクセシビリティの一般的な意味は、障害のある人が身体的特性のために得られない情報を補助すること。私は音声ガイドの講座に通っていますが、人によって説明の仕方が全く違って、言語で説明することで少しずつその人の個性が見えるのがすごく面白いと感じます。

#### 「音で観るダンス」——私たちは一体何を観ているのか

限られた尺の中で状態を説明する時、人によって千差万別なこと自体が「私たちは一体何を観ているのか」ということにつながっていて、「音で観るダンスのワークインプログレス」ではそれをテーマにしています。ダンスは見えていても何を観ているのかが曖昧で、基本的には言語化できない表現形態です。ダンスを言語で捉えることは不可能で、そもそも不要だと言う人もいます。誰も完璧にできないからこそ可能性が開かれているし、やる意味があると考えました。

ラジオの受信機を渡された観客は、三つのチャンネルから、それぞれ別の目線からつくられた音声ガイドの一つを選ぶ。それを聴きながら10分間のダンスを暗い状態と明るい状態で繰り返して見ます。1年目の音声ガイドダンスは、一つ目がダンサー自身による解説、二つ目がアクセシビリティの観点から目の見えない人に向けて客観的に説明したもの、三つ目が能楽師の安田登さんによる神の目線からのもの。安田さんは劇場を自分の身体と捉え、ダンサーが侵入して悪さをしている、という独自のストーリーを軸に構成し、能のリズムで唄いました。隣に座っている人が違う

音声を聴きながらダンスを観ていることが前提でダンスを観るのです。

#### 「音で観るダンス」——イメージとは何か

「イメージとは何か」というテーマも念頭にありました。視覚的なイメージが大半を占めていますが、聴覚や触覚から想起するイメージも私たちを構成しているはず。「見えないと聴覚が鋭敏になる」と言われますが、後天的に見えなくなった人はそうではないし、その人の環境によって異なり、「足の裏の感覚が鋭くなった」など他の感覚について語る人もいます。人の感覚のキャパシティは同じで、その配分に違いがあるだけと私は思っており、色々なイメージの仕方があり得ることについて考えたかった。

隣で見ている人が全く違うものを聴いて、異なるイメージを想起している状況は、単に想像力の問題かもしれないし、その想像力を決定づけているのが身体的な違いかもしれない。そのようにダンスを見る視点の多様性を共有し、他者／自分を想像することにつながればと思いました。

#### 「音で観るダンス」——試行錯誤して音声ガイドをつくるプロセス

ダンスの音声ガイドは日本では前例は少なく、参考になるものがないという現状があったので、1年目はイギリスから講師を招いてワークショップをしたり、映画やラジオなど他分野の音声ガイドについて学んだりしました。研究会では音声ガイドをつくるチームとダンサーと踊るチームに分かれて、実際に踊った人とテキストをつくった人がイメージを共有しながらをつくっていく。ダンスのポーズを障害当事者が触って確かめたり、実際に踊ってみたいしました。

2年目の研究会で、客観的に説明する音声ガイドを聴いた視覚障がいのある人が「何が起きているかはわかるけど、またダンスを見たいとは思わない」と言いま



した。淡々と描写しても魅力がないと意味がなく、何が起きているかを知りたくてダンスを見るわけではないことに改めて気付かされました。また、「どの音声ガイドが好きか」「どんな障害があるか」についてアンケートしたところ、視覚の状態と好みにはあまり関連性がないこともわかった。安田さんの音声ガイドは何も説明していないけど、自分で想像する余地があって面白かったと言う人もいれば、ダンサーによる音声ガイドと一緒に踊っている気になって面白かったと言う人もいて、それぞれでした。

2年目の音声ガイドは全ての情報量が多くなり、相当複雑なものになりました。ある意味、ダンスがなくても成立する音響作品として完結してしまった。それはそれですごく面白かったと感想をいただきましたが、生のダンスから伝わるものが相対的に軽くなってしまったことに気づきました。そこで3年目では、観客も舞台上がり、ダンサーと同じ地面を共有しながら見ることに。言葉をだいぶ減らし、ダンスから伝わる生の情報を全身で感じられる舞台づくりを心がけました。

### 3年間のプロジェクトで得た気づき

3年間で計7つの音声ガイドをつくることを通して、「生のダンスから伝わる情報量の多さ」「想像を喚起する方法の多様性」など、様々な気づきが得られました。ダンスと音声ガイドはあえて違う人が担当していますが、そうすることで身体と声という二つの身体が舞台上に存在することになると、人間行動学者の細馬宏通さんから指摘がありました。自動ドアの音を聴くと、私たちは音として感じますが、見えない人は「あそこにドアがあり、体格の良い人が入って来た」などとダイレクトに想像し、音を存在として感じます。

また、耳だけで聴きすぎると、逆に身体を塞いでしまうことになり、「体は耳以外で聴き、目以外で観ている」ということにも気づかされました。つまり、見える

ことや聴こえることは身体全体での体験だということです。そして、情報としての音声ガイドだと何が起ったかは伝わってもダンスを体験したことにはならず、「共有すべきは情報よりも体験」という大事な気づきもありました。

この3年間で十分に伝えられなかったものとして、ダンスの質感がどのようなものかということがあります。言語的な限界もありますが、次はそこにアプローチしようと新作をつくっているところです。

### 音から想像する自由を楽しむ「オーディオゲームセンター」

「オーディオゲームセンター」を始めたきっかけは、アートとして行うことの限界を感じたこと。客観的な価値判断が難しいアートではなく、シンプルに体験を共有することにフォーカスを当てるような表現形態を実現したいと考えました。

1年目にゲームをつくろうと定めず取り組んでいた時、全盲のゲーム開発者の野澤幸男さんと出会いました。ビデオゲームは目が見えないとプレイできないものばかりですが、それでも彼はゲームに惹かれて、10歳の頃から独学でプログラミングを学び、音で遊べるゲームをつくっていました。ゲームではゴールが明確にあるため障害が単なる条件の一つでしかなく、勝つことやより高い点を取ることを目標にする。そうすると、お互いのできるどころや良いところを見つけて、武器を最大限に使おうとするのです。そこが面白く、ゲームというプラットフォームに可能性を感じました。また、あるゲームの中で何かがこちらに向かってくる音がするのですが、人と感じる人もいれば、動物やオバケだと感じる人もいます。その面白さを残したくてあえて「ゾンビ」という言葉にしないで、「オーディオエネミー」という言い方にしたのですが、音から想像する自由さや解釈の違いの面白さを活かした体験がしてくれるのではと感じたエピソードです。

2017年に「音の盲点探索ラボ」として小規模で実施し、2018年から東京ゲームショ

ウヤスパイラルなどでゲーム作品として発表し、2018年に文化庁メディア芸術祭で選出されたのをきっかけに、メディア芸術クリエイター育成支援事業で採択され、プロジェクトが徐々に大きくなっていきました。今年にはソニー株式会社からお声がけいただいて、銀座ソニーパークでの「AUDIO GAME CENTER +」が実現しました。他のプロジェクトについても言えますが、最初は手弁当で試行錯誤していた試みが、徐々に依頼を受けて実施する形になり、今では自分でお金を稼いだり助成金を申請したりする必要がなく、自立して続けられるようになっています。

#### ルールの可能性を探る「ルール?展」

現在、21\_21DESIGN SIGHTで、法律家の水野祐さん、コグニティブデザイナーの菅俊一さんとディレクターチームを組んで企画した「ルール?展」が開催中です。ルールと聞くと、自分と関係のないところで決められて守らされる嫌なものと思いがちですが、自ら主体となり他者と共に社会をつくるための共通言語として、ポジティブに捉えることもできるのではという観点から、アートとデザイン、舞台芸術が共存する展示空間をつくりました。

鑑賞者を信頼し、鑑賞者が作品を読み込み、自ら空間や動線などに働きかけて「自分でルールをつくった」という実感が持てるように、予め決められている会場ルールは最小限です。来場者の振るまいによりルールをどんどん変更し、新しいルールを会場に毎週貼り出します。そのルールがなぜ設定されたのかも明記されていて、どうしたらルールを変えられるかを考えることができます。

この展覧会でも障害のある人による作品を展示しています。障害とはその人固有の問題ではなく、社会や表現のルールから逸脱、あるいは除外されてきたに過ぎません。彼ら彼女らについて考えることからルールを問い直せることになるのではないかという思いがあり、これまで私はずっと取り組んできたことに通じると思っています。

「義足のファッションショー」の斬新さと、障害の通念を超えた完成度の高さに驚いたが、それを誇りに思うだけにとどまらず、そこに疑問を感じた田中さんの言葉にハッとさせられた。「オーディオゲームセンター」は、自分が子どもの頃に欲しいと思っていたゲームと近くて驚き、障害があることで、より多様な発見や開発ができる可能性を非常に感じた。「ゲームをプレイしている時は、視覚に障害がある人の方が健常者よりも圧倒的に強い」ということは、いかに社会が一部の人間のみにより有利なものとして作用しているのかを知れる例だと思う。音に惹かれて、そこにある場所に意識を飛ばす経験は誰しもあるかと思うが、音にフォーカスを当てた経験は、その感覚をさらに鋭敏にすることができると思った。

奥山祐

個人的に関心があった、企画展「ルール?展」のディレクターを務めている田中さんのレクチャー。展覧会やパフォーマンスに、キュレーターとしてどのような視点・思考で関わっているのか、何にどのように戸惑い思考されたのかを直接お伺いできて嬉しかった。カテゴライズされた枠組みを起点に関わりを始めるのではなく、自身の興味を起点に企画を生みだしている。そのあり方を知り、固定観念で固まっていた自分の視点を柔らかくずらすことができた。コロナ禍において、田中さんが企画するイベントや展覧会も、オンラインでの実施に変更せざるを得ないことが多かったそう。でもその時に「代替としてのオンライン」ではなく、「オンラインである良さ」を活かした企画を考えたというお話に感化された。野球の試合や音楽番組をテレビで見ても楽しめるのは、オンライン用に編集され、現地では見ることのできない「寄り」や「他者のコメント（実況中継など）」が入るから。現地の観客と同じ視点で見せようとしても、受け手は楽しむことはできない。オンラインである良さをどのように使い、画面の先にいる人に届けられるかという着眼を得たので、自分自身の仕事に活かそうと思った。

中川なつみ

Program

# 2

## 「生態」

—Life's Manual / 天と地の間で生きる技術

### プログラム1「感覚」

アーティスト：listude、岩田茉莉江

プロジェクトメンバー（受講者）：奥山祐、かとうあつこ、中川なつみ、平田孝文、藤丸孝太郎、馬淵悠美、三宅啓暉、椋田侑馬

レクチャー講師：井上さやか、井原緑、齋藤精一、田中みゆき、中川真

プロジェクトマネジメント：古江晃也

協力：櫻井莉菜、中山佐代、松下千尋

### 「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」

音楽：オオルタイチ

料理：Purje

映像撮影：片山達貴

写真撮影：在本彌生

食空間施工：稲垣雄大（OKOME KT）

プロジェクトロゴデザイン：鶴林安奈（listude）

協力：飛鳥坐神社、飛鳥寺研修会館修徳坊、明日香村役場、明日香村教育委員会、奈良県立万葉文化館、塚田琴音、西川みゆき、松本耕士

### 「地奏 -CHISOU- vol.2 ASUKA」ドキュメンテーション

会場施工：高橋和広（KUSUNOKI WORKS）

展示物グラフィックデザイン：高橋静香（KUSUNOKI WORKS）

DMデザイン：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）

協力：Dear Gallery NARA

長坂有希によるアートプロジェクト「Ethno-Remedies: Bedtime Stories ↑ A Life's Manual」は、養蜂や薬草栽培など、奈良の土地や気候の中で育まれてきた固有の生きる技術と知恵を活かした仕事に取り組む人々への聞き取りやフィールドリサーチを行い、かれらとの協働を通して物語を編んでいく試みです。今年度は養蜂に着目し、奈良で養蜂を営む一家の仕事に密着して活動を行い、その経過を広く伝えるためのワークショップ展と関連イベントを企画制作しました。



2021年8月10日～12日

ワークショップ「蜂箱洗浄」



2021年8月8日

オリエンテーション

長坂有希さんと受講者の皆さんがCHISOU lab.で初対面。長坂さんと対話しながら受講者が自己紹介をした後、長坂さんからこれまでの制作活動や奈良でのアートプロジェクト「Ethno-Remedies: Bedtime Stories へ A Life's Manual」について話を伺う。受講者それぞれの関心とアートプロジェクトがどのように相互作用していくのか、楽しみながら幕開けとなる。

吉岡養蜂園から預かった30個の蜂箱に絵を描くために、まずは蜂箱を掃除。内側にこびりついた蜜蝋や汚れをハイスクレーパーでこそぎ取り、やすりがけをし、高圧洗浄機を用いて汚れを落とす。蜜蝋の色覚や情報伝達の方法、塗料の種類などについて調べたり、蜂箱をデザインする長岡綾子さんとミーティングしたりする。



2021年10月3日

企画構想ミーティング

12月のワークインプログレス展に向けて、受講者が主体となって企画制作する「ハチニンボックス」と「ハチニンカフェ」のブレインストーミングを行う。受講者が8人であること、蜂も含めた自然と人の関係をテーマにしていくことから、このネーミングに決定。



2021年9月23日

レクチャー&ワークショップ

「Ethno-Remedies: Sri Lanka」

(ラナシンハ・ニルマラ)

観光社会学が専門のラナシンハ・ニルマラさんを招き、スリランカの伝統料理ロティとキリバットを調理する。吉岡養蜂園の蜂蜜も味わいながら、スリランカの薬草や植物を活かした料理と飲み物について話を伺う。受講者が熊野古道由来や効能を発表。スリランカと日本それぞれの風土に根付いた食の薬効の奥深さを体験する。



2021年10月24日

企画構想ミーティング

蜂箱のやすりがけや吉岡養蜂園の店舗訪問の後、ミーティングを行う。展示会場である無人書店「ふうせんかざら」のレンタル本棚をお借りして、「人と自然」をテーマに8人の受講者それぞれがセレクトした本と、吉岡養蜂園の蜂蜜の販売、さらに蜂蜜を使った軽食や菓子、ドリンクを味わえる1日限定のカフェについてのアイデアが練られていく。

## ロゴデザインの意図

最終版

今回制作される作品を通して、日常と少し異なる角度から見た世界を体験できるのではと考えました。そこで、プロジェクト名のアルファベットの角度をいくつか変え、一見するとどう読むのかわかりにくいものの、少し視点を変えることで読めるようなデザインにしています。

フォントはおとぎ話の本の表紙や植物図鑑を想像し、クラシカルでかわいらしさのある雰囲気をもちつつ、少しカジュアルさを持たせて親しみやすい印象にしています。

色については、奈良県の土の色をイメージし、農研機構 日本土壌イベントリー (<https://soil-inventory.dc.affrc.go.jp/danmen.html>) に記載されていた「奈良県奈良市東九篠町」の畑の深さ 17cm~の土の色 (マンセル 5YR4/6) を採用しています。

WEB カラー #925e43  
RGB R=146 G=94 B=67  
CMYK C=51 M=70 Y=80 K=0  
DIC 2288  
PANTONE 4635 C

E t h n o -  
R e m e  
d i e s :

Bedtime Stories

↻ A Life's Manual

2021年11月28日

ワークショップ「蜂箱着彩」&フィールドリサーチ「養蜂場見学」



2021年11月3日

「ハチニブックス」開店

奈良市内の無人書店「ふうせんか  
ずら」内に、受講者が企画した小  
さなブックストアが開店。1ヵ月  
半後に「ふうせんかずら」の土  
間と庭、蔵で開催する「長坂有  
希ワークインプロGRESS展」の  
広報を目的として12月末まで続  
く。Twitterでもアカウント名  
「CHISOU2\_SEITAI」で情報発  
信を開始。

滑らかで綺麗になった蜂箱に、5種類のベース色（赤・黄・緑・青・白）  
を塗装する。温度や色によって質感が異なる塗料の難しさに手を焼き  
つつ、丁寧に塗ることを心がける。その後、吉岡養蜂園の蜂場を訪れ、  
吉岡幸次さんによるご案内のもと、養蜂の現場を見せていただく。

Ethno-Remedies: Bedtime Stories ⇄ A Life's Manual 蜂箱パターン ベース色ご提案

長岡子デザイン 2021.10.25

U-OILの塗装テスト結果

U-OILのカラライニングナップから選んだ15色について、実際に蓋にテストしました。  
1色につきカチャップずつテストしており、番号シールの下が2回塗り、その右側が1回塗りです。  
いずれも2回塗った方が発色が良かったです。

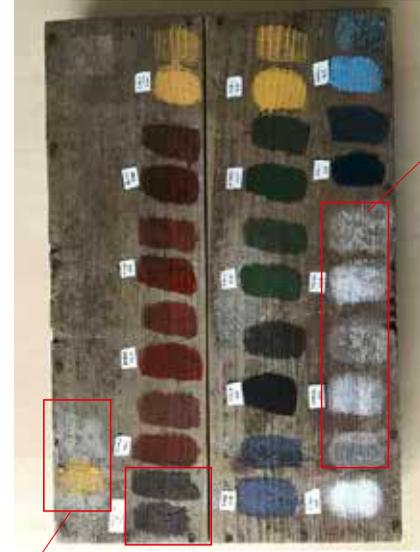
※オリジナル色オーダーは継続して一定量の発色がないと不可でした。

白1回の上にイエロー1回  
ベースに白を1回塗ると、その上には1回でも発色します

ワインレッドとブルーを1:1くらいで混ぜましたが  
紫色にはならず黒っぽくなりました（トタン塗料の方も同じ）



クレオソートが塗られている方



皮膜を作るタイプの赤茶色のトタン用塗料が塗られている方

トタン塗料が残っている部分は色があまり乗りませんでした。  
やすりがけした部分は乗りました。

蜂箱に塗装するための塗料について、長岡綾子さんがテスト結果をまとめた資料



2021年12月11日～12日

ワークショップ「蜂箱着彩」



長坂有希さんと一緒に、5種類のベース色の上に、それぞれ6種類のモチーフの形を、ステンシルの型を使って着彩する。屋内のCHISOU lab.から屋外に蜂箱を移動させ、芝生の上に置いて眺めると、青空の下でとても綺麗に映えるデザインに感嘆する。



2021年12月13日～17日  
長坂有希ワークインプログレス展  
「Ethno-Remedies:  
Bedtime Stories 〓 A Life's Manual」  
搬入・設営

町屋の風情が漂う「ふうせんかずら」の土間と庭、蔵のスペースをお借りして、長坂さんのこれまでのアートプロジェクトの一端を共有するための展覧会の設営作業を行う。設営期間中も、展示に用いるための孔雀石や土、蜜蜂が好む樹木の枝などを受講者と探しに行ったり、図書館で資料を探したりと、長坂さんは精力的にリサーチを重ねる。

2021年12月18日～26日

長坂有希ワークインプログレス展「Ethno-Remedies: Bedtime Stories 〆 A Life's Manual」開催



長坂有希さんの奈良でのアートプロジェクトの経過を伝えるために9日間の展覧会を開催。約200名の方々が会場を訪れて鑑賞し、様々な感覚を使って養蜂家の仕事や技術、蜂の生態について想像することを通して、自分たちを取り巻く環境を異なる視点から見つめる試みを共有する機会となった。







**2021年12月25日**

トーク①（長坂有希、山口未花子、吉岡幸次、吉岡伸次）＆「ハチニンカフェ」

動物人類学者の山口未花子さん、養蜂家の吉岡幸次さん、伸次さん、長坂有希さんによるトークを開催。養蜂家の具体的な仕事や移動養蜂の様子から、蜜蜂や動物とのコミュニケーションのあり方、自然環境や人間の食生活との深いつながりまで、実践家たちの興味深いお話をたくさん伺う。「ふうせんかずら」のキッチンをお借りして、受講者は「ハチニンカフェ」を切り盛りする。



**2021年12月26日**

トーク②（長坂有希、長岡綾子）

プロジェクトロゴや蜂箱のモチーフのデザインなど、グラフィックデザインを通して、長坂さんのプロジェクトに伴走してきた長岡綾子さんと長坂さんによるトークを開催。それぞれのデザインの意図について詳しくお聞きすることで、プロジェクトの趣旨や今後の展開について理解を深める時間となった。



## 「Ethno-Remedies: Sri Lanka」

ラナシンハ・ニルマラ（観光社会学／奈良県立大学准教授）



スリランカ出身で観光社会学が専門のラナシンハ・ニルマラさんをお招きし、スリランカの伝統料理ロティとキリバットを一緒につくるワークショップを行いました。吉岡養蜂園の蜂蜜もかけて味わいながら、スリランカの植物や果物を活かした料理や飲み物について話を伺いました。食に詳しい受講者が、熊野古道釜炒り茶と冷抹茶を振るまい、その由来と効能についても発表。スリランカと日本それぞれの風土に根ざした食が持つ薬効の奥深さを体験する時間となりました。

### 観光の持続可能性と食

今日は茶話会のようなカジュアルな時間にしたいと思っていますので、ゆっくりと食べながら私の話を聞いてくださいね。私の研究テーマの一つに「観光の持続可能性」があります。観光客がたくさん訪れることを目的とした観光ではなく、地域の持続可能性や住民の幸福のために観光をどのように活用できるのかについて探求しています。どの地域においても、食べることは最も大事なことです。観光の持続可能性にとっても、特にポストコロナにおいては、農業や健康的な食事がさらに重要になっていくと考えています。

今日はスリランカの様々な事例を取り上げながら、スリランカではどのような健康的な食事が実践されており、人々はそれをどのように捉えているのかについて、日本のことにも触れながら、一緒に考えてみたいと思います。色々なハーブの名前が話題に出てきますが、その科学的な効能や具体的な薬効に関しては、皆さんご自身で後から調べてみてください。インターネットで検索すると、特定非営利活動法人日本メディカルハーブ協会などのウェブサイトや、色々な種類のハーブについて詳しく説明されていますので、日本語でも英語でもたくさんの情報を得ることができます。私の話では、どのようにスリランカの日常生活でそれらが用いられている

のかについてだけ、簡単に紹介したいと思います。

### スリランカでは紅茶・コーヒーはどのように飲まれているか

まず、スリランカでは日常的にどのように紅茶が飲まれているかについてお話しします。セイロンティーという言葉を知っていますか。1970年代初め頃までスリランカはセイロンと呼ばれていましたが、国名が変わった現在でも紅茶のブランド名として使われています。キャンディやヌワラエリア、ウバ、ディンブラなど、産地によって紅茶の味は異なりますが、スリランカ産の紅茶が好きなら、どの産地の紅茶なのかが味でわかると思います。

スリランカでは砂糖とミルクを入れて飲まれていて、さっぱりとした紅茶の味そのものを味わうことはありません。今日のワークショップではストレートのサラシア紅茶を飲んでみましたが、日常的には飲まれません。ミルクを入れない場合でも、ジンジャーを入れて飲む場合でも、砂糖は必ず入れます。

スリランカではコーヒーは一般的な飲み物ではなく、エリートの特典的な飲み物のような感じで飲まれています。最近では若い人の間で「コーヒーを飲みに行きましょう」といった風潮もありますが、一般的にはコーヒーは薬だと考えられていて、お腹を壊した時に飲むものとされています。私も日本に来るまでは、そのような感じでコーヒーを飲んでいました。例えば、先ほど皆さんと一緒につくったキリバットを食べる時にも、コーヒーを飲みます。キリバットはココナッツミルクをいっぱい入れてつくるので、お腹を壊さないためにコーヒーと一緒に飲まれるのです。お腹をすごく壊した時は、コーヒーにライムやジンジャーを少し入れて飲むこともあります。

薬はひどくお腹を壊した時に使うくらいでして、少しだけ痛い場合はコーヒーを飲むだけ。私も小さい頃からお腹が痛い時はコーヒーを飲んで、薬は摂らないで治すことが多かったです。今も医者には行かず、ハーブを飲んで治すのが常ですが、



一昨年に日本でお腹を壊した時には、友人からライム入り紅茶を勧められて、ブラックティーにライムを入れて初めて飲んでみたら治りました。そんなふうに紅茶やコーヒーは日常的に色々と飲まれています。

#### スリランカの伝統的なハーバルドリンク

スリランカで紅茶が栽培されるようになったのは、400年にわたる植民地の歴史があったことと関係しています。まず最初にポルトガル、その次にオランダ、その後イギリスの植民地になりましたが、イギリスの植民地が一番長く続きました。イギリス人がスリランカの土地にやってきて、まずコーヒーに適した場所を見つけて、コーヒーを栽培するようになりました。その後で紅茶を栽培するようになって、スリランカの人々も少しずつ紅茶を飲むようになりました。

それ以前の時代には、スリランカではベリマル (*Beli mal*) のようなハーブが日常的に飲まれていました。ベリは背の高い木に実る黄緑色のフルーツですが、そのままジュースとして飲んだり、蜂蜜や砂糖を加えてペーストにして食べたりします。味が濃くて強いので、私はあまり食べないのですが、ジュースにするとすごく美味しいです。私の実家にもこの木が生えていて、ジュースにして飲んでいます。この木に咲く花をベリマルと呼んでいますが、地面に落ちた花を拾って乾かした後、水で煮てから飲むと、すごく美味しい。また、実の外側にある皮を切り取って、花びらのお茶に入れて飲むこともあります。ベリマルのお茶はコレステロールや便秘に効くなど、色々な効果があるとされており、健康に良いハーブであると認識されています。シンハラ語でポルパラ (*Pol pala*) やラナワラ (*Ranavara*)、イラムス (*Iramasu*) と呼ばれる植物も、そのまま乾かして水で煮てから飲むハーバルドリンクとして親しまれています。

ゴツコラ (*Gotu Kola*) と呼ばれる植物の葉は、サラダとして食べたり、ハーバル

ドリンクとして飲んだりしますが、コラケンダ (*Kola Kenda*) をつくる時にも用いられます。コラはハーブを意味し、ケンダは色々なハーブでつくるお粥のようなものです。私の実家でも、椰子やココナッツ、健康的な豆類、伝統的な米などを加えて、ゴツコラでコラケンダをつくって飲んでいました。

#### 見直されつつあるハーバルドリンクの価値

現代のスリランカでは、先ほどお話ししたようにミルクティーを飲むのが一般的になり、伝統的なハーバルドリンクはほとんど飲まれなくなりました。スリランカでは粉ミルクを使ってミルクティーをつくるのですが、5年ほど前から医者間で「粉ミルクは健康に良くない」と言われるようになり、国際的な問題になっています。粉ミルクをたくさん輸入している国は、中国の次にスリランカなのです。中国とスリランカの人口を比べると、どれほどスリランカで粉ミルクが飲まれているのかわかるでしょう。ニュージーランドに大規模なナショナルカンパニーがあって、貿易の観点から国としてはダメと言えない関係にあります。そのため政府は何もできないのに、医者は「良くない」と言って、大きな社会問題になっているのです。

私の実家でも以前はミルクティーをたくさん飲んでいましたが、今では両親はほとんど飲まなくなりました。その代わりに、コラケンダを毎朝つくって飲むようになっています。各家庭によって少しずつ習慣が変わってきているところです。私もミルクティーが好きだったので、日本にいても朝も夜も飲んでいたのですが、今では豆乳を飲むようになりました。

#### 身近な場所で買えるハーバルドリンク

皆さんが先ほど飲んだサラシア茶は、スリランカに自生しているコタラヒムブツ (*Kothala Hmbutu*) という植物の幹を粉にしてつくっています。コタラヒムブツは



基本的には輸出が禁じられており、許可を得たところだけが輸出できます。スリランカではサラシアは紅茶として飲まれることはありませんが、薬として用いられています。伝統医療のアーユルヴェーダでは、様々なハーブと一緒に混ぜて飲んだり、体に塗布したりしてきました。最近、スリランカでも糖尿病が流行るようになり、サラシアは糖尿病に効くとされるので、その薬効を認識して飲まれるようになってきました。モリンガのように、原産国であるスリランカやインド、東南アジアよりも、スーパーフードやヘルシーフードとしてグローバルで認識されたことが大きいと思います。

サラシアやポルパラ、ラナワラ、イラムスは、以前はスーパーマーケットでは販売されていませんでしたが、最近は販売されるようになって、紅茶として飲まれています。スーパーマーケットなら一般のスリランカの人々だけでなく、観光客も買いやすいですね。アーユルヴェーダの薬を専門的に扱う小さな商店でも売られています。そのようなお店だとそれほど高い値段ではなく買えます。コタラヒムブツやポルパラ、ラナワラ、イラムス、ベリなど色々なハーブが混ざった粉末状のティーバッグも売られていて、紅茶のようにお湯を入れるだけで飲むことができます。まだまだ流行っているとまでは言えませんが、飲む人は飲んでいるという感じです。

#### 食は薬である

伝統的で健康的な食事を摂ることができる店も、少しずつスリランカで増えてきています。その一つにヘラボジュン (*Hela Bojun*) と呼ばれる場所があります。ヘラは「伝統的なスリランカ独特の」という意味で、ボジュンは「料理」のこと。ヘラボジュンは、スリランカの農業省が開設したレストランのようなところでして、最近はその地域に行っても見かけます。その土地の農作物や料理を味わえるのですが、小麦粉の代わりに米や豆からつくった粉を用いてクリエイティブで健康的な料理を



つくっていたり、ベリなどのフルーツやハーブを売っていたりします。

2020年に奈良県立大学の学生を連れてスリランカへフィールドワークに行ったことがあるのですが、その時にヘラボジュンに寄りました。値段がとても安くて、ベリのジュースは25スリランカルピーくらいでしたので、10円以下で買うことができました。しかもすごく美味しかったです。安くて健康的なものをたくさん食べることができますので、フィールドワークの最後には学生が健康的に太っていましたね。

以前だと、健康的な食事を食べられる店はスリランカには本当にありませんでした。ヘラボジュンが開設されてからは、どの地域でも必ず一つは店を見つけることができ、たくさんの客で賑わっています。ちゃんと政府のマークを掲げている店の方が良いのですが、同じ名前がついた民間のレストランもあって、美味しく健康的な料理を食べることができる場合もあります。

サワーソップやジャックフルーツなど色々な果物からつくられたフルーツジュースを飲むジュースバーと呼ばれる店も、各地にあります。スリランカではソフトドリンクの代わりにフルーツジュースが飲まれる傾向にありまして、ジュースバーでは50円くらいの手頃な値段で、美味しく健康的なフルーツジュースを飲むことができます。

学生と一緒に訪れたビーチリゾートのジュースバーでは、パイアやグアバなど、それぞれの果物の薬効や健康上の利点などについても丁寧に書かれていました。きちんと科学的に調べて書いているのかどうかはわかりませんが、観光地でしたので数倍の値段がしましたが、それでも200円くらいで買えました。サワーソップは味が強くて、私は食べるのがあまり好きではありませんでしたが、初めてジュースにして飲んでみると、すごく美味しく驚きました。

ジャックフルーツは「神様の木」のように言われており、フルーツとして食べることもできますし、カレーにしたり、種を食べたりもできるのですが、ジュースバー



ではそのままジュースにして飲むことができます。そんなふうにはスリランカでは外出した時に、コーラなどのソフトドリンクの代わりに、「喉が渴いたのでフルーツジュースを飲みましょう」というような感じで気軽に飲むことができますので、フルーツジュースはハーバルドリンクよりも流行っています。

#### コロナ禍と共に、伝統的な薬が日常生活へ

日本ではパクチーやコリアンダーと呼ばれていますが、スリランカではコッタマリ (Kottamalli) という名前のハーブでして、種子を潰して粉にしてから飲み物として摂取します。スパイスとしてカレーに入れたりもしますが、葉をサラダのように食べることはあまりありません。コッタマリの種子はすごく健康的だと考えられており、例えば風邪をひいたり熱が出たりした時に、どの家でもよく飲まれています。特に新型コロナウイルス感染症のパンデミック以降は、免疫力を高めるということで、すごく流行るようになり、売り切れることもあります。私の実家でも紅茶の代わりにコッタマリを飲んでいました。

コッタマリの他にも、色々な伝統的な食べ物が、免疫力を高めるという理由で、コロナ以降は注目を集めるようになってきました。先ほどお話したベリのような果物やジンジャー、ガーリック、コッタマリなどの様々なハーブを入れてつくったドリンクが、多くの家庭で紅茶の代わりに飲まれています。今ではほとんど紅茶を飲まないという家庭もあるくらいです。西洋医学が専門の医者でさえ、「私たちが飲んでいるので大丈夫ですよ」とハーブの安全性について言及することがあります。

蜂蜜もその一つでして、伝統的な薬をつくる時にはいつも使われているのですが、最近ではコロナ患者のためのスープのような食べ物に入れられたり、免疫力を高めるために小さじ2杯の蜂蜜を毎日食べてくださいと言われるようになっていたりしています。とりわけコロナ以降においては、伝統的な薬を扱う医者や、アーユルヴェーダ

の専門医がハーブやスパイスからつくる様々な商品が販売されて流行るようになってきていて、スリランカの一般家庭でも日常生活に取り入れられるようになる風潮があります。

蜂蜜について、純度とは何かと考えたり、蜂の体を通したものを口にしているのだと気づかされたりした。一方で、蜂蜜は美味しくいただいているのに、蜂に対するイメージはそんなに甘くないことも反省した。蜂蜜そのものというよりは、蜂と自分の関係性を考えるきっかけになったと感じる。また、スリランカ料理に触れてみて、食についてももっと知りたいと思った。立ち止まって考える機会を逃していたが、土着した地域性や文化の側面に興味を持った。

木村希

食を通して、自分の知らなかったスリランカの文化が身体の中に取り込まれていくように感じた。また、先生のレクチャーを聞き、スリランカでは食べ物で身体を整えるという意識が人々に深く根づいていることを知った。インドから伝わったアーユルヴェーダとそれ以前からある伝統医療の融合によって、現在のスリランカ独自の食文化や医療に対する考え方ができあがっていることにも大変興味を持った。初めて味わったサラシア茶は木の根っこのような独特な風味で、漢方の飲み物に近い、健康に良さそうな味だった。いつか現地に行って、様々なスリランカの食材を試してみたい。

榎本歩美

スリランカの食文化に初めて触れたが、最も興味深かったのはコリアンダーについての話だった。台湾ではスープの上にコリアンダーの葉を飾ったり、アイスクリームやピーナッツパウダーと一緒に包んで春巻きにしたりして食べるが、スリランカでは風邪や熱が出た時に効く薬として服用されていると聞いて驚いた。また、サラシア茶が、葉ではなく木の幹からつくられているということも初めて知った。一口飲むと、土地とのつながりを感じることができるようだった。

HUANG Peng Chia

## 長坂有希ワークインプロGRESS展

### 「Ethno-Remedies: Bedtime Stories ⇄ A Life's Manual」

#### トーク①

長坂有希（アーティスト／香港城市大学クリエイティブ・メディア学科博士課程研究員）

山口未花子（動物人類学／北海道大学准教授）

吉岡幸次（養蜂家／吉岡養蜂園） 吉岡伸次（養蜂家／吉岡養蜂園）



出展作家の長坂有希さん、動物人類学者の山口未花子さん、養蜂家の吉岡幸次さん、吉岡伸次さんによるトークを開催しました。長坂さんが昨年度から活動を共にしてきた吉岡養蜂園の日々の仕事の様子、蜜蜂や他の動物とのコミュニケーションのあり方、人間の営みとの深いつながりなど、実践家の経験と実感にもとづく興味深いお話から多くの刺激を受ける機会となりました。

#### プロジェクトの経緯と吉岡養蜂園との協働について

**長坂** 私はアート分野の人と仕事することが多いのですが、今日は親子2代で養蜂をしている吉岡幸次さん、伸次さんが来てくださって嬉しく感じています。山口未花子さんは先住民の人々と共に研究をしながら、狩猟も実践しています。業種異なる実践家の観点を交えつつお話しできたらと思っています。

最初にプロジェクトの経緯についてお話しします。昨春、奈良県立大学CHISOUから奈良で3年間ほどのプロジェクトをしてほしいという話を受けました。もともと土地に興味があり、その土地特有の地形や気候、自然、他の生物と人間の営みとのつながりの中で生まれてくる知恵や技術に関心がありました。私は大学で美術を学んできましたので、実践を通して生まれてくる知恵をもっと学びたいと思い、それを軸にしたプロジェクトを奈良でやろうと考えました。Ethno-Remediesは民間薬や民間療法を意味しますが、薬のような物質的なものだけでなく、それぞれの土地で人間の営みを通して培われてきた、生きていくための知恵や技術を意図しています。

昨年度は、奈良は薬草が有名なので薬草園に行ったり、在来野菜の栽培者にお会いしたり、ニホンオオカミが奈良で最後に確認されたことにも興味を持って調べた

りしているなかで、養蜂にも関心を持ちました。養蜂と奈良には深いつながりがあり、『日本書紀』に「渡来人が三輪山に蜜蜂を放った」と書かれていて、それが日本の養蜂の始まりだそうです。調べていくうちに奈良の生駒山を拠点に養蜂をしている家族がいること、その家族は北海道に毎年遠征する移動養蜂もされていることを知り、とても興味を持ちました。突然お電話して来訪したにも関わらず、すごく温かく迎えてくださいました。蜂の生態や、肌身を通して感じる気候変動と温暖化の影響など、私が全く考えたこともなかったこと、実感として感じにくいことを話してくださり、多くの学びをいただきました。また、家族の仲の良さや温かい人柄、蜂に対する愛情に惹かれて、一緒に活動をしたくと強く思いました。

そこで今年度は養蜂に絞って、伸次さんの移動養蜂に同行させていただいたり、蜂の生態について話を伺っていた際に提案いただいた蜂箱に絵を描くプロジェクトをしたりしました。今回の展示では、それらの活動から得た成果物を展示しています。今日、まずお伺いしたいのですが、幸次さんと伸次さんはどのような経緯で養蜂を始めたのでしょうか。

#### 養蜂に携わるようになった経緯

**幸次** 後に私の師匠になる人が隣村で養蜂をしており、中学校を卒業する直前に「弟子がほしい」と声がかかりました。養蜂なんて生まれて初めて聞く言葉で、全くわからなかったのですが、興味が湧いて即日快諾しました。5年間お世話になった後、20歳で独立して今日に至ります。

**伸次** 生まれた時から当たり前のように「うちは蜂蜜屋なのだ」と感じて過ごしてきました。大学まで行かせてもらい、サラリーマンをしているなかで、蜂蜜屋をしながら蜂を飼っている父の姿を間近に見ていたら、「やってみいな」と。全ての責任を自分で負って蜂を飼育していく仕事でして、自然が相手なので何があるか



わからない。そのリスクを考えると止めたほうが良いと父に言われましたが、「やりたい」と言ってやらせてもらった。同業者の知り合いに助けてもらいながら、奈良から北海道まで移動して養蜂する移動養蜂をさせてもらって、今日に至っています。

#### 良い蜜蜂を育てるための移動養蜂

**長坂** 移動養蜂は昔から行われていたようで、春の花前線を追いかけて蜂と移動しながら蜜を採っていくというロマンチックな印象があり、長い日本列島の地形や地理と合っていると思って興味がありました。実際に同行してみると、もちろん今は現代だから、移動しながら蜜を採るのではなくワープに近い状態です。奈良で蜂を箱に入れて、一度も開けることなく北海道まで行ってから箱を開ける。展示映像にも移動養蜂の様子が記録されていますが、どのようなものなのか説明していただけますか。

**仲次** 奈良で春を迎える時、北海道はまだ冬。花も桜前線と同じように時期をずらしながら開花していきますので、北海道が春になる頃に移動します。なぜ移動するかと言うと、蜂蜜を採るというのがありますが、要は蜜蜂を育てるため。移動すると春が2回来るので、蜜蜂のコロニーが大きくなり、蜜蜂がより良い状態になる。一箱から二箱に増やし、二箱から三箱に増やしていきながら、蜜蜂のコロニー数を増やして奈良に持って帰る。奈良県は苺の生産が盛んな地域ですので、よく育てた蜂を園芸農家に出荷することによって、美味しい苺をつくってもらえる。しっかり受粉できる蜜蜂をつくるために移動養蜂があるのです。

**山口** 蜂を育てるって面白いですね。養蜂家は蜂蜜を採るのがメインだと思っていましたが、蜂を育てて農家にリースするのですね。

**仲次** リースも販売もします。養蜂業界には問屋があり、私たち養蜂家から買い上げた蜂を、奈良県以外の蜂を必要とする園芸農家にも出荷していただきます。

**山口** 蜂蜜をたくさんつくる蜂と、受粉を上手にする蜂は一緒なのですか。それとも別々で使い分ける感じでしょうか。

**仲次** 使い分けるというか、つくり上げていきます。私たちは養蜂家なので、蜂を捕ってくるハンターではなくて、蜜蜂を年中飼育し続けて個体管理をしていきます。一箱ずつ時期に応じた適正な管理をして、常に蜜蜂を良い状態で保っていくのが養蜂です。

**山口** では一つの群れが、この時期は蜜をたくさんつくるように、この時期は受粉をするようにと、飼育の仕方によって色々な得意技を身に付けさせることができるということでしょうか。

**仲次** そうですね、その用途に特化した蜜蜂をつくることは当然できます。蜂蜜をたくさん集めるためには、蜜蜂をたくさん集める群れをつくってやります。

**長坂** 他の養蜂家に付き添っている時、「吉岡さんの家の蜂はたくさん蜂蜜を採れる」と皆が言っているのを聞いて驚きました。

**山口** 同じ西洋蜜蜂でも養蜂家によって蜂の質が全然違うのですね。

**幸次** 育て方が大事です。蜜蜂の習性をいかに習得して、その習性を活かした働きをしてもらうかですが、それができる人とできない人がいます。蜜蜂が花の蜜を採って帰ってきて、巣箱で蜂蜜に変換して、それを私たちはいただくのですが、その蜜源である花がないと、いくら蜜蜂がいても蜂蜜は採れません。そのためには花をつくる必要があります。息子が小さい頃のピクニックの行き先は、蜜源になる樹木の種を自分で蒔いて植林している山。「ここで遊べ」と子どもに言って、私たち夫婦は植林をしているような家庭でした。



## 人間の食生活と蜜蜂との深い関わり

**幸次** 私が独立した昭和40年頃、全国で農薬が普及し、花の交配をする益虫が絶滅する恐れが高まりました。そこで着目されたのが蜜蜂でした。当時、師匠と二人で農家に使ってもらえるように頑張ろうと、県の農業試験場を訪れた。自然界と違ってビニールハウスで蜜蜂を使うにはどんな環境にしたら良いかについて3年間ほど県職員と試行錯誤した結果、奈良県で苺栽培の農家に最初に使ってもらえるようになった。奈良では多種多様な苺があるのも、農業試験場が頑張って品種改良してきたおかげです。

トマトだけは花の構造が違って蜜蜂による交配はできませんが、それ以外の花には全て蜜蜂が利用されており、裏方として人間に貢献してくれるから果実が成るのです。全国で蜜蜂が収益を上げていますが、交配による収益は3500億円。私たちが蜜蜂からいただく蜂蜜は、3500億円のうち2%ほどの収益しか上がりません。皆さんは蜜蜂と言うと蜂蜜やプロポリスを連想しますが、実際はそのような形で人間に貢献してくれているのです。京都の大きな種苗会社が野菜の種をつくるのにも、蜜蜂を出荷させていただいています。蜜蜂が交配してくれないと良い種ができないという点で、人間が食している野菜や果物は蜜蜂の恩恵を受けています。

**長坂** 以前お話を伺っている時、蜂が関係している食物をつないでいくと、米や牛肉はつながらないけど、私たちが思ってもいないたくさんの食物と蜂が関係しているということが印象的でした。

**幸次** 皆さんに一番知ってもらいたいのは、蜜蜂って、蜂蜜を採るだけではない、家畜ではないということ。人間の食生活に深く関わってくれている。この子たちの活動があるから、今、色々な果物を美味しく食べさせてもらっている。

## 蜜蜂の表情や気持ち、雰囲気を汲み取る技術

**長坂** 以前、幸次さんが「蜂の性格や気持ちがわかる」というようなことを仰っていて、伸次さんも撮影中に「今日はちょっと蜂の機嫌が悪い」とか「今日は蜂が忙しくて人間のことを構っていない」とか口にしたことがありました。感覚的なことなので言葉で表すのは難しいかもしれませんが、その感覚について少しお話を聞かせていただけますか。

**幸次** 60年近く養蜂をしています。奈良県ではほぼ100%の確率で花が咲いて蜂蜜を集めてくれます。一度だけ4月から5月にかけて雨が続き、2トンほどしか生産できない凶作がありましたが、普通なら10トンほどの蜂蜜が毎年採れます。北海道は気候が悪く、夏でも「やませ」と呼ばれる冷たい風が吹いて霧が発生し、1カ月に一度も太陽を見ることがなかった年がある。寒くて蜜蜂が飛べず、霧で花や植物の具合も悪くて蜂蜜が採れない年もある。

蓋を開けると、まず蜜蜂の顔を見るのですが、蜂蜜が採れる約1週間前になるとサインが出る。花が咲いておらず蜜が採れない時の顔は、尖っていてギクシャクした感じですが、1週間ほど前になるとふっくらしてきて、「しめた、近いうちに蜜が採れる」とわかり、宿のおばさんに「ちょっと4、5人集めてよ」と願います。蜂蜜を集める時期にしか新しい巣はつくらないので、夜なべで巣を準備する。人間は木枠と原板、巣礎を入れるだけで、後は蜜蜂に任せると巣をちゃんと完成させてくれる。蜜蜂が蜜を貯めて巣を欲しがるとまで気づかない人は、作業が後手後手にまわってしまいます。

それから羽音も大事。蜂場の前で車を降りたら耳を澄ませて羽音を聞く。いつも箱の中でワアワアしている音が、蜂蜜を集めるようになると、静かなシャーッという音に変わる。巣箱から外に出る時も、いつもはワーンとした感じなのに、蜂蜜を集めだすと花のたくさんある方向に一匹一匹の音が集中したようなゴォーンとい



う音になる。だから、この子たちの働いている顔と姿と音をいつも気にしています。秋になれば「もう採っちゃいけない」という終わりのサインが出るので仕事を止めます。

**仲次** 蜜蜂と蜂屋の関係ですが、蜜蜂は資材でも道具でもない。ペットという感覚でもないけど、ちょっと近い。相手が何を欲しがっているのか、表情を汲み取る。蓋を開けた瞬間にだけわかる表情もあって、作業して蜂の巣を触ると雰囲気は抜けてしまう。例えば、女王蜂がいる巣といない巣では、巣の中の雰囲気が違います。新しくできた女王蜂か、まだ交尾をしていない女王蜂かによって雰囲気が違う。入口の巣門を見ただけで、この群れはまだ女王蜂が誕生していないとわかります。それは経験というか、表情なのか、まあ蜂屋の感覚ですね。言葉ではなかなか難しいですが、父の言う「ニコニコしている」という表現は、ふくよかとか、艶々しているとか、機嫌の良い状態です。天気が悪いと蜜蜂は機嫌が悪く、花の具合によっても変わる。「この時期までは蜜が採れるけど、これから先は蜂も荒くなってくるよね」というところで作業を止める。

蜜蜂だけでなく、巣1枚を見ても「そろそろ蜂蜜を貯めてくる準備かな」とわかります。子どもを産むスペース、蜂蜜を貯めるスペースがありますが、蜂蜜が貯まるシーズンになると1枚1枚の雰囲気が違って来る。蓋を開けて顔や雰囲気も確認するけど、間違いないことを確かめるために巣を1枚ずつ目視して確認する。病気が出ていないかも見ながら、良い状態のまま1年を過ごすために、いつも個体管理して養っています。

#### 蜜蜂の機嫌や気持ちができるようになる時

**山口** 大体どのくらいで、どんなふうに蜂の機嫌や気持ちができるようになってきたのですか。

**仲次** 表情などは言葉では伝えられないので、父から「今日は機嫌が良いな」とか漠然と聞いているなかで、「もの言わぬ子たちだからこそ、汲み取ってやるのかな」と思って見ていれば、ある日「アッ」と気づいて、後で結果としてつながると「あの時こういう顔をしていたから、こうだったのだな」と。

**幸次** 師匠に付いていた頃、色々な作業を見て「なぜ今この作業をするのか」と尋ねると、「蜜蜂の顔を見るとわかる。蜜蜂が教えてくれるから」と言われました。一緒に付いて行く時は「あれ持ってこい、これ持ってこい」と言われて、蜜蜂をじっくり観察できる時間もない。師匠がいない時にそっと蜜蜂のところへ見に行くということを繰り返していると、ある日突然「あ、これか」と。自分が疑問に思っていること全てが一度につながる時が来る。家にいても寝ていても蜜蜂のことばかり考えていて、それだけ思いをかけていると、ある日突然、見えますね。見えると楽で、思ったようにコントロールできるようになる。私は10年ほどかかりましたね。

**山口** 私もカナダのユーコンの先住民のおじいちゃんに狩猟を教えてもらっていたのですが、「後はもう動物に聞いて。自分も大体のことは動物から教わったから」と言われました。どうしたらわかるようになるのかと尋ねると、「なるべく森の中にいて、ずっと動物のことを考えていた」と。だから本当にその通りだなと思って、今のお話を伺っていました。そんなふうにならなくて、何回も蜜蜂を見ていれば、わかる時が来る。それってすごい励ましですよ。時間をかけて知識や経験がある程度積まないとわからない、人からは教われない領域というのがあるのですね。

#### 長い月日をかけて実践から得られる感覚的なもの

**長坂** 美術も似たようなところがある気がします。大学で知識やセオリーも学べけれど、それと並行して、すごく感覚的なところでたくさんのことを一度に考えている……とか、考えていないけれど考えているような。自分の中で必然的に「こ

うだよね」と思っているのですが、そこにどう辿り着いたのかはわからない。ちょっと違うかもしれませんが。

**幸次** いやいや、同じだと思います。蜜蜂を上手に飼える人は、感性で飼っているようなものです。蜜蜂の飼育の本を読んで知識を得ても、うまく飼えない。長い月日をかけて蜜蜂と対面して、感性が養われた時に初めてわかるのです。日本の大学で蜂の生態を研究している教授の研究発表を聞きに行くのですが、実際に飼っておられる様子はひどいものです。本にも書いていらっしゃいますが、本通りにしたら蜜蜂を養えないのではと思います。長い月日をかけて教授なりに勉強して、我々はそれを活用させてもらうけど、養蜂家と教授ではそういう違いがあります。

**山口** どのように蜜蜂を見ているかが違う気がします。お二人の話聞いてみると、蜜蜂への愛情だけでなく、尊敬というか、「後は任せておけば大丈夫」みたいな信頼がある。狩猟をしている時も、動物に対して尊敬や感謝のような感覚がある。捕りたいとか、うまくコントロールしたいという気持ちだけでは、わかるところまで行けない。一步引いて任せたり、愛情を持って接したりすることが大事だと感じました。教授たちも愛情はあるかもしれませんが、研究対象として蜜蜂の生態を知りたい気持ちが先に立って、見方がちょっと異なるのかもしれないですね。私も研究者ではありますが。

**長坂** 山口さんはどちらも兼ね備えている印象があります。今のお話を聞きながら、私は言葉について考えていました。本のように何かを残していくのは言葉だけど、言葉では汲み取れない感覚的な何かがある。その中に知恵というものが絶対にあって、実際にやることでしか獲得できないけれど、お話を聞くなかでわからないなりに想像する。それを繰り返していくことが大事なのではと思いました。

蜜蜂たちが互いに身を寄せ合い温め合って生存に最適な温度を保ったり、蜜をリレーしながら協力し合って運んだり、貯蔵場所を守る蜂がいたり、子育てをする蜂もいたり、蜂たちの協働のあり方や社会のことを知り、自分が働く会社組織や、人の働き方と重ねて考えてみた。蜂と違って、人は言葉を使ってコミュニケーションをとることができる。それならばもっと良い関わり合い方ができるのではないかと思うが、逆に言葉を使えるからこそ、一緒にうまく関わり合えないという状況も生まれているのかもしれないと感じた。

神田梨生

吉岡養蜂園がお世話をしているのは西洋蜜蜂だが、日本蜜蜂について調べている時に、木の洞の中などに巣をつくるということを知り、「あそこにいるかな」とか「あそこは住みやすそうだな」と、今までとは違う視点で自然を見るようになった。

続木梨愛

以前、職場にダンゴムシが大量発生したことがあった。隣で工事をしていたので逃げたのかな、工事が終わったら落ち着くだろうと考えていたが、他のスタッフはすぐに駆除するか薬を撒くかという話を始めた。その時、人の視点だけで見るのか、あるいは他の生き物の視点からも見るのかによって、考え方や行動に大きな違いが生まれると感じた。親子で養蜂を営まれているお二人は、蜜蜂の視点は同じように持ちつつ、その関係性に違いがある点が興味深い。伸次さんは人も蜜蜂も並列で、お互いに幸せになれる関係を目指しているように感じましたし、幸次さんはより蜜蜂に主体を置き、負担をかけないことを意識して関わっているように感じた。

早田典央

## トーク②

長坂有希 (アーティスト/香港城市大学クリエイティブ・メディア学科博士課程研究員)

長岡綾子 (グラフィックデザイナー)



出展作家の長坂有希さんと、グラフィックデザインを通してプロジェクトに伴走してきた長岡綾子さんによるトークを開催しました。長岡さんが手がけたプロジェクトロゴや蜂箱のモチーフなど、それぞれのデザインが仕上がるまでの経緯や意図、背景にある両者の思いについて詳しくお話を伺いながら、プロジェクト全体の趣旨や今後の展開について理解を深める時間となりました。

### 一見ではわからないプロジェクトロゴ

**長坂** 今回は展示空間として、「ふうせんかずら」という本屋の奥にある蔵を使わせていただいておりますが、普段はお客さんが入れないスペースです。蔵へは土間を抜けて、中庭の周りを通っていくのですが、土間の入り口には「Ethno-Remedies: Bedtime Stories ⇄ A Life's Manual」と書かれたロゴの暖簾を掛けています。私は本が大好きでして、このプロジェクトでは最終的に図鑑のような本をつくりたいと思っているのですが、本の中に入っていきようなイメージで、それをくぐり抜けて展示会場に入ります。このロゴは、プロジェクトの1年目に長岡綾子さんにデザインしていただいたもので、土間のスペースではデザイン提案書を壁面に展示しています。ロゴについて私の考えをお伝えした後、長岡さんが幾つか案を出してくださり、それらについて私がフィードバックしたことに基づいて、長岡さんがリファインしてくださって……というやり取りの経過が読み取れる資料です。

**長岡** 最初に三つの案を出ささせていただきましたが、最終的に最もわかりにくい案を選んでいただきました。文字が回転しており、一見では読めないようになっていきます。長坂さんからプロジェクトの方向性についてお伺いした時、蜂の視点になったり、養蜂家の視点になったりすることで、自分が見ている世界が違った視点で見

えてくるということをお聞きして、文字を回転させると読めないような、一見ただけではわからないものを提案させていただきました。

**長坂** 世界も一つの視点ではなく色々な視点から見た総合的なものとして現れているように、私たちが最後につくりたいと思っている図鑑も、そのような考えが反映されていたら良いなという願いを込めて、ロゴのデザインをしてくださいました。

### 奈良の土を表すロゴの色

**長岡** ロゴの色については、奈良の土の色を参考にしました。複数の色をご提案したのですが、長坂さんは「茶色が良い」と仰ってくださり、「茶色だったら土の色にするのはどうか」という話になりました。「そういえば、奈良の土ってどんな色なのだろう」と気になって色々調べてみたところ、全国の土について詳しく紹介しているウェブサイトがあり、奈良市東九条町の畑の深さ17センチ以深から採取した土の色がマンセルカラーで掲載されていました。その頃に仕事でご一緒していた奈良文化財研究所の方が土色帖をちょうど持っていて、マンセル値から色のチップがわかるようになっており、私の持っているDICカラーとも比較して色を出しました。

**長坂** 幾つかの場所の土のサンプルをもとに幾つかの色を提案してくださって、最終段階ではビジュアル的に最も魅力的な色を選びました。ロゴデザインの提案書の下には、三つの物を展示しています。一番右には、大安寺の前にある奈良市東九条町の畑から取ってきた土が盛りられています。実際は色々な土の色が混じっているので、ロゴの色と一致しているかという結構違うのですが、ロゴの色の背景にはこの土があるということのを連想していただくために展示しています。

一番左に展示しているのは孔雀石です。奈良県御所市三盛鉾山で受講者と一緒に見つけました。緑っぽい孔雀色をしているので、この名前が付いたみたいです。奈良時代から奈良は孔雀石の採れる場所として有名だったようで、『万葉集』では奈



良の枕詞として「青丹よし」と謳われています。当時は青というのが緑で、丹というのが土を意味しており、良い緑色の土や岩が採れる場所を表していました。長岡さんとロゴの色について話していた時もそうですが、初めに大地ありきという感じで、まず土があって、その上に植物があって、生き物の営みがあるという展開していくことを想定して「最初は茶色で」となりました。色と土地の関連性という観点から、孔雀石も展示しようと考えました。

真ん中に置いているのは、赤膚焼という奈良名産の陶器です。奈良で採れた土からつくられていて、焼くと釉薬のかかっていないところが赤くなるから赤膚焼と呼ばれています。奈良の土と色が深く関わり合っていることを象徴する物として展示しています。

### 二つの世界をぐるぐると循環し続ける矢印のデザイン

**長岡** プロジェクトのコンセプトとして「Life's Manual」が意味する現実的な世界と、「Bedtime Stories」が表すお伽話の世界を行き来するとお伺いして、ずっとぐるぐる循環しているイメージを持ちながら、矢印の形やレイアウトの仕方について幾つかのパターンをご提案させていただきました。

**長坂** 色々な人々と協働することを通して得た知恵を伝播させていくために、最終的には図鑑をつくりたいと考えているのですが、その図鑑のイメージとして、ベッドの横に置いてあって、夜寝る前に手に取りたくなるような、寄り添ってくるような物語「Bedtime Stories」なのですが、いつの間にか生きるための糧や知恵「Life's Manual」にもなっている。でも、また違う場面で読むと、単なる物語になっている。その行き来がぐるぐると続いていくような図鑑にしたいという願いがあります。長岡さんのデザインは、ずっとぐるぐる循環している感じを、最も有機的に出していたいだいたと思います。

### 蜂箱のモチーフ6種類の形が意図すること

**長坂** 今年度の活動の主なテーマは、奈良の生駒を拠点に養蜂をしている家族との協働でしたが、ひょんなことから蜂箱に絵付けをしてほしいというお話を養蜂家からご提案いただきました。蜂の視覚や生態がどのようになっているのか、蜂や養蜂家にとってどんなものが良いのかについて、リサーチやテストをしながら、長岡さんとデザインを詰めていって、実際に絵付けした蜂箱を中庭に展示しています。

この展覧会は「ワークインプログレス展」という名の通り、制作途中を見せることが意図されていますので、「何が起きているのか」をより可視化できるように構成しています。中庭の廊下に展示している長岡さんによる蜂箱モチーフデザインの提案書では、段階を経てどのようにデザインが展開して最終デザインになっていくのかをご覧ください。

**長岡** 長坂さんからお伝えいただいた「奈良の生駒山と北海道のピンネシリ山、その間を行き来する様子を表すような形にしたい」というお話から着想して、形をつくっていきました。奈面方面から見た生駒山はなだらかで、はっきりとした頂点があるというよりは何となく丸い感じで、二つのなだらかな丸みがつながっているように見える。そのような特徴をなだらかな稜線で表しています。

ピンネシリ山は三角形が比較的是っきりした形ですので、生駒山と区別するために三角形を強調し、頂上に凸凹のような形状があるので、それが特徴となるように形をつくりました。蜂にはわからないかもしれないのですが、人間の視点からも山の形として特徴づけたいなと考えたからです。

もう一つは、吉岡養蜂園の養蜂家が夏に奈良から北海道に蜂を連れて行くため、生駒山からピンネシリ山に移動する形ということで、蜂が見分けられるような有機的な形をつくろうと考え、一回転している形にしてみました。できるだけ蜂の視点で考えようと思って、本当のところ蜂の視点なんてわからないのですが、できる限

り調べて長坂さんとも相談するなかで、ベタ塗りの形と線の形なら見分けられそうという方向になり、それぞれの形につき2種類ずつつくっています。

**長坂** 移動を表す線の形は、二つの線で表されることによって、人間と蜂と一緒に移動している感じがより出ていたので、ぜひ使いたいと考えていました。

#### 蜂箱の色が意図すること

**長岡** まずベースとなる色を塗った後でモチーフの形を塗るという手順でしたので、ベースの色から提案させていただきました。蜂の見分けられる色について調べていくと、黄、緑、青、紫くらいなら見分けられるということがわかりました。赤は色彩としては見えずグレーや黒に見えるという説が有力でしたが、人間には色彩としてわかるので加えました。また、白も白として他の色とは違うものとしてはっきり見分けられるため、最終的に赤、黄、緑、青、白の5色を選びました。

**長坂** 蜂箱は何より蜂が使うものだし、蜂蜜は加熱殺菌しないので、蜂や人間が触れたり口にしたりしても害がなく、しかも屋外でも耐久性のある塗料は何だろうと考えて、アマニ油からつくられている自然塗料のU-OILにしようとなりました。

**長岡** 長坂さんとも相談して、蜂が最も集まって直接触れる入口の奥には塗らないでおこうと決めました。また、入口がある面は全て白く塗るようにしたのですが、背景を広く見せることでモチーフの形がはっきり見えやすくなると考えてのことです。蜂が上から降りてくる時に、天面が最初に見分けるポイントになるので、そこは色で分けたいと考えました。遠くから見た時にもわかりやすいように他の面も色で分けることにしました。

**長坂** 基本的に蜂箱は何十年も使われるものなので、色が剥げたり修理が必要だったりすることもあるだろうけど、その度に私たちが修理するわけにはいかないということもあり、ステンシルで形を塗りたいと考えました。実際に塗ってみるとアマ

ニ油はすごくサラサラで、形の輪郭を整えるのが大変だったのですが、乾かしたり温めたりして濃度を高めるなどの上手く塗る方法をだんだん学んでいきました。

#### 言葉にはできない曖昧なものをデザインする

**長岡** 今回の展示も含めて長坂さんの作品は、様々な媒体を複合させて一見ではわからないインスタレーションのような見せ方をされていて、リサーチの過程も含めるという点も美術鑑賞に慣れている方でないとわかりづらいものがあると思います。そのような曖昧ですぐにははっきりとわからず、鑑賞者に考えさせてくれるような、すごくフワフワさせるようなものを持っている。明確なカテゴリーに括られず、新しいカテゴリーとして発生しているようなところが、私にはすごく面白く感じられます。

私自身もデザインする時に、見る人が考えられるような余白を持たせるということを意識しています。デザインも作品も、見る人が介入することで、見る人の中で強くなっていくというか。例えばデザインで言うなら、写真に映っている二人の観光客が旅行を楽しんでいるみたいなの、すごくわかりやすく言葉で表せるポスターなどがありますが、頭の中で考えたものをそのままつくっている感じがする。アイデアを形にするとそうなりやすいのですが、ポスターなのに言葉で受け取っているような感じがして面白くない。そうならないように、言葉にならないものを意識しながら、ある程度の時間をかけて間隔を置いて眺めたりしながら、色気のようなもの、すぐにはっきりとはわからないようなものがあるかどうか気にしています。

**長坂** すごく共感しますね。私の活動においても、わかりにくかったり矛盾しているように感じられたりするところを意識しています。私は言葉も表現の一つの媒体として使っていますが、すごく説明的な言葉もあれば、より物語的で詩的な言葉というものあって、それらが組み合わせっていくことでイメージをつくりだします。一つに限られないような複数のイメージを生み出す言葉の使い方ってどのような



のだろうと考えながら活動しています。哲学書を書くのではなく、物語を書くということにこだわっているのは、そこがあるからです。

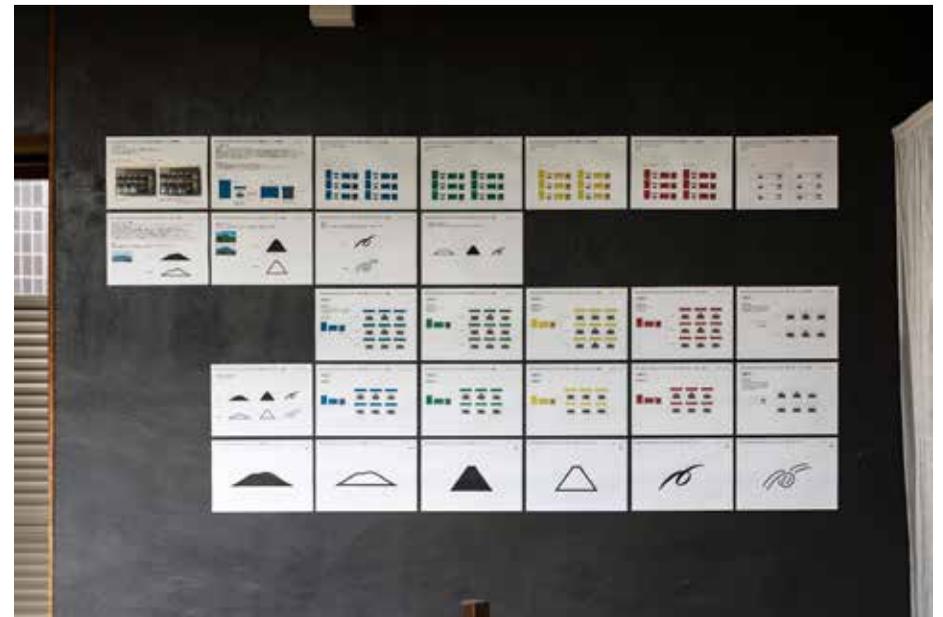
私がつくりことができるのは全体の50%くらいだと思っています。色々な解釈を促すための部品のようなものは用意しており、私なりの組み合わせ方はもちろんありますが、それを強要したいわけではありません。色々なチョイスがあるなかで、それぞれが好きなのを組み合わせて、その人なりの解釈や体験をつくってもらえたらと思っていて、鑑賞者や受け手に50%くらい委ねています。鑑賞者を信頼しているというか、受け手ではなく一緒につくっている協働者のように考えています。

#### アーティストとデザイナーのコラボレーションによる、時間をかけたプロジェクト

**長坂** このプロジェクト自体もすごくフワッとしていて、3年間のはずだけど先がわからない。でも、何か活動を続けて最終地点は図鑑に落とし込みたいというなかで、初期の段階から長岡さんに加わっていただきました。このような感じでデザイナーとコラボレーションするというのは私にとって初めてなのですが、長岡さんはアーティストとコラボレーションしながらつくるという経験をお持ちでしょうか。

また、私は初めての経験ですので、そういうものなのかと思いながらやっていますが、こちらからアイデアをお伝えすると、長岡さんはデザインするだけでなく、「土はこのようなものがありますよ」とか「蜂はこれが見えるらしいですよ」とかリサーチもすごく一緒にしてくださる。長岡さんご自身の活動の中で、リサーチはどのような意味合いがあるのでしょうか。

**長岡** 作家の展覧会のDMやチラシをつくることはありますが、アーティストとコラボレーションしながらプロジェクトや作品制作に並走してつくるといった経験は初めてです。長坂さんは相手を信頼して任せてくれるので、すごく嬉しくてやりがいがありますし、進めやすいです。想像以上に楽しんでつくらせていただいている



感じがあります。

リサーチについては、全ての案件で色々なリサーチを毎回しているというわけではなく、長坂さんのプロジェクトがリサーチ中心で展開していくということもあって、作品や活動のコンセプトに寄せていくために、リサーチをして調べていくことを大切にしながら進めています。

もちろん普段のデザインでもリサーチをすることがありますが、それは有効な制約をつくるためでもあります。何でもありだと逆につくれなくて、ビジュアルが最も大事ではあることに変わりはありませんが、そのビジュアルの方向性を絞り込んでいくため、デザインをより強くしていくために制約をかけていくというようなことをします。ですので、その制約を生み出すための素材として調べるということでしたら他にも結構あります。しかし、科学的なことまで調べるということは常にしているわけではなく、今回のプロジェクトだからこそ、そのコンセプトの方向にもっと合わせていくためのやり方を考えてそうするようにしています。

**長坂** このプロジェクトでは今後も長岡さんと協働しながら、最終的には図鑑をつくれたらと考えています。奈良での活動を通して得た知恵や技術が、私の中にゆっくり根づいていくように、その図鑑を読んでもくれる人たちの心の中にもゆっくり染み込んでいき、もしいつか危機や困難に直面することがあれば、それらを生き抜いていくための糧、道を照らすものになってほしいと思っています。図鑑を読んでもくれる人たちが心の中に根づかせていく行為はすごく時間のかかることではありますが、その知恵や技術がいつも読者の一部としてあり、他者に伝えてもらうことで伝播していったらと願っています。

私の職業はコピーライターで、皆にとってわかりやすく、つかみやすい言葉をつくるのが自分の仕事だと考えている。しかしその一方、より余白があったり、より広がりがあったりする言葉も好きで、本当はそういったものを自分の仕事でも使いたいと感じていたこともあり、長岡さんがロゴを生みだされる過程や、プロジェクト全体をどのように捉えていたかというお話に共感するところが多くあった。

野村隆文

自分は趣味で自然農をしている。地面に腰を下ろして草を刈る時、そこにいる小さな虫たちに意識を向けると、どんどんミクロな世界に近づき、そこで感じたあらゆるものが体に入ってくる。そのような体験を通して、すぐに何かを理解したり解釈したりしようとするのではなく、身体を使って感じ取ろうとすることが大切だと思うようになった。長坂さんが仰ったように、人間は言葉を使うことで何かに働きかけたり関わったりしていく。実際はその過程で、言葉ではない何かを伝えようとしたり受け取ろうとしているのだと思う。CHISOUをきっかけに、吉岡養蜂園の蜂場を訪ねることができてとても良かった。吉岡さんの現場で伺ったお話や、交換した言葉ではない何か……。その時その場での体験が、いつか誰かと会話するなかで、また言葉として出てくるのではないかと思う。

井上謙吾

Program

# 3

## 「時間」

——地を移動し、時間を旅する、新たなツーリズム

山城大督によるアートプロジェクト「TIME TRAVEL, NARA」では、今の奈良のまちを逍遙しながら、1400年の積層した歴史の手がかりを見つけ、時間を旅することを試みます。今年度は「香り」というテーマのもと、様々な分野の専門家と学び合い、奈良県各地でのフィールドリサーチやワークショップを経て、奈良のまちなかを舞台に体験型のアート作品を企画制作しました。

### プログラム2「生態」

アーティスト：長坂有希

プロジェクトメンバー（受講者）：井上謙吾、榎本歩美、神田梨生、木村希、続木梨愛、野村隆文、早田典央、HUANG Peng Chia

レクチャー講師：長岡綾子、山口未花子、吉岡幸次、吉岡伸次、ラナシンハ・ニルマラ

プロジェクトマネジメント：山本あつし、西尾咲子、内山幸子

### 長坂有希ワークインプログレス展

「Ethno-Remedies: Bedtime Stories 〓 A Life's Manual」

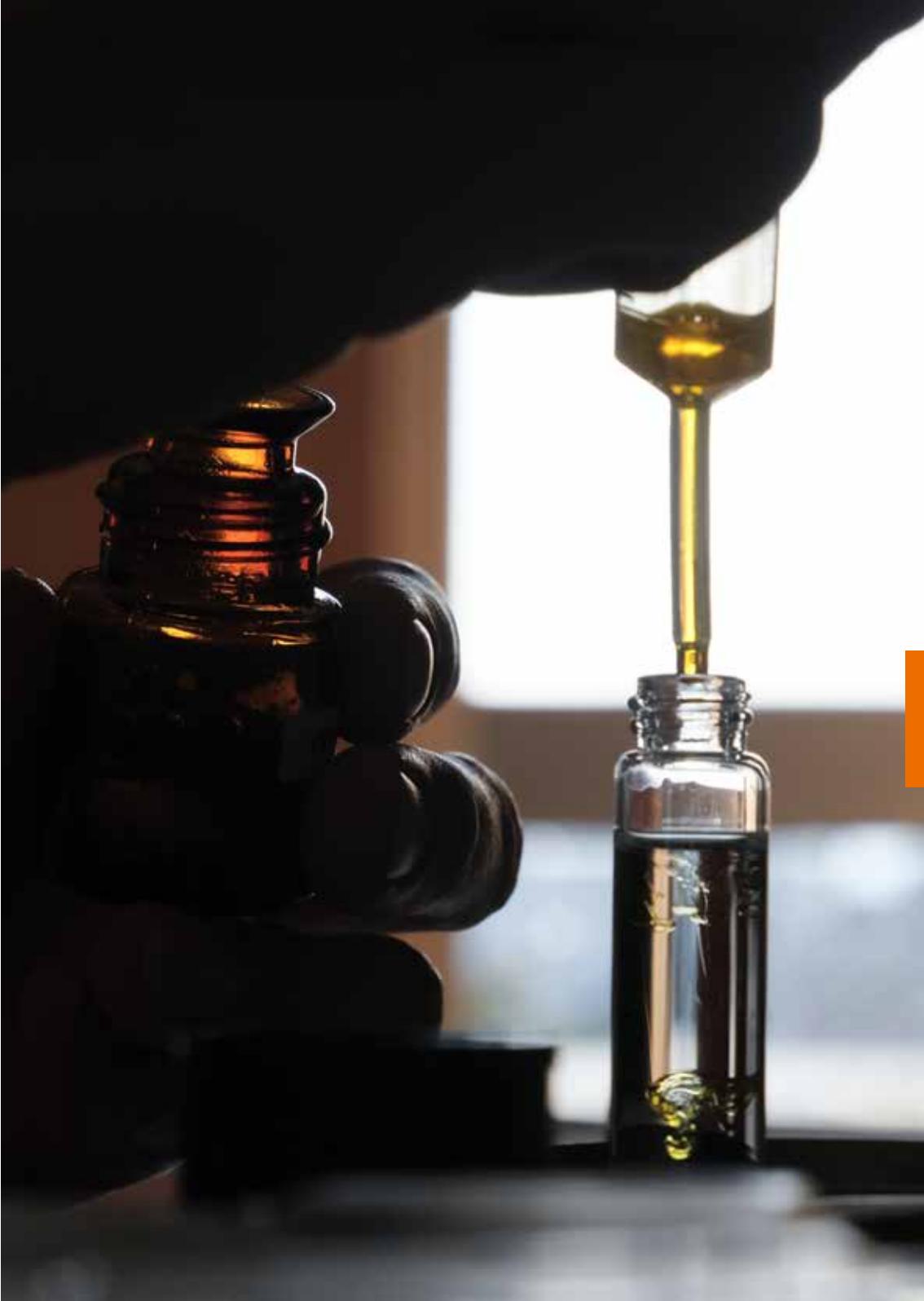
会場施工：芳野崇（設計施工舎 kurashito）

プロジェクトロゴ・蜂箱デザイン：長岡綾子

映像撮影：山中美有紀

DMデザイン：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）

協力：吉岡養蜂園、ふうせんかずら、井上唯、大蔵キエ、大堀晋司、櫻井莉菜、鶴田憲次、西尾純一、山本みずほ、吉田真弓



## TIMELINE



2021年8月9日

レクチャー「ume, yamazoe——  
人の感覚が優しくなる環境をつくる」(梅守志歩)



2021年7月24日

オリエンテーション

山城大督さんと受講者の皆さんがCHISOU lab.で初対面。山城さんから、これまでの作品制作や、昨年度に発足した「TIME TRAVEL NARA (奈良時間旅行団)」の経緯と活動内容について話を伺う。受講者も自己紹介をして、「奈良が好き」「時間に興味がある」「自分の可能性を広げたい」など参加動機を語り合う。



2021年7月31日

レクチャー「時間と香り」(西山厚)

仏教史家の西山厚さんを招き、時間と香りについてお話を伺う。「時をかける少女」から始まり、『宇治拾遺物語』、蘭奢待、果てはキャベツまで、様々な時代とジャンルを跳躍する西山さんの刺激的な話に、山城さんと受講者から質問が相次ぐ。香りとは、人や場所、出来事と共に記憶され蓄積されるものという要点について学ぶ。



奈良県山添村の1日3組限定の宿ume, yamazoeを訪れ、オーナーの梅守志歩さんから話を伺う。人の感覚が優しくなることを目指して建てられたume, yamazoe。梅守さんの言葉を全身で体感できるホテルとサウナを味わう。サウナ室で蒸され、水風呂に飛び込み、デッキで風に包まれると、身体が自然と渾然一体になったような得も言われぬ感覚になる。

2021年10月2日

レクチャー&ワークショップ  
「調香教室」(石田理恵)



調香家の石田理恵さんによるレクチャーと調香教室を開催。石田さんが自宅の庭から摘んできた様々なハーブを水に挿すと、爽やかな香りで部屋全体が満たされる。記憶と深く結びついた香りの特徴について説明していただいた後、10種類のオイルを調合して、山城さんと受講者それぞれがオリジナルの香りをつくる体験をする。



2021年10月24日

会場視察&企画構想ミーティング

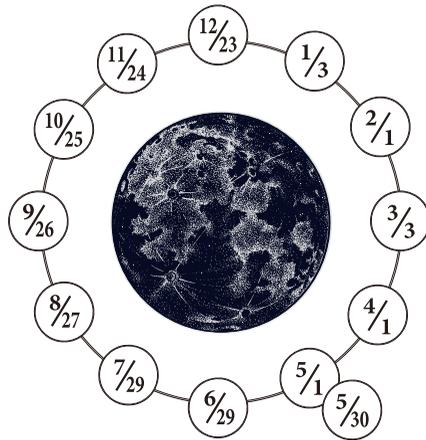
12月に開催する会に向けて、会場の下見と企画構想ミーティングを行う。元洋裁教室の魅力的な空間で、「時間と香り」をテーマにどんなことができるのか、山城さんを囲んでアイデアが自然と湧き出てくる。その後、浮見堂まで歩いてランチミーティングと本の交換会を実施。本を通して各自の考えや趣味がわかる交流の楽しさを実感。

2021年11月23日

フィールドリサーチ「大和当帰の精油蒸留を見学」



宇陀市の大和かぎろひで、西田奈々さんによる案内のもと、大和当帰の精油蒸留を見学する。多年草である当帰は血の道症などに効果がある生薬。奈良の豊かな土壌で年月をかけて大切に育てられた大和当帰の葉や茎を刻み、それらを蒸して精製される精油。ごく僅かしか取れない貴重な精油には、自然の営みや人々の知恵、様々な時間の層が折り重なっている。



## 香りで時をかける

この香りは2022年の記憶を呼び起こす装置となります

奈良県立大学 実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU  
プログラム3「時間」

「TIME TRAVEL NARA——香りの頒布会」

山城大督 with 奈良時間旅行団\*

\* 奈良時間旅行団：奈良県立大学「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」山城大督プロジェクトの受講者により2020年度に結成。2021年度メンバーは、今野瑠子、内田好美、緒方遠海、北村良子、小宮さえこ、佐藤利香、堀本宗徳、山本菜由。

香り制作：石田理恵

協力：梅守志歩、西田奈々（大和かぎろひ）、西山厚  
TIME TRAVEL NARA ロゴ制作：志水良（Balloon Inc.）

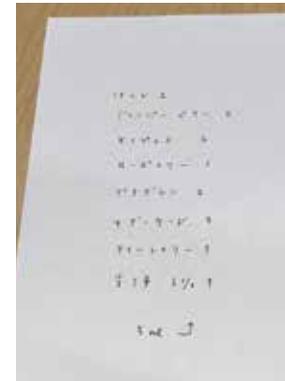
はっか 2  
ジュンバーベリー 2  
サイプレス 2  
ローズマリー 1  
プチグレン 2  
セダーウッド 5  
ティートゥリー 1  
当帰 5% 1  
(5 ml)

45

「TIME TRAVEL NARA——香りの頒布会」で頒布する香りの箱の蓋裏に貼付したラベル

2021年12月2日

TIME TRAVEL NARA オリジナル香りの制作



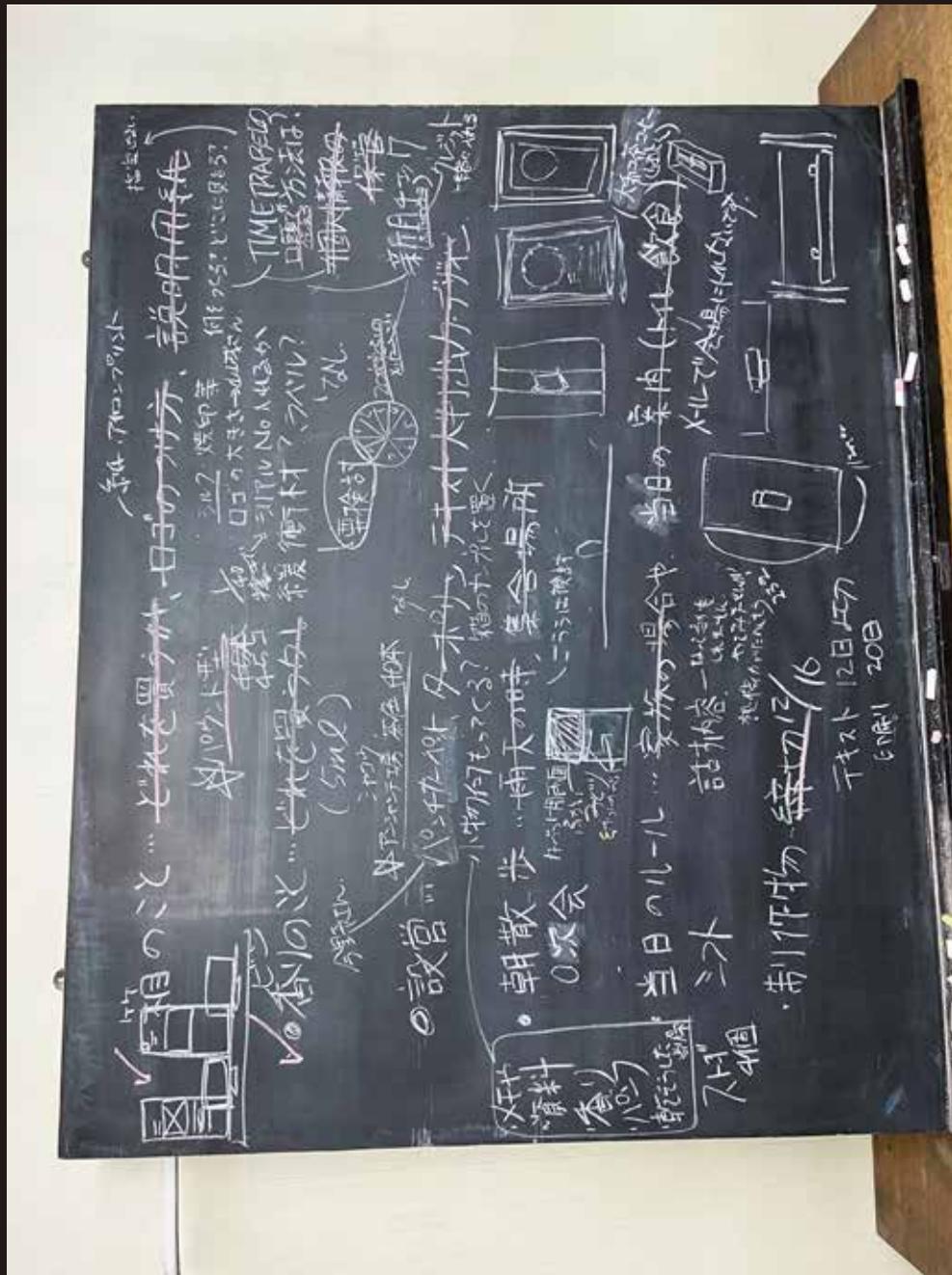
調香家の石田理恵さんが、12月の会で頒布する香りの試作品として2種類の香りを調合。どちらも大和当帰の後を引く芳香が印象的。香りを使う方法やタイミング、コンセプトを踏まえて、どのような香りにするかを話し合い、少しだけ別の香りを加えて完成。爽やかで優しさもあり複雑で個性的な、唯一無二の香りの誕生です。



2021年12月5日

会場掃除&企画構想ミーティング

「香りの頒布会」の会場となる Dear Gallery NARA で、マネージャーの松本尚大さんと一緒に大掃除。今回お借りするのは、表通りに面したギャラリーではなく、細く長い通路の奥にある元洋裁教室の大部屋と、茶室のような小部屋で、展示空間として使うのは初めてとのこと。香りを入れる箱の仕様、会場の設え、スケジュール、役割分担などを打ち合わせる。



2021年12月5日の企画構想ミーティングで話し合われた内容をまとめた板書

2021年12月19日  
シルクスクリーン制作

香りの瓶を入れる箱の表面に、シルクスクリーンの技法を用いて、「TIME TRAVEL NARA」のプロジェクトロゴを受講者が手作業で刷る。失敗を重ねながら試行錯誤の末、最後は美しく刷れるようになり、ずらりと並んだ箱のロゴを眺めて、版面の醍醐味を体感する。



2021年12月23日～25日

「香りの頒布会」搬入・設営



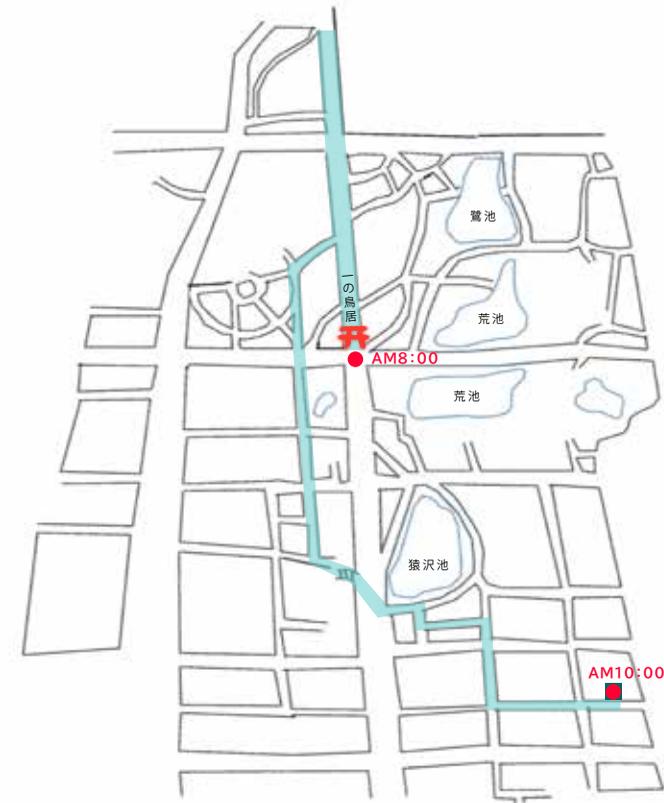
Dear Gallery NARAで、マネージャーの松本尚大さんのお力添えとインストーラーの高橋和広さんによる手ほどきのもと、「香りの頒布会」の設営作業を行う。香りを入れる箱の制作も大詰め。受講者が役割分担をしながら編集してきたテキストや映像も一つひとつ配置されて、だんだんと展示空間ができあがっていく。



## TIME TRAVEL NARA

香りの朝散歩 案内:石田理恵

2021.12.26



「TIME TRAVEL NARA——香りの頒布会」の関連イベントとして実施した「香りの朝散歩」で参加者が巡るルートを記したマップ







## 「香りの頒布会」対話シート

### ■受付

- 本日はお越しくださりありがとうございます。
- コロナ対策を別会場でしてきたかを確認、まだの人には検温・体調チェックシートの記入をお願いする。
- トイレの場所確認
- ご予約はされていますか？  
→はい：〇時〇分からご予約されている〇〇さんで間違いはないでしょうか。担当者に引き継ぐ。  
→いいえ：ご来場、ありがとうございます。展示を自由にご覧ください。よければ受講者から説明させていただきます（フリーの受講者に引き継ぐ）

### 1. 挨拶（3～5分）※椅子に座ったりして

- 本日担当します、奈良時間旅行団の〇〇です。どうぞよろしくお願いたします。朝散歩に来られなかった方でしたらその話も（拾ってきた香りのプレゼントを渡す）
- どうしてこのイベントを知ったのか、きっかけや、興味を持っていることなどヒアリングする。

### 2. 展示の流れ説明（10分）

まずは、私たちがこれまで学んできたことについてお話しします。

- 西山厚さんによるレクチャー（蘭奢待の話とか）
- 梅守志歩さんによるレクチャー
- 石田理恵さんによるレクチャー&ワークショップ  
※このあたりでオリジナルの香りを作って頒布するアイデアを思いつきました
- 西田奈々さんによるレクチャー&ワークショップ

### 話す内容

- どこで行ったか ●どういう方か ●何をしたか ●何について学んだか
- 自分の感想  
※「この場所ご存知ですか？」など、対話しながらできたらよい！  
※細かい内容の説明というよりも、自分がどんな部分に感動したか、記憶に残っているか、個人的考えをお話したほうが受け手も楽しいかなと思います。  
別室で香りをお渡しします。

### 3. 香りをお渡しする（8～10分）

- これらのレクチャーを通して、時間と香りの関係や、奈良に積み重なった時間、奈良の香りなどを肌で感じてきました。そこで学んだことから、2022年の奈良を表すような香りを制作し、香りとのつながりの力でタイムトラベルしてみようと考えました。
- 今回はお越しいただいた皆さんに、そのための道具をお渡しします。ぜひ、私たちと一緒にタイムトラベルしましょう！

お渡しする部屋へ案内する

- どうぞこちらにお座りください。  
(部屋の手前で靴を脱いでいただき、奥のカーペットへ)
- こちらが、私たちがつくった香り「TIME TRAVEL NARA」になります！

### 香りの説明

- 西田さんによるレクチャーで出会った、大和当帰の香りを用いて作りました。  
(香りの配合、制作に携わってくださった方についてなど…)
- その場では香らない  
ご自身のお好きなタイミングで開封して、楽しんでいただければと思います。

### 楽しみ方

- (蓋を開けてもらって、裏の説明を見せながら話す)
- 大和当帰の香りはかなり強く、後まで残ります。好みには個人差があるかもしれません。一度試してみて、もし気分が悪くなるなどの症状が出ましたら、無理に使わないようにしてください。
- 香りを楽しむタイミングを決めて、1年間この香りと共に生活していただいたら、いつか2022年のことを思い出す玉手箱のような役割を果たす香りになっているかもしれません。
- タイミングの目安として、こちらに新月のカレンダーを記載しております。2022年の最初の新月が年明けすぐになっていますので、新年の新しい気持ちや決意とともに香っていただけたら、開封の時間が、その決意を思い出すきっかけになると思います。
- もちろんこれは楽しみ方の一例ですので、お好きな方法でこの香りを楽しんでください。
- そのままの場合と肌につけた場合で香り方が少し異なります。肌につけると体温の影響で柔らかい印象の香りになります。ぜひお試しください。
- こちらは肌につけるだけでなく、枕やカーテンにスプレーしてリラックスしたり、アルコールスプレーにいれて香りづけしたりもできます。お好きな方法でお楽しみください。

## 「時間と香り」

西山厚（仏教史・仏教美術史／半蔵門ミュージアム館長／帝塚山大学客員教授）



奈良と仏教をメインテーマに、人物に焦点をあてながら、様々なメディアで生きた言葉で語り書く活動をしている西山厚さんから、「時間と香り」について話を伺いました。「時をかける少女」から始まり、『宇治拾遺物語』、蘭奢待、果てはキャベツまで、様々な時代とジャンルを跳躍する西山さんの刺激的な話題に、山城さんと受講者から質問が相次ぎました。「香りは、人や場所、出来事と共に記憶され蓄積されるもの」など、その後のプロジェクトの鍵を握る重要な観点について多くの学びを得られました。

### 「時をかける少女」のラベンダーの香り

「時間と香り」というお題を聞いた時、「時をかける少女」という映画が思い浮かびました。1983年に初めて映画化された後、何度も映画化やアニメ化、テレビドラマ化されてきましたので、ご覧になった方もいるのではないのでしょうか。最初の映画は、筒井康隆によるSF小説を、大林宣彦監督が映画化した青春ファンタジーでした。高校生の芳山和子は学校の実験室で白い煙と共に立ち上ったラベンダーの香りを嗅いだ瞬間、意識を失い倒れてしまう。それ以来、時間を移動できるタイムトラベラーになってしまい、不思議な現象に悩まされるようになる。ラベンダーの香りを嗅いだことによって、時間を移動できる能力を、別に欲しくないのに、彼女は獲得してしまった。まさに「時間と香り」の深い関係性をみることができます。

### 人や場所、出来事と共に記憶される香り

香りは、人や場所、出来事などと共に記憶され蓄積されていくという特徴があります。香りだけが単独で記憶されることはほとんどなく、香りと共に記憶は定着するという言い方ができるかもしれません。逆に、思い出す時は香りと共に蘇ることになるでしょう。例えば、30年前に好きだった人の香り、その人自身の香りかも

しれないし香水の香りかもしれませんが、30年後に同じ香りを嗅いだ瞬間、30年前の彼女のことを思い出す。時間と香りには深い関わりがあります。

「かおり」は漢字で書くと「香」「薰」「芳」という3通りの書き方があります。「時をかける少女」で主人公の名前が芳山和子でしたが、「芳」という字が名字に含まれているのは、おそらく偶然ではないと思います。「嫌な香り」とは書かないように、「香」は良い香りの時に使うことが多い。良くない場合に使うのが、「嗅覚を刺激するもの」という意味での「におい」。良い場合には「匂い」と書いて、嫌な場合には「臭い」と書くように、使い分けることが多いですね。

### 五感で最も原始的で根源的な嗅覚

私たちには外の世界を認識していくための五感が備わっています。『新明解国語辞典』によると、五感によって得られる充足感のことを「官能」といいます。「官能」は、官能小説のように少しエッチな意味でよく使われますが、性的なことはまさに五感で得られる充足感の代表です。ただ、そういう方面ばかりではなく、満足感、喜びを、全て官能といいます。

10年前に私は『官能仏教』という本を出しました。仏教の教えによって救われると言っても、例えば、お釈迦様と同じことを嫌な人に言われても説得力がないし、救われもしない。お釈迦様の語る内容だけでなく、お釈迦様がどういう姿で、どういう顔立ちで、どんな声で、どんなふう喋るか。あるいは、もう少し近づいたら匂いもしたかもしれない。あるいは、体に少し触れた時の感触など、そういうものが相まって、人は安らいだり、癒やされたり、救われたりするというようなことをテーマにした本です。その五感の中でも、匂いを嗅ぐことが最も原始的で根源的だと思います。



### 一瞬で変化する身体の匂い

人間の身体の匂いは変化します。例えば、犬好きな人は犬に吠えられないのに、犬嫌いの人はよく吠えられる。犬嫌いの人は犬を見ると緊張して、犬が嫌いな臭いを出すからです。また、外国でいつもとは違う物を食べていると、身体の匂いが変わってくることもある。疲れている時、熱がある時、緊張した時、色々な時に、一瞬で体臭は変化します。香水は、付ける人の体臭と掛け合わされるため、付ける人によって匂いが違います。人によって、一瞬一瞬、違う香りが無限に生まれているのです。

丁子、麝香、零陵香、甘松香、桂皮という五つを調合した体身香を飲み続けると、5日経ったら身体から良い香りがしてくると言われています。10日目には着た服にも良い香りが移る。25日経つと手や顔を洗った水までも芳しくなり、1カ月後には抱っこした赤ん坊もその香りになる。そうすると排泄物まで良い匂いになる。

鎌倉時代の『宇治拾遺物語』にもそんな話があります。ある女の人を好きになったけれど、叶わない恋だった。彼女の排泄物を見たら、幻滅して好きな気持ちがなくなるだろうと思ってこっそり見たら、それが何とも良い香りだったので、余計におかしくなってしまったという話。これも体身香ですね。

話が変わりますが、キャベツはコナガの幼虫に食べられた時に出す匂いで、コナガの天敵のコナガマユバチを呼び、飛んできたコナガコマユバチがコナガの幼虫を食べてくれる。モンシロチョウの幼虫に食べられた時には、また違う匂いを出して、天敵の蜂を呼ぶ。自分を食べる虫の種類によって違う匂いを出して、それぞれの虫の天敵を呼ぶのです。そんなふうに世界は色々な生き物が匂いを出しながら暮らしています。

### 仏教と香り——香湯、香積仏

国宝である東大寺の誕生仏は、お釈迦様が生まれてすぐに立って、歩き、右手を上げて「天上天下唯我独尊」と言った様子を表わしています。これを誕生仏といいます。お釈迦様の誕生日は4月8日で、各地のお寺に誕生仏が置かれ、甘茶をかける行事がありますが、もともとは香湯という良い香りの湯をかけていました。「浴像功德経」によると、香湯に入れる香りは、牛頭梅檀、紫檀、多摩羅香、甘松香、芎藭香、白檀、鬱金香、竜脳香、沈香、麝香、丁子香などです。

また、弁才天をご本尊としてお祈りする場合は、32種類のお香を湯に入れるそうです。菖蒲、牛黄、麝香、雄黄、桂皮、沈香、梅檀、零陵香、丁子、鬱金、甘松、藿香、安息香、芥子、青木などです。この場合は、お坊さんがお風呂で身体を淨め、弁才天にお祈りをする。そうすると弁才天がどんな病気も治してくれて、どんな苦しみも鎮めてくれて、たくさんの福德をくれると「金光明最勝王経」に書かれています。

「維摩経」によると、衆香国には香積仏という仏様がいて、言葉によらず香りによって人々に教えを説きます。まるでアロマセラピーのようです。アロマセラピーとは、精油、または精油の良い香りや、植物に由来する良い香りを用いて、病気や外傷の治療、病気の予防、心身の健康、リラクゼーション、ストレスの解消などを目的とする療法を指します。「維摩経」に書かれていることも、香りによって人々が幸せになるという点で同じです。現代では、香りによるストレスの解消がしきりに試みられていますが、同時に無臭化への方向性も強まり、強い臭いが敬遠されるようになって、香りの活用と無臭化という両極が強まっています。

### 仏教と香り——香華燈、焼香、塗香、両界曼荼羅

奈良時代に日本で2番目に大きな寺だった西大寺は、だんだん衰退しましたが、鎌倉時代に叡尊というお坊さんが復興しました。今も西大寺には五輪塔の形をした



叡尊の墓があり、墓前には香華燈と言われる三つの物がお供えできるようになっています。三つの物とは、お香とお花と明かりで、仏様が喜ぶものです。お葬式や法事では焼香をしますが、亡くなった人もお香が好きです。お葬式では花もたくさん飾られ、蠟燭などの明かりも立てられ、香華燈が供えられていることがわかります。

お香を焚いて仏や死者を拜むのが焼香です。たいいてい沈香や白檀という香木の粉末をベースにしていますが、日本香堂というお香の会社のホームページを見てみると、ラベンダーのお香がありました。ラベンダーの香りを嗅ぐとタイムトラベラーになってしまうかもしれませんから気をつけないといいですね。

焼香に加えて塗香もあります。法会や写経などの前にお香を手や身体に塗るのですが、掌に少し付けてこすると、香りが体に付いて消えません。その日の夜になっても消えないほどです。塗香によって身体や心が浄められた状態で、法会に参列したり、写経をしたりします。

密教には両界曼荼羅という絵があります。胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅のことで、仏様がぎっしりと描かれています。密教には、言葉ではなく絵でこそ深い教えが伝えられるという考え方があるため、絵を描くことが盛んで、国宝や重要文化財がたくさん残っています。金剛界曼荼羅の中央に描かれた成身会と言われるところに、密教世界で最も大事な大日如来がいらっしゃいます。その周囲には金剛焼香菩薩、金剛塗香菩薩、金剛華菩薩、金剛燈菩薩が表わされています。香華燈の供養を担当する仏様たちです。焼香と塗香は全く別の行為ということなのでしょうね。

#### 正倉院に宝物として納められたお香

正倉院の建物の中は三つの部屋に分かれています。真ん中の扉から中に入って右に進もうとしても壁があって進めない。右に入りたければ外に出て、また右の扉から入り直す必要がある。それぞれの部屋は北倉、中倉、南倉と呼ばれています。

奈良時代に東大寺と大仏をつくった聖武天皇が亡くなった時、聖武天皇が大事にしていた物を、光明皇后は一つ残らず大仏に献納し、それらは北倉に納められて今日まで伝えられてきました。奈良国立博物館では毎年、正倉院展が開催されますが、正倉院の宝物全部が聖武天皇が大事にしていた物だと勘違いしている人も少なくありません。三つの倉のうち北倉にだけ、聖武天皇が大事にしていた物が入っており、南倉には東大寺の宝物、中倉には光明皇后以外の人が大仏や東大寺に献納した品々が入っています。

北倉の中に、長さが105.5cm。重さが16.65kgの全浅香という大きな香木があります。奈良時代の説明書きを読むと、大仏ができた翌年の753年に国家を護る法要を行うために大仏に献納したものであることがわかります。

光明皇后は様々な品々を大仏様に献納した時に、それらの品々の目録をつくりました。そこには、光明皇后が書いた楽毅論や、聖武天皇が書いた雑集など4巻の書の名も記されていますが、4巻を納めた箱には裏衣香が入っていました。裏衣香は様々なお香を紙で包んだもので、防虫香として用いるものです。

また、中国五千年の歴史におけるナンバー1の書家である王羲之の書20巻のことも記されており、それらを入れている箱にも、やはり裏衣香が入っていました。正倉院に裏衣香として残っているのは、零陵香、藿香、沈香、丁子香、甘松香、白檀などを紙に包んだものです。ちなみに、正倉院の宝物はほとんど虫に食べられていません。絹などは時間と共に劣化して粉末化していきますが、虫食いは本当はない。裏衣香の力もあつたのではないのでしょうか。

現代でも正倉院事務所は、沈香12g、丁子香60g、白檀35g、甘松香17gを紙に包んで、裏衣香をつくっています。防虫のためばかりではなく、例えば、宝物を運ぶ際に、周りに裏衣香を置き、宝物が動いたり倒れたりしないようにする、そんな用途もあります。



### 奈良時代に法隆寺や大安寺が持っていたお香

法隆寺資財帳には、法隆寺の資財の全て、つまり建物や仏像、所有する土地など、何から何まで書かれていて、奈良時代に法隆寺がどのような物を持っていたかがわかります。その中にお香もたくさん登場しています。例えば、薰陸香、これはクレオパトラが大好きだった乳香です。甲香というタニシの貝殻を焼いた粉末もありました。それ自体は臭いのですが、他のお香と調合すると臭くなくなり、お香の匂いを安定させ、長持ちさせてくれる。奈良時代のお坊さんはそのようなことを知っていたのです。

大安寺にある資財帳にも、同じようなお香の名前が書かれています。その中の麝香、これはジャコウジカから採れるもので、現代においても様々な香料に加えられています。麝香自体にも濃厚な香りがありますが、調合した香料の香りを長く保つ働きもあるそうです。

聖徳太子の1400年遠忌を記念して、奈良国立博物館では先月まで特別展「聖徳太子と法隆寺」が開催されていました。そこで展示されていた玉虫厨子をよく見ると、柄香炉を持つお坊さんが描かれていることがわかります。持ち運びができるように、柄のついた香炉です。仏様や尊い方にお香を捧げる時に使います。

### 正倉院に献納された60種類の薬と蘭奢待

正倉院にある丸い銀薫炉は、上半分と下半分がパカッと分かれ、中にお香を入れて焚くのですが、転がしても中はずっと水平を保てるようにつくられています。これは衣に香りを焚きしめるためのものでして、衣を上には掛けるのですが、蹴とばしても大丈夫。北倉にありますので、これも聖武天皇の持ち物でした。

聖武天皇が亡くなった時、60種類の薬も一緒に献納されたのですが、宝物と薬は目録を別にしています。薬の目録である「種々薬帳」のトップバッターは麝香です。お香と薬は重なっているところがあります。桂心や人参、高麗人参、大黄、甘草など、

今でも漢方に使われているものがたくさん書かれています。

この目録の最後には「この薬を飲んだら、どんな病気も治る。(身体の病気だけでなく)どんな苦しみもなくなる」と書かれている。宝物は大事に保管されましたが、「この薬は病気の人のために使ってください」と光明皇后は書いています。「この薬を飲んだら夭折することなし」という言葉もみえますが、実はこの28年前に光明皇后の子どもは満1歳を迎えることなく亡くなっているのです。光明皇后は「あの時この薬があったら、あの子は死なずに済んだのに」と思い出していたに違いありません。子どもを亡くした後、光明皇后は病院である施薬院と、身寄りのない人を収容する福祉施設の悲田院をつくりました。献納された薬は施薬院でも使われています。

正倉院で一番有名な香木が、蘭奢待です。大きくて156cmもあります。香木の種類で言うと沈香です。昨年大河ドラマ「麒麟がくる」では、織田信長が蘭奢待を切る重要なシーンが放送されました。蘭奢待には三つ付箋が付いており、それは室町時代の足利義政が切り、織田信長が切り、明治10年に明治天皇が切った証ですが、実はもっとあちこち切られています。

沈香は沈香樹という木から採られますが、この木自体には香りがありません。傷ついた時に、傷を癒すため分泌される樹脂が固まったものが沈香で、傷ついた沈香樹の生への必死な営みの産物といえます。ちなみに、沈香は採れる場所によって香りが違うそうです。蘭奢待は香りの分析から、ベトナムとラオスの国境地帯で採られたと考えられており、香りを求めてそこまで行ったことがあります。

### 神社と香り——春日若宮おん祭

神社においても香りは大切です。春日大社の中に若宮という神社があり、毎年12月17日に春日若宮おん祭が行われます。奈良で一番大きな祭りで、平安時代の

1136年からずっと続いています。午前0時に神様である若宮様が出てこられ、全ての明かりが消されたなか、西の方へ進み、お旅所に至ります。参道に立つと本当に真っ暗闇です。

やがて遠くに松明の明かりが見えてきますが、その前に良い香りが流れてきます。神様が進む道を浄めるために、沈香を焚いているのです。沈香の香り、松明が燃える匂い、そしてやがて、目の前を神職の方々が幻のように通っていきます。若宮様がお旅所に入ると、その前で様々な芸能が奉納されます。12月17日の午前0時から午後12時まで、24時間に及ぶお祭りです。午後12時が近づくと、同じように沈香を焚きながら、若宮社へ戻って行かれます。このようなお香の使い方もあるのですね。

最後はおまけのような話です。先日、「香りの器」という展覧会に行きました。古今東西の香水の瓶を集めた展覧会です。ある人がこんな感想を書いていました。「古い香水瓶を前にすると、自分の未生の魂を見ているような気になる」。ある人とは、私の兄です。兄らしい文章だと思いました。香水の瓶を見ているうちに、時を越えてしまったのです。香りと共に時をかける。時間と香りの深い関係性を改めて思いました。

西山さんは香木などが実際にどのような香りをしているのか全く説明しなかった。言葉だけで全てを表すのは不可能で、そのために香りや音、味などが存在するのかもしれない。五感全てが、私たちの表現の術であり、表現を受け取る術であると改めて思った。また、人が香りをどのように受け取るかはバラバラだと感じた。複数の人がいたら、その場に存在する香りは同じでも、受け取り方は何通りにもなる。自分以外の誰かが受け取った香りは、完全に理解することはできないから想像するしかない。そのような香りの魅力に昔の人は気づいており、だからこそ仏教にたくさんの香りの物語があるのかもしれない。

佐藤利香

私はバイト先で薫玉堂のお線香を売っている。わかりやすい「宇治の抹茶」という名前のものから、「音羽の滝」など香りをあまり想像できない商品まで取り扱っている。コロナ以降、家での生活を快適にする香りの商品が売れているが、昔の人が香りを大切にしたいのと同じように、現代でも香りとの関わりが続いている。また、蘭奢待は時代を越えて現在まで受け継がれているが、織田信長や明治天皇は蘭奢待の香りに何を感じ、想起したのか、時代によって感じ方は異なるのか気になった。時代を越えて好まれる香りがあるならば、それは土着的でアイデンティティと関わる、古代と現代を結びつける機能があると思う。

堀本宗徳

香りは期限があるものだと考えていた。外出する前に香水を付けると、家に帰る時にはその香りが消えてしまっているように。しかし、香りと記憶を掛け合わせることで、期限のある香りが永久のものになるのだ。ただ、記憶というものも永遠に存在しているものではない。どちらにしても、いつか終わりを迎えてしまうものかもしれないが、そのような点も含めて香りというものは儂いものなのではないかと感じた。また、想像力を豊かにすることがいかに大切かも学んだ。春日大社や東大寺など、ずっと存在している場所に行くと、建立された当時から今この瞬間までに訪れた全ての人々と同じ香りを共有しているのだと思い、胸が高鳴る。生きている時代は違えど、同じものを見て、同じように五感を使って鑑賞しており、想像するとタイムリープをした気持ちにもなる。

山本茉由

レクチャー

## 「ume, yamazoe——人の感覚が 優しくなる環境をつくる」

梅守志歩（ume, yamazoe 支配人）



奈良県山添村の宿ume, yamazoeを訪れて、オーナーの梅守志歩さんから、その理念や宿ができるまでの経緯、思考の変遷、山添村の本質的な魅力についてお話を伺いました。レクチャーの後は、梅守さんの言葉を全身で味わうことができるサウナを体験。ハーブを使ったフィンランド式サウナで蒸され、水風呂に飛び込み、デッキの上で風に包まれると、自分の身体が自然と渾然一体になったような不思議な感覚を得られました。

### 奈良県東部にある山添村は、三重の文化が濃く、自然が豊かな場所

ume, yamazoeのある山添村は奈良県の最も東寄りにあり、三重県との県境に位置しています。生活圏としては伊賀や名張、上野に行くことが多く、奈良市に行くことはあまりないため、生活習慣や言葉は三重に近い感じです。村のおじいちゃんやおばあちゃんが話しているのを聞いていると、たまに言葉がわからない時があります。

ume, yamazoeは山の中にありますが、もともとの家は5棟あり、蔵をサウナに改修しました。「そんなところの家をよく買ったね」と言われますが、この家は東向きで、朝日が眼前から昇ってくるのがすごく綺麗。季節によって太陽が移り変わっていく様子を定点観測できて、自然の動きや流れがよく見える場所です。

### 大阪での営業マン生活から、奈良の梅守本店に戻る

十数年前には新卒で大阪のIT広告営業の仕事をしていました。一昔前の営業マンのように、夜まで走り回って、数字を稼ぐような生活。3年で辞めて、両親が経営する梅守本店という会社に戻ってきました。自分の意思ではなく、家業だから誰かがやらなければならないという家の事情で、無理やり戻ってきたので、最初は本当に嫌でした。

梅守本店は、手鞠寿司を箱詰めして製造販売するのが本業です。どちらかというところ、柿の葉寿司をつくる工場のような業態に近いのですが、もう少し可愛くて、華やかで、なんだか楽しそうな感じがしてしまいました。最初は父に騙されたと感じていました。入社後すぐ、父がもともと構想していた寿司体験事業を立ち上げることになり、最初は子ども会や老人ホーム、障がい者施設を対象に始めたサービスでしたが、インバウンドの影響でヒットして、自分で寿司をつくって食べるプログラムを海外の観光客に提供していました。コロナ前は多い日で約千人が参加していました。

### 山添村につながる大きな転機——オフィスキャンプ東吉野

私には大きな転機が2回あり、その一つが奈良県東吉野村にあるオフィスキャンプ東吉野です。クリエイターが移住することでコミュニティをつくる「クリエイティブ・ヴィレッジ構想」により、古民家を改装したコワーキングスペースが2015年につくられました。目の前に川がありコーヒーが飲めて、地域のイケてる人たちがいる。

デザイナーの坂本大祐さんと菅野大門さんが手がけているスペースですが、子連れで移住してきた大門さんが話してくれたことが印象に残っています。当時の私には、会社に所属して給料をもらって生活するという頭しかなかった。でも、菅野さんは川で流木を拾ってメルカリで売ってお金を得ていると聞いて、「田舎で住むってどういうこと」と衝撃でした。もちろんそれだけが仕事ではなかったと思いますが、お金を稼ぐ方法は色々あって、会社に所属しなくても生きていく術があるらしいと感じたことは、大きなパラダイムシフトでした。

### 山添村につながる大きな転機——『旅をする木』

二つ目の転機は、『旅をする木』。アラスカの写真家の星野道夫さんによる本で、私のバイブルです。写真はなく、文章で書かれた短編集です。その中に「もう一つ

の時間」という章がある。自分が普段生活している時間とは別に、大きな自然の流れというもう一つの時間が流れている。自分は全く意識していないだけで、蟬の声や太陽の位置が変わるなど、別の時間がすぐ横で動いている、というようなことが書かれています。

東京の編集者が、アラスカまで会いに来て、鯨を見るツアーで、鯨が意味もなく飛び上がっていることに感動したという描写があります。言葉にならない感動で、帰国しても誰にも説明できなかった。電車で揺られているこの時にも、鯨が意味もなく飛び上がっていることを知れたのが良かった、と書いていた。私も会社に所属して仕事に追われていた時期でした。「自分が生きている時間とは全く違うところで、もう一つの時間が流れている」という感覚を持ちながら、毎日を生きていけたら豊かになると思いました。

#### 価値観が変わる移住体験

私の暮らす家は築30年の7LDKで、なんと家賃は3万円。色々なものやお金の価値が崩れていくような気持ちになりますね。奈良市内から車で25分ほどで通えて、素晴らしい自然環境で、綺麗な星が見える。何かをしようと考えて移住したわけではなく、1年間ただ楽しみながら生活していました。山菜を採ったり、冬にしめ縄をつくったり、春先にはワサビの葉を採ったり。

その中で気づいたことがいくつかありました。一つは、村の人はgiveの精神がすごくあること。ここに住むようになると「そんなにキュウリは要らないから、そりゃ誰かにあげるよな」とわかるのですが、お金の価値が介在する都会ですと生活してきた人からすると、頻繁に何かもらえて、見返りを求められないことが面白い。その精神性と思考回路に興味を抱きました。



#### 村のおじいちゃんやおばあちゃんが気づかせてくれたこと

おじいちゃんやおばあちゃんの能力がすごく高いことも、その一つ。例えば、この家を改装する時、隣の棟の2階に機織り機があり、窓が小さいのでどうやって降ろそうかと、工務店のおじさんも私も悩んでいると、近所のおじさんとおばあさんが来て、印を付けながら解体し、持ってきた縄と板で滑り降ろしてから、組み立て直してくれた。全く違う方向から解決策を出してくれて、自分が知らないことがたくさんあることに気づかせてくれた。

基本的に余暇が少ないので、カラオケやレストランなどの娯楽が少なく、何か面白いことがしたいとか、普段と違う日常を感じたいと思っている人が多く、しかもお金にならない知恵の結晶が詰まっている。興味深い調理方法や伝統工芸もそうだし、普段の生活様式にしても、もっと評価できそうなものがたくさんある。営業しかしたことがなかったけれど、何か仕事にできることがありそうだと感じました。そして、住んでいるおじいちゃんやおばあちゃんにとっても、生きる喜びや活力が湧いて、その人たちにスポットライトが当たる場所をつくれたらと考え始めました。

#### 一次産業の生活リズムを刻み続けてきた山添村の魅力

奈良の南部にある吉野や十津川などの村にはそれぞれ特色があり、修験道や伊勢街道、鯖街道などで栄えた土産物屋や宿が残っていて、「あの頃は良かった、あの頃に戻るにはどうすれば良いか」という思考回路があるように思います。でも、山添はずっと一次産業がメインの村。いつも田舎で、同じ生活リズムを刻み続けている。自然の恵みをいただき、お宮さんやお祭りを大切にしている姿勢が残っている印象がある。それがすごく面白いと私は感じていて、外から来た人たちもそのままそれを受け取れるようなことができればと思いました。

いわゆる勝ち組の商材が何もない地域というイメージをつくりたい。温泉が出る



とか、わかりやすいコンテンツが全くない中山間地域で、観光の力を使って、経済が生まれることができないか。その中で色々な人が一次産業以外の生き方の選択肢を持つことができる状況をつくれなかと考えました。私がこの村に来て興味深いと思ったこと、もっと価値になれば良いのと思ったこと、そもそも人間としてこのような感覚で生きていたら幸せだと思ったことを伝えられる場所をつくれたらと、考えを巡らせました。

#### 村の人々と協働して観光プログラムをつくる

梅守本店の事業をしていた時から旅行会社とつながりがあり、日本だけでなく世界中の現地旅行会社ともパイプがあるなかで、私にできることは何かと考えました。その中で、村役場と相談して、やまと観光推進協議会を立ち上げ、観光業で全く取り上げられてこなかった一般家庭の人々に協力をお願いする旅行ツアーを企画しました。旅行会社も新しいコンテンツを考えていた頃で、「私も並走するので一緒にやりましょう」と提案した。一次請けとして梅守本店が受け皿になり、旅行会社も一般の人も安心できるスキームを組んでいきました。

最初に茶摘みツアーを企画し、奈良市の高校の元校長先生と連携して、英語圏の人々が集まる20人程度の団体を週1回くらい受け入れて、茶摘みを体験して一般家庭でランチを食べて交流するコンテンツをつくりました。だんだん仕事が回るようになり経済をつくるイメージができてきた延長線上で、人として大切だと思う感覚を伝える場所がほしいと思い始めました。誰かの家をお借りして実施していたので、私たちの場所を持った方が身動きが取りやすいとも考えた。茶摘みツアーのプログラムを続けながら、コンセプトを何にしようか、3年間ずっと思いを巡らせました。

#### 人として大切だと思う感覚

20歳くらいの頃、妹が白血病を患い、生きるか死ぬかという経験をしました。抗がん剤治療で髪が抜けて無菌室にいる妹の生活に、家族で並走しました。私は4人姉妹ですが、同じ頃に一番上の姉も後天的な重度精神障がいになり、突然、家の中で包丁を持って走り回ったり、意味のわからないことを叫びながらリビングを走り回ったりする状態になりました。

それまで普通の大学生として過ごしていた私は、病気や障がいを持つ人が身近になるようになって、自分がある日突然死ぬかもしれない、精神的に自分が自分ではなくなるかもしれない可能性について考え始めます。病気や障がいのある人が周りにあまりいなかったら、異質な存在に出会うとびっくりして心理的に距離をとってしまうかもしれない。でも、よく考えると、社会は色々な人がいることで成り立っていると気づく。世の中には、当たり前色々な人がいるのだと思うようになりました。

#### 色々なものが調和している世界を、穏やかな目でフラットに見る

自然が豊かな山添村では、羽の取れかけたトンボや足の抜けたカマキリを見つめることが日常茶飯事です。デザインされたのではなく勝手にそうなっている。自然の中で調和しながらそこに在るのを見ていると、色々なものを赦せたり、フラットな視線で普通に受けとめたりすることができる。良いとか悪いとかのテーブルに色々なものを載せなくなっていく。そんなふうに生きることができれば、人はもっと穏やかに生きられるのではと思い、そのように感じられる場所をつくりたいと考えました。

不完全なもの、完璧でないもの、自分と違うもの、色々なものが調和して世界はできている。それらを比較するのでもなく、排除するのでもなく、当たり前のこととして、穏やかな目でフラットに世界を見ることができれば良いなと思いました。



### ちょっと不自由なホテル

2020年3月にオープンしたume, yamazoeのコンセプトは、ちょっと不自由なホテルです。行きづらい場所にあり、電波も弱く、値段が高い割にかっちりとしたサービスというわけでもない。不自由や不便だからこそ感じる自由やありがたさ、楽しさがあり、それが色々なものを赦せたり愛せたりする心になっていく。そのように人の感覚がもっと穏やかに優しくなっていくことをしていきたいと思っています。

そのための方法は何でも良かったのです。宿を試してみたいなんて1ミリも思ったことはないし、宿を経営した経験もありませんでした。フワッとした感覚的なことをやろうとしていたので、長めに滞在しながら感じてもらうのが良いと考えた結果、宿になった。今でも宿をしているという感覚ではなく、ただ場所を持っているという感覚に近いです。

### 目的はサウナではなく、人の感覚が優しくなること

蔵だった建物を改装して部屋にしようと解体してみたら、土台がだめになっていたので倒すしかなく、倒してみると変な貯水タンクだけが残ってしまって、何かしないと空間として変なものでどうしようとなった。クラウドファンディングでお金を集めて、できる範囲で最大限のことをしようと考えるにつくったのが、サウナでした。人の感覚が優しくなるような場所にしようと、最初は何となく露天風呂のイメージでしたが、お金がないので、同じように人が服を脱いで自然に還る機能を持つサウナだったらいけるかもと考えた。

日本には約5000のサウナありますが、「サウナシュラン2020」のトップ10に入ることができました。おかげでサウナ好きの集いに行き「奈良の奥の方でサウナをやっている」と言うと、「もしかして、あの」と人の輪ができてしまうのですが、そもそも私はサウナに詳しくない。木や火、風など自然の楽しさに私の興味はある

ので、サウナをやっているつもりはあまりありません。

人の感覚が優しくなったり、穏やかになったりすること、それだけが自分のしたいことで、方法は何でも良い。野菜でも宿でもサウナでも何でも良くて、人の感覚がほぐれたり、自然に還ったりすることをしたいと思っています。レストランで数時間だけ過ごすのとは異なり、宿なら丸一日を過ごしてもらえるので、こちらが表現したいものを汲み取ってもらえるタイミングがたくさんある。私にとって宿は目的ではなく、装置です。装置としての宿は面白くて良い表現の場になるので、宿をして良かったと思っています。

### 土地や道、家は自分だけのものではない

ume, yamazoeを始めてから色々と考え方が変わりました。まず、土地や道、家は、購入したからといって自分のものではないと思うようになったこと。準備期間中に最も時間を要したのは、ご近所さんとの調整でした。半年や数ヶ月の間、工事を中断したことが何回もあった。村でも有名な90歳くらいのおじさんがいて、色々と思ってもよらないご意見をいただくのですが、仲良くやっていきたい、自信のあった自分のコミュニケーション力で突破できるだろうと思っていましたが、難しかった。

現在はご迷惑をおかけしない形で共存するようにしていますが、そのおじさんは宿の前の坂に車があるとすごく怒る。宿に来る時にしか通らない道なのにと不思議でしたが、周りの人に聞いてみると、昔に皆で土地を分け合ってつくった道なのだ。昔の人が一生懸命に土をならして道をつくった過去があるから、うちの土地ではないのだと感じました。

村長の家だったこの家も、120年の歴史の中で、今は私に順番が回ってきてお預かりしているだけ。購入したから私の家、と言うのはおこがましい。私たちはこの



土地に存在させていただいているという感じ。ここにいることは当たり前ではなく、色々なものとの関係の中で自分は存在している。自分という主体の視点からグッと外に引いて、自分のものではないと感覚的に思うようになりました。

#### わからないことがたくさんある

また、人間は意味を見つけて安心したり理解した気になったりしますが、全てに意味があるわけではないと思うようになった。自分だって何となくやってみることが多々あるのに、自分以外のものや自然には意味を求めてしまう。でも、そんなものはない。高いところから見下ろして何となく知ったような気になるけど、そうじゃない。

この場所で音に耳を澄ましていると、午前4時40分頃から5時過ぎの朝日が昇る時まで鈴虫がずっと鳴いていますが、5時を過ぎると鳥が鳴き始めて、気温が上がると蟬の鳴き声が若干奥の方に聴こえるようになる。6時頃になると鈴虫がいなくなり、昼の音になっていきますが、7時から8時半くらいの間に、誰も何も音を立てず静かになる瞬間がある。インターネットで色々調べても答えがわからない。わからないことがたくさんあって、何でもわかった気になっている人間がおこがましいだけ。そのスタンスで世界を見る方が、自然はよく見えます。

自然を通して人の感覚が優しくなるために、気づいたことを一つずつ、時間に縛られずやり続けてきたなかでこの場所ができたのは、私にとって無理がなく自然だと感じています。自分自身のことも不完全だと思っていて、この宿も百点満点ではない。不十分でも良いので、自分の考えていることを少しずつ進めていくことが、未来をつくっていく。その中で色々な人が生きがいを感じながら働いたり、住んだりしている場所になっていったらと思っています。

生きる上で必要な多くのものは贈与されていることに気づいた。住む土地や環境、道具、身の回りにあるものは、何一つ自分がつくりだしたものではなく、大きな歴史の時間の中で受け継がれてきたものだ。受け継がれたものを次の世代に引き継ぐ、自分の生きる時間とは違う、大きな歴史の時間を感じ取ることは、本当の意味で持続可能な社会に必要な価値観だと思う。サウナ体験では、その大きな時間に意識的になれた。サウナによって心身共にリフレッシュされた状態の中、木々の葉音を聴き、遠くの山々を眺めながら、自然体になれたように思う。この自然体の感覚が自分の日常生活には抜け落ちていて、山添村で過ごした数時間はその感覚が回復する体験だった。

堀本宗徳

サウナを出て外で涼んでいる時に、今考えている物事がどうでもよくなり、何も考えたくない気持ちになった。それが、梅守さんが求める「優しさ」や「穏やかさ」なのではないかと思った。人間は何に対しても意味を知りたいがると梅守さんは言っていたが、意味を追求することで、考えの違いやいがみ合いが生まれ、「優しさ」や「穏やかさ」を失うのではと思った。全てのものに「なぜ」を求めるのではなく、そういうものだとして受け止め、私たち人間が合わせていく。そういった考えが梅守さんの求める「優しさ」や「穏やかさ」に直接つながるのではないかと思った。

緒方達海

時間の横の流れについて改めて考えるきっかけになった。自分がいる場所から離れたところに流れている時間を意識すると、不思議な気分になる。自分が慌ただしい時間の中にいる時、ume, yamazoeのようなどこか別の場所では、ゆったりとした時間が流れているかもしれない。同じ時間軸の別の場所を想像することの面白さを実感した。また、土地の時間に自分が介入させていただいているという感覚を学び、私たちは生きているというより生かしてもらっているという感覚の方が近いと思うようになった。自分の知らない世界を想像する力や、自分とは違うものと共に生きようとする姿勢が、梅守さんの生き方をつくり上げたのではと感じた。

佐藤利香

## 「調香教室」

石田理恵（調香家）



奈良で調香とハーブの教室を開催している調香家の石田理恵さんに、香りについてのレクチャーと調香のワークショップをしていただきました。石田さんが会場に到着し、自宅の庭から摘んできた様々なハーブを水に挿した途端、爽やかな香りが部屋を満たし、皆の心を動かしました。一つひとつの香りの種類と特徴、どのように香りは記憶と結びついているかについてお話を伺った後、石田さんによるカウンセリングのもと、参加者それぞれが10種類のオイルを調合して、オリジナルの香りをつくる体験を楽しみました。

### 香料の分類について

日本や海外には色々な香料がありますが、天然香料と合成香料に分類され、天然香料は植物性香料と動物性香料に分けられます。アロマテラピーで精油やエッセンシャルオイルと呼ばれるものは、何百種類もある植物性香料のことで、花や葉、芽、果皮、全草、木、種子などから採れます。今日はその原液と、香りの素であるハーブやスパイス、香木を持ってきていますので、これらの香りを蒸留したらこんな香りになるということを体験していただこうと思います。

### どのようにして植物性香料の精油を採るのか

精油を採るための最も一般的な方法は、水蒸気蒸留法です。例えば、ローズマリーの枝を蒸し器の中に入れて加熱すると、上に湯気がつく。それを急激に冷却すると、水分が下に溜まり、油が上に浮く。その油が精油と呼ばれるもので、下に溜まった水がハーブウォーターやフローラルウォーターと呼ばれる芳香蒸留水です。熱に弱いものだと油が採れる割合が少なく貴重なので、バラのエッセンシャルオイルは2mlくらいで2万円とかすごく高いですが、1%の濃度に薄めた1滴でも香りが強い。

レモンやオレンジなど柑橘系の香りは皮にあります。圧搾法で採られることが

多い。押し潰した皮を遠心分離機にかけ、油と水分に分ける方法です。熱を加えていないので、香りがそのまま残りやすい。マドレーヌはレモンの皮を擦りおろして加えますが、皮の香りを入れるため。レモンティーの場合も、スライスした皮付きのレモンを入れるのは、酸味を出すためではなく、香りを移すためです。

柑橘系の香りには光感作性があり、紙に付けて光の当たるところに置くと、色が変わってしまう。肌につける場合も色素沈着してシミになる恐れがあるので、約6時間は太陽の下に行かないように言われている。ピリピリとしみるような刺激作用もあり、冬至に柚子湯に入ると体がピリピリする方もいる。柚子の皮から香りが出て、体を温める薬効も出ているということですが、柑橘系の香りは強いので気をつける必要があります。

ベンズインのような樹脂には、溶剤抽出法を用います。樹脂はなかなか加熱が難しいので、アルコールのようなものに漬け込み、香りの素を採り出してからアルコールを揮発させていく。熱に弱いローズやジャスミンも溶剤抽出法で採ることが多い。ローズにはローズアブソリュートとかローズオットーとか様々な種類の精油があり、ローズアブソリュートは溶剤抽出法、ローズオットーは水蒸気蒸留法です。水蒸気蒸留法でも採れますが、熱にあたって香りが若干変わります。

### 精油の原液は薄めてから用いる

精油はマッサージや入浴で用いられますが、原液はすごく濃厚ですので、基本的には薄めて用います。天然香料と合成香料を比べると、同じ濃度でも合成香料の方が強い。マッサージだと1%ほどに薄めます。皆さんがつくる香りは7%ほどの濃度です。精油は揮発性があるため、蓋を開けたままでは香りや水分は蒸発する。マッサージの場合はホホバオイルやオリーブオイルなど植物性の油で溶かします。

本日のワークショップでは、無水エタノールと少量の精製水に溶かし込んでつく



ります。マスクや肌につけたり、消毒用アルコールを入れて1%濃度にして使ったり、精製水で薄めるとルームスプレーにもなる。各自でテーマを決めて、その香りに仕上げていただきますが、季節からイメージしても良いし、気持ち良く眠れる香りや、あの時の思い出の香りみたいなものでも良い。

#### 4種類の動物性香料

動物性香料は、ムスク、シベット、カストリウム、アンバーグリスの4種類しかありません。ムスクはジャコウジカの雄の生殖分泌物で、糞尿や排泄物のような匂いと本に書かれていますが、千倍に薄めるとフローラルの香りになる。濃い時には良くなくても、薄まった時に良くなる香りもある。香る時にグッと香らず、離してフッと鼻の中で味わうと、香りのパートが見えてきます。シベットもジャコウネコの肛門近くの分泌物。カストリウムはビーバーの肛門近くのもの。アンバーグリスはマッコウクジラの結石で、海に漂着した塊から香りがすることから発見されました。

大分香りの博物館でムスクを見たことがあるのですが、シベット、カストリウム、アンバーグリスも今ではほとんど採られておらず、博物館で展示されるような存在。生息数が少なく、動物保護の観点から捕獲されることがほぼなくて、残っているものは高価な値段で取り引きされる。制汗スプレーなどで「ムスクの香り」というのがありますが、本物のムスクではなく、ムスコンやムスケトンなど合成香料が用いられており、艶っぽいフローラルのような香りとして定着しています。

合成香料が無かった時代に、動物性香料を加えると肌へのなじみが良くなり、ふくよかな感じになるため、重宝されていた。仏教伝来の頃、香りとして使われるものと、薬として使われるものの両方があったのですが、ジャコウは生殖器系を整える薬としても使われていました。

#### 記憶や思い出を蘇らせる香り

以前に訪れたことのある大分香りの博物館では、ムスクの香りを試せるようになっていて、糞尿のような香りだと本で読んだので、その奥にあるものを感じようと香ってみると、昔の田舎にあったバキュームカーや、スキー場の汲み取り式トイレを思い出しました。奥には温かい感じもあり、これがフローラルっぽさなのかなと。嫌な匂いの中には良い香りの要素もあって、悪い香りではない。田舎の信州で子どもの頃に毎年スキーに行っていたことを思い出しました。香りは記憶に結びついて、思い出がパッと蘇ることがあり、それぞれに感じる場所があります。

#### 香りは変化する——トップノート、ミドルノート、ラストノート

コロロンやトワレなど様々な香水がありますが、香りの濃度と関係しています。最も濃いバルファンの濃度は15%から30%程度。オードトワレが5%から10%程度。オードコロロンが3%から5%程度。香水はずっと同じ香りではなく、最初に香るトップノート、時間が経ってから中心になるミドルノート、最後まで残るラストノートというように変化していく。香りを分類する時にも、飛びやすい香りをトップノート、持ちが良い香りをミドルノート、持ちがすごく良い香りをラストノートと言ったりする。

天然の香りではトップノートに柑橘系の香りが含まれます。ミドルノートには葉や草、花が含まれる。ラストノートには、木や樹脂、種子、樹皮があります。シナモンなどのスパイスもラストノートに分類される。ラストノートは濃厚なので、1滴でも強く感じてしまう。香りを組み合わせる時は、どの香りをどれだけ出したいかという観点で、バランスを考えます。レモンとベンゾインを1対1で感じたかったら、レモン20滴に対してベンゾイン1滴くらいの割合になる。



### 人生の記憶、体調、気候によって異なる、香りの感じ方

フランスのルネ＝モーリス・ガットフォセという研究者が火傷をして、ラベンダーの原液をかけると治りが早く、1930年頃にアロマセラピーと名づけたことから、アロマセラピーが始まりました。この香りにはこんな効能があると言われてたりしますが、体調や気分、気候などで香りの感じ方は変わります。

香りは思い出とも結びついており、ローズのように幸福感に包まれるような香りでも、辛い記憶と結びついていると幸せな気分にはなれない。それぞれの人生でそれぞれの香りの記憶があるので、自分がどのように感じるかが大切です。

同じ場所でも年によって気候が変わると香りも変わる。ラベンダーが嫌いではなくても、このラベンダーの香りはちょっとということがある。ご自身で使われている香りと同じ種類でも、私が持ってきた香りは少し緑っぽくて違うとかあれば教えてください。

### 言葉で伝わる香りの感じ方

今から皆さんに記入してもらおうシートには、香りの名前の横に余白があります。それぞれの香りを香った時の印象を書くスペースです。好きかどうかで、二重丸や丸、三角などを書いてください。最初は好きだったけど、時間が経つとあまり良くなかったとか、逆に最初はあまり良くなかったけど途中から好きになったとか、その通りに書いてもらえると「最初は嫌だけど時間が経つと良いのなら、初めに感じないように少しだけ入れよう」と判断できる。香りはそれぞれに感じるものだから、言葉で書かないと伝わりません。

香った時に思い浮かぶことを書くことで、イメージを掘り下げることができます。香りって「何々のような」としか言えない。私は香りに色を感じるのですが、レモンならレモンイエローとか、香った時に甘い感じなら山吹色っぽいとか。ローズ

ゼラニウムは植物自体は緑色だけど、バラのような香りがして私にはピンク系のイメージ。柔らかな甘みがあるなど味覚に例えてみるのも良いでしょう。

尖った感じとか、ゴワゴワしているとか、優雅な感じとか、イメージを書いても良い。そうすることでイメージがさらに広がります。柑橘系の香りは香料として使われることも多いので、子どもの頃に食べた飴を思い出して当時の空気みたいなものまで蘇ってくることもある。

秋の夕暮れ時に奈良公園を歩きながら見たり感じたりしたものから香りをつくったことがあります。スーっとした空気とか、夕暮れの色味になった葉とか、その柔らかい温かさを出したいと思って香りをつくったのですが、そのようにイメージを言葉にしてもらえたら、「この方はこの部分を出したいのかな」と私も感じるができます。

### 10種類の精油から調合して、イメージする香りをつくる

今日は10種類の精油から調合して香りをつくります。香りは水彩絵具に似ており、混ぜたから良い色や良い香りになるわけではない。この香りにしたいからこれを混ぜるといように考えてください。一つの香りには百種類ほどの成分が含まれており、二つ組み合わせるだけで奥行きのある香りになる。今回は初めての方にもわかりやすいように、柑橘系、草、葉、花、木、樹脂からバランス良く、トップ、ミドル、ラストそれぞれを含めて選んでいます。

ムエットという紙片に香り一つずつ付けてお渡しするので、感じることをシートの余白に書いてください。調香師のように鼻の左右に紙を動かして香ると、脳の両側に働きかけて、香りが立体的に感じられると言われています。調香師が複数のムエットを扇子のように持ち、鼻の近くで左右に揺らしていることがありますが、複数の種類を香るとこんな感じというのがわかります。



軽いと感じる香りから説明します。一つ目はレモンの香り。トップノートでパツと香るのは酸っぱさですが、時間が経つと甘さが出てきます。酸っぱい印象が強いですが、「この香りは常にこんな香りがする」と思い込まず、香った時の印象を大切にすると、ラムネ菓子の懐かしい思い出や、キラキラした夏の日差しイメージなど、色々な記憶が蘇ってくる。

次はオレンジの精油。朝に飲んだオレンジジュースの爽やかな甘さを思い出したり。それぞれの生活スタイルや体験によってイメージは変わる。続いてハッカ。主成分はメントールなのでスツとする感じが強いですが、少し時間が経つと甘みを感じる。私なら冷たい空気や夏の清流、秋の朝の清々しさを感じます。

次はローズマリー。人によっては緑や水色、茶色などに感じたり、ハンドクリームを思い出したり、ローズマリー・カンファーは樟脳の香りなので筆筒の記憶と結びついたり。トップはスツとした感じで、ミドルからラストにかけて甘みが出てくる。それからレモングラス。ハーブティーでお馴染みですが、精油にすると草の感じが強くなる。草原の香りをつくりたい時にローズマリーとレモングラスを組み合わせたりします。

次はラベンダー。色々な種類がありますが、ラベンダー・アングスティフォリアと呼ばれる高地栽培のもので、甘みが強い。清潔感があるのでシーツの香り付けや洗濯洗剤、リラックス効果があるのでマッサージオイルでも馴染みがある。色は薄紫や緑っぽさを感じるかも。続いてローズゼラニウム。植物学の分類では葉ですが、香りはフローラル。蒸留すると濃くなり甘みが出て、柔らかいピンクな感じがします。

皆さん、だんだん香りが重くなってきたので、外の空気を吸ってくださいね。コーヒーの香りが鼻を元に戻すとされますが、外の空気でも戻ります。香りは頭をすごく動かすので疲れる。今から強めの香りになりますので、嫌だと思ふ香りはそれほど吸わなくても大丈夫。

シダーウッドは濃いので50%に薄めています。アトラスシダーとバージニアシダーウッドを組み合わせしており、懐かしい鉛筆っぽさやお寺っぽさを感じるかも。次のパチュリもすごく濃厚。深くて沈むような落ち着いた香りで、スモーキー感や土っぽさを感じます。「夕立の後」という香りをつくった時は、土から立ち上がる湿気を感じをパチュリで出しました。

最後にベンゾイン。バニラっぽい甘い香りですが、すごく強いので20%に薄めています。お香にも使われており、一昨日に大仏殿の近くを歩いた時に似た香りがほのかに漂ってきました。子どもの飲み薬のような感じもして、病気のしんどさを思い出す人がいるかも。ラベンダーとローズゼラニウム、ベンゾインを組み合わせると、柔らかい花束みたいな香りになります。

#### 香りを組み合わせるための方法

香りを組み合わせる方法は、大きく分けて二つあります。1種類もしくは2種類の香りを目立たせたい場合、たくさんの種類を入れるとわかりにくくなるので、一つもしくは二つの香りをボンと持ってきて、そこに少し別の香りを加えるという方法。もう一つは、それぞれの色を馴染ませて違う色をつくるように、何種類かの香りを組み合わせてイメージをつくる方法です。

一つ目の方法だと、ハッカとローズマリーで緑の風の感じにしたい時、二つの香りだけだと尖りすぎているので、緑の風に木が植わっていたら気持ち良さそうだから、シダーウッドを少しだけ加えて木の感じを入れる。二つ目の方法だと、ハッカとローズマリー、シダーウッドの3種類を組み合わせると馴染ませる。ハッカで清々しい感じ、ローズマリーで草原の感じ、シダーウッドで木陰の感じ。それら全てが馴染む香りにする。

目立たせたいものがあるか否かで、どちらの方法が良いかを選ぶ。そして、つく



りたい香りの雰囲気やイメージ、用途も書いて、使いたい香りの名前に丸をしてください。カウンセリングをしながら、どのくらいの割合が良いかなど、詳しくお話ししていきます。

#### 時間や場所を超えて想像の世界を旅できる香り

香りは私たちを想像の世界に連れていってくれます。時間や場所を超えて、行けない場所にも行けて、その場所にいるような気持ちになれる。2年ほど帰っていない田舎をイメージして香りをつくったことがあります。田舎の信州は夏でも涼しく、その爽やかな感じをレモンとハッカを出して、レモングラス、ローズマリー、シダーウッド、パチュリで緑が濃い感じを出した。ラベンダーやローズゼラニウムなど花の香りを少し加えて、緑の中に花が咲いているイメージにしました。

ここに「初秋の夕暮れ」をイメージしてつくった香りがありますが、紙に付けた時と肌に付けた時で香りが変わる。紙を鼻先で香るとスーッと涼しい空気で気持ち良かったのが、肌に付けると体温で甘みが出て、お香のような落ち着く感じが出てくる。寝る時に秋の澄んだ空気の中で眠りたいなら枕元にシュッとすれば良いし、リラックスしたいなら首元の肌に少し付けると良い。

同じ香りでも使い方によって変わるので、カウンセリングでは使い方についても話しながら、できるだけイメージに近づけるようにしたいと思います。では、それぞれ考えてシートに記入していただき、決まった人からカウンセリングしていきます。

まさに香りの記憶が呼び覚まされる体験をした。自分自身が生きてきたなかでの香りの経験は、その経験のイメージを定着させるほど強い力を持っていると感じた。また、面白かったのが、同じ香りでも香りの濃度で感じ方が違うこと。付けてすぐと後で、香りの感じ方が全然違う。気になって調べてみると、低濃度か高濃度かによって刺激される受容体の組み合わせが異なるようだ。同じ成分でも濃度の違いで、人によっては良い香りだったり、きつくて嫌な香りだったり、感じ方が異なる。混ぜると単純な足し算ではなく、新しい組み合わせができる。香りには宇宙のような可能性があると感じた。

小宮さえこ

「疲れた時に気分の切り替えができるような爽やかですっきりとした、身に付けて使用する香り」のイメージで、レモン、レモンタルト、パニラアイスだと感じた香りを使用した。身に付けずにリラックス空間で感じたい香りなら、花や木のような香りを選ぶと思うので、使用方法やテーマを変えて香りをつくると、同じ「好きな香り」であっても全然違うものになるだろう。石田さんの凄いところは、相手が望む香りに求めるストーリーに共感し、感覚を擦り合わせていくところ。香りの感じ方は人それぞれ違うはずなのに、「後に残る〇〇の香りは強く感じたいですか」などの詳細なイメージについての対話を通じて香りをつくり上げていくのは至難の業。調香家は香りの知識だけでなく、コミュニケーションや想像の力も必要だと感じた。

今野瑤子

興味深いのは、参加者によって、できあがった香りが違うということ。好き嫌いや、受ける感覚の強弱、その時の状態によって、差が生まれる。今回、香りの対象は香水だったが、動植物、飲食物から人工的な成分の塗料まで、日常のあらゆる物質について、自分が感じているものが、隣にいる人が感じているものと同じとは限らない。五感の中で一番違いがわかりやすいのは味覚の好みだが、感覚が人により千差万別だとすると、視覚についてさえ疑いが出てくる。今回の体験から、自分が当たり前や常識としていたものが、実はそうではないのではと思った。

内田好美

Program

# 4

## 「共有空間」

——再生する生活、そして新しい日常へ

美術家の西尾美也と、空間設計が専門の鈴木文貴と共に、多様な表現と価値観が共存し、学び合うための共有空間を、奈良のまちなかに創造するアートプロジェクトを実施しました。多領域の専門家によるレクチャーやワークショップ、ディスプレイを重ねて、行政や企業、地域の人々と連携しながら、装いの共有空間「DATSUEBA」をつくりだすことを試みました。

### プログラム3「時間」

アーティスト：山城大督

プロジェクトメンバー（受講者）：今野瑠子、内田好美、緒方達海、北村良子、小宮さえこ、

佐藤利香、堀本宗徳、山本菜由

レクチャー講師：石田理恵、梅守志歩、西山厚

プロジェクトマネジメント：飯村有加

協力：金子ゆか、久保友紀

「TIME TRAVEL NARA——香りの頒布会」

会場施工：高橋和広（KUSUNOKI WORKS）

香り制作：石田理恵

プロジェクトロゴデザイン：志水良（Balloon Inc.）

香りの箱ラベルデザイン：小宮さえこ

DMデザイン：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）

協力：Dear Gallery NARA、Twelve Inc.、西田奈々（大和かぎろひ）



## TIMELINE



2021年8月21日

ワークショップ

「プロジェクトサイト視察&アーティスト対談」

2021年7月17日

オリエンテーション

西尾美也さんと鈴木文貴さん、受講者の皆さんがCHISOU lab.で初顔合わせ。西尾さんから「装いの共有空間」の構想について伺った後、鈴木さんから、奈良で手がけた仕事や、人と空間の関係性について話を聞く。活動的な学生と経験豊かな社会人からなる受講者とアーティストが協働して共有空間をつくっていく決意を固める。



2021年7月25日

レクチャー「『共有』と『私有』  
を行き来する」(人文系私設図書館  
ルチャ・リプロ)

山深い東吉野村で自宅を開き、「人文知の拠点」としてルチャ・リプロを展開してきた青木真兵さん、海青子さんから話を伺う。社会の当たり前を問い直すこと、共有と私有を往還すること、空間を統制しすぎず訪問者が余地を見つけられることなど、柔らかな言葉と実践から、共有空間について思考を深める気づきを得る。



共有空間をつくるプロジェクトサイトを視察。寝転がったり、前の入居者の痕跡から想像を膨らませたり、景色を眺めたり。思い思いに空間を味わった後、近所のDear Gallery NARAで西尾さんと鈴木さんによる対談。視察と対談をもとに、受講者は「この場所でどのような共有空間をつくってみたいか」を思案し、1ヵ月後に提案する。

2021年9月11日～12日

レクチャー&ワークショップ

「共有空間のモックアップをつくってみる」(小山田徹)



美術家の小山田徹さんから、数十年にわたり共有空間をつくってきた経験や、共有空間の概念とアプローチする方法について話を伺う。その後、約200個のダンボールを使って、1日目は「居心地の良い個人的空間をつくる」、2日目は「みんなで共有できる空間をつくる」というお題で空間をつくってみる。作業を通して各自の個性やプロジェクトサイトの特性を感じる。

## 2021年9月25日

### ワークショップ「受講者によるプレゼンテーション」

「この場所でどのような共有空間をつくってみたいか」について、9名の受講者がそれぞれプレゼンテーション。様々な視点と思考での提案がある。西尾美也さん、鈴木文貴さんが質問や感想を投げかけ、各アイデアのオリジナリティや可能性が掘り下げられる。アイデアの数々は今後の制作過程で反芻されながら、アーティストたちの共有空間づくりがいよいよ始まる。



## 2021年10月16日

### レクチャー「“つながり”について考える」(梅田直美)

孤立や虐待など関係性の諸問題とそれらを巡る社会的活動について研究してきた梅田直美さんから話を伺う。前半は、古今東西の社会学理論を参照し、近代社会で「つながり」がいかに変容してきたかについて。後半は、ケアなど生活者自らの経験を軸に起業したソーシャルビジネスによって、ユニークな「つながり」が生みだされている事例を紹介いただき、アートプロジェクトや共有空間と大いに共通する論点について学ぶ。

## 2021年10月23日

### ワークショップ 「鈴木文貴による 空間デザインの提案」



これまでの経緯を踏まえて、鈴木文貴さんから、どのような「装いの共有空間」をつくるかについて総合的な空間デザインを提案いただく。抽象的な概念や要素を明瞭に伝えるCGイメージと言葉によるプレゼンテーションは圧巻で、プロジェクトチーム皆の心が熱くなる。これから鈴木さんの設計図をもとに実際に手を動かして全身全霊で共有空間をつくっていかうと決心する。

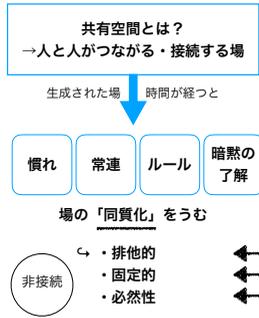
## 2021年11月～12月

### ワークショップ「共有空間の創造実験」

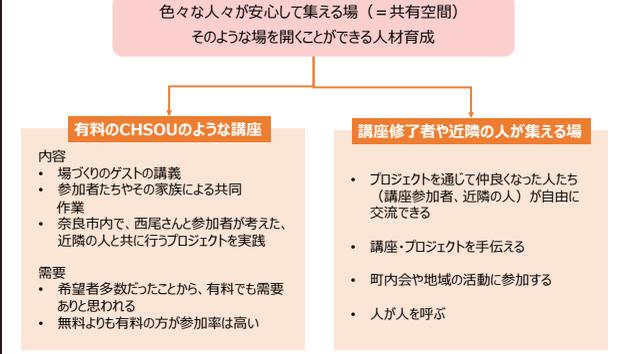


鈴木さんの設計図をもとに、インストーラーの高橋和広さんが「装いの共有空間」で鍵となる構造物をどんどん施工していく側で、受講者とスタッフは様々なアイテムの制作を進める。小山田徹さんのワークショップを引き継いだダンボールの椅子、西尾さんの過去作品から着想された袖のタペストリーとポケットの道具入れなど、訪問者の面白い動作や発想を引き出すアイテムを着々とつくっていく。

# 共有空間



## 何を？/どのように？



服と対話する  
服で対話する

二人称の知=対話の知

## どのような空間をつくるか

### アイデア

- ・ 子ども、障害をもった児童もいる空間、雑多な状況  
→同質化を破壊しうる、偶然性・エラーを創出しやすい存在者たち
- ・ 駄菓子屋  
→世代問わず共有できる、食はプリミティブな要素
- ・ ものづくり、共同工房  
→たくさんの利用者が参加しながらつくりあげる中長期的な制作ワークショップ  
ものづくり (手を動かす) 系における共有性・偶然性という要素



作成：照喜名恵

## 共有空間の想像・創造

西尾さんと鈴木さんのお話から...

### 求められる要素

- ・ “装い”に関する共有空間
- 服に対する柔軟な見方を養う/服を通して人と繋がる
- ・ 続いていく拠点としての空間
- ・ 一人一人と向き合う空間
- ・ 入りやすい空間

### 服と対話する



- ・ あなたは何でできてるの？ (素材に触れる)
- ・ あなたはどう作られてるの？ (解体する)
- ・ あなたはどこから来たの？ (生地と対話)
- ・ あなたは誰に着られたの？ (差別度)

### 服で対話する



- ・ パートナーの「OO」を直す
- ・ 服を作ってみてください
- ・ 次のイベントに来る人に伝えたい服を作ってみてください

作成：安田翔

## コンセプト

- ・ 日常に楽しみを足す
- ・ 通い続けたい
- ・ 様々な人に対して開いて、一人一人を大切に
- ・ 多様な人の交流を生む
- ・ 手縫いの技術を養う
- ・ 服に対して自由な気持ちで接することができる

作成：吉田珠世

当初のお題

今夏に開催された「東京ビエンナーレ」で西尾美也さんが行う「着がえる家」から展開させたプロジェクトを行い、誰もが古来から日常的に実践しており参加可能な「装い」を軸に、共有空間を奈良のまちなかに開発していく。「装いをテーマにした共有空間」のあり方を探求し、それを体現・持続させる。

共有空間を生むために

1. 街と関係をつくる。
2. 体験をつくる。
3. 中と外を曖昧に。
4. いつのまにか当事者になる。
5. 動作がすでに面白い。

当初の構想していた共有空間の要素



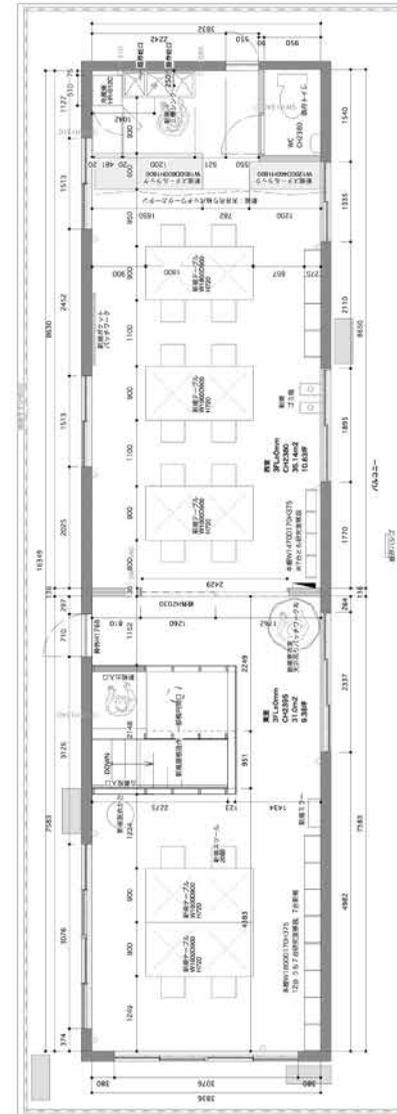
西尾さんが求めたもの (2021年10月12日)



アトリエ  
研究室 = 共有空間  
?



図名 装いの共有空間の平面設計図  
図例 1:1000  
縮尺 1:1000  
作成 2021年10月12日  
設計 鈴木文貴



2021年10月23日のワークショップ「鈴木文貴による空間デザインの提案」で鈴木文貴さんが使用したスライド資料より抜粋

「装いの共有空間」の各要素の詳細な寸法や位置関係について示した、鈴木文貴さんによる設計図



2021年10月23日のワークショップ「鈴木文貴による空間デザインの提案」で鈴木文貴さんが使用したスライド資料より抜粋

2021年12月25日～26日

公開制作「DATSUEBA ワークインプログレス」



翌年1月半ばのグランドオープンに先駆けて、制作現場を公開。切ったり貼ったり縫ったりしながら、空間づくりに参加できる機会を開く。ゲスト講師との対話を踏まえてコンセプトを熟考するなかで、西尾さんが「DATSUEBA」というネーミングを提案。三途の川のほとりで亡者の服を剥ぎ取ると伝えられてきた妖怪「奪衣婆」と、服を脱いで心身を浄める場に向かう「脱衣場」からの着想。受講者はシフトを組んで、2日間で100名を超える訪問者を案内する。



2022年1月22日  
「DATSUEBA」グランドオープン

全ての空間施工とアイテム制作が完了し、装いの共有空間「DATSUEBA」がいよいよオープン。この世とあの世を分かち三途の川のほとりで、亡者の服を剥ぎ取ると伝えられてきた妖怪「奪衣婆」と、服を脱いで心身を浄める場に向かう「脱衣場」のようなイメージをまとう空間で、社会や文化の「当たり前」を脱ぎ、新しい日常をつくる場が誕生。







## 「『共有』と『私有』を行き来する」

人文系私設図書館ルチャ・リプロ

[青木真兵 (キュレーター/古代地中海史研究者) & 青木海青子 (司書)]



奈良県東部の山深い東吉野村で自宅を開き、図書館・パブリックスペース・研究センターを内包する「人文知の拠点」としてルチャ・リプロを展開してきた青木真兵さん、海青子さんから話を伺いました。社会の当たり前を問い直すこと、共有と私有を往還すること、空間を統制しすぎず訪問者が余地を見つけられること。柔らかな言葉と具体的な実践から、共有空間について思考を深めるための気づきをたくさん得ることができました。

### ルチャ・リプロを開くまで

**真兵** 共有空間をテーマにしたプログラムということですが、僕らの活動は自宅を開いているという点で、私有でもある。共有と私有の両方を持ち、両方を往復するなかで、自分なりの立ち位置や表現、自分にとってちょうど良いスタンスを探っていくのが良いと思っています。

もともと大学の博物館で働いていた経験から、キュレーターを名乗っています。左にある土器のかけらを右に移すような地味な仕事でした。キュレーターと言うと、現代美術館で企画を考える人というイメージが強いかもしれませんが、単に学芸員の英語名として使っています。

東京の大学で考古学を研究していましたが、大阪の大学院では西洋史を選択し、特に古代の歴史を研究しています。同時に現代思想にも関心があって、別の大学のゼミにも通ってました。大学院とゼミの二つに所属していたのが、今のスタンスにつながっているのかなと思っています。僕が大学院の時に、大学生だった妻に出会いました。妻は就職で石川県の図書館に勤め、僕は大学院にそのまま残りました。

その後、二人とも体調を崩すことになり、2016年3月末に東吉野村に引っ越し、6月には自宅を開いて人文系私設図書館ルチャ・リプロを開館しました。何か完成

形を意識していたわけではなく、未完成のまま、始めながら考えようと思い、現在もそうしています。また、引っ越してどのように生活していこうかという時、近くのまちで障害者の就労支援の職員を募集しているという話をいただいて、今もこの仕事を続けています。

### 東日本大震災がきっかけで考えを巡らせたこと

**真兵** きっかけは東日本大震災でした。原発事故が起きた時、どうしても僕らはメディアによる情報に頼らざるを得なかったけど、東京電力がスポンサーになっているメディアは事実を報道できない状況もあった。つまりお金によって真実を得られる人と得られない人、得られる状況と得られない状況が出てきてしまう。それがすごく不健全で危険だと感じました。

当時、僕らは神戸に住んでいて、電子レンジや洗濯機など色々なものがスイッチ一つで動く。すごく便利だけど、電気がどこから来るのかという問題もあるし、電気が止まると一転して便利ではなくなってしまう。便利なものに頼っている僕らが、生活力が何もない状態で放り出されてしまったら怖いなと思い、都市の脆さを感じました。

### 教育や文化に持ち込まれる市場原理主義への懐疑

**真兵** また、売れるか売れないか、ニーズがあるか否かを数値化する市場原理主義についても考えさせられました。教育や文化はそもそも数値化できないし、すぐに結果が出るわけでもない。それなのに、図書館や博物館、美術館に市場原理主義が持ち込まれているように思います。来館者がこれ以上来なかったら閉館するとか数字で判断しているけれど、そんな形でコストカットしていくのはおかしい。当時は文部科学省から大学にもそうしたオーダーが来ていて、人文系学問は軽視されてい



るとすごく感じました。人文知とは、数値化しづらいものを知ろうとするような知のことで。

そもそも教育や学びとは何なのかを考えていて、当時は小学生や中学生の塾で働いていましたが、進学塾だとテストで良い点数を取ることが目的になる。そのため方法をいかに合理的に教えるかになってしまうけれど、本来はテストの点数は二義的で、大事ではありません。教育や学びで大事なものは潜在能力を引き出すことで、本当に好きなものが見つかって一生懸命やるようになることが大事。それなのに、良い大学に入り、安定した会社に入るためという考えが根強く残っている。

こうした問題意識から、人文知の拠点をつくりたいと思って、ルチャ・リブロをつくりました。大きな言葉になりますが、生活の中で近代を相対化する。山村や障害、今回のテーマでもある共有について改めて考える。なぜなら、近代は私有の概念から始まっており、共有は近代を相対化できる強い概念だと思います。

#### 『彼岸の図書館』『山學ノオト』『りぶろ・れびゅう』

**真兵** 僕らの移住前と、移住してすぐと、しばらく経ってからについては、書籍化されています。僕らのエッセイと対談をまとめた『彼岸の図書館』と、『山學ノオト』という日記です。後者は東吉野村に住んでいる芸術家の武田晋一さんと一緒につくった本です。普通の書籍は、本の天のところをカットしない天アンカットと言われる作りですが、『山學ノオト』は、天ではなく小口アンカットになっていて、めくりづらい。武田さんは手触りをすごく重要視しており、電子書籍が出ている世の中で実際にものをつくるとはどういうことかと考えた時、便利とは異なる要素を取り入れた方が意味があるという考えです。

ルチャ・リブロにどんな本があるのかを、来館者の方々に紹介してもらおう『りぶろ・れびゅう』もあります。ルチャ・リブロにはどんな人が来るのかという質問と、

どんな本があるのかという質問をよく聞かれるのですが、その二つに同時に応える本としてつくりました。

新聞の書評で『彼岸の図書館』について次のように論じていただきました。「書名に掲げる『彼岸』は、この図書館が資本主義の論理で動く都市生活から外れたところにある、という考えを示している。…その点『なんとなく』『微調整』を旗印に緩やかな変革を志す姿勢には、希望の光が見える」。日経新聞がこの書評を書いてくれたというのがすごく面白い。いくつかの新聞で書評を出してもらいましたが、最も本質的なことを書いてくれたのが日経新聞です。日経新聞こそ資本主義の論理の中で記事を書いていて、その最前線にある新聞ですが、その人たちこそ危機感を感じていると思います。

#### 相互に干渉し合っている私有空間と共有空間

**海青子** 当館の共有空間の特徴についてお話しします。まず、自宅の一部を開放しているので、私有空間と共有空間が相互に干渉し合っていることです。店舗や寺社などでも住居と店舗が接している場合がありますが、当館ではそれぞれが独立していないところが特徴的。普通なら店舗の部分を切り離しても生活は成立しますが、当館の場合は図書館部分を切り離されてしまうと生活が成り立たない。

また、川に掛かっている橋を渡る必要があり、当館は物理的にも彼岸にあります。橋を渡った正面に天誅組終焉地という石碑があり、天誅組リーダーの吉村虎太郎という幕末の志士が亡くなった場所とされています。現在では別のお寺に移されて埋葬されていますが、そのような史跡が存在します。そこから逸れて林を抜けると当館がある。史跡までは誰でも来ることができますが、林を抜けてやって来るのは当館に用事があるか、その裏のお墓にお参りに来るかのどちらかです。ここには当館しかないため、この林の辺りから私的空間が始まっていると言えます。当館の館長

は「かぼす」という名の猫です。「おくら」という犬もいて、主任を務めています。人間は皆、平社員ですね。

本棚は、村の大工さんが「木を切りだしてつくった方が安い」と教えてくれて、そのようにつくられています。ほとんどが私たちの私蔵の本を公開しているので、頭の中が丸見えのような感覚で、少し恥ずかしいなとも思っています。私蔵の本だから大量に付箋が貼られたままのものもあり、借りた方が「ここに付箋が貼ってなかったけど、文章が良かったよ」と教えてくれるようになりました。以前に働いていた大学の図書館だと、付箋をはったまま棚に戻すなんて絶対に駄目。ルチャ・リプロでは、それが交流のツールになっているのが面白い。

#### ルチャ・リプロの運営のあり方

**海青子** 開館中には私は書庫の奥の司書席に座っています。閲覧室での過ごし方は来館者の自主性に任せていて、冬は奥のコタツで寝落ちしているお客さんもいらっしゃいます。開館日時については、基本的に3月中旬から12月中旬までの日曜、月曜、火曜の11時から17時です。月10日程度で、年間90日くらい開けています。1月から2月にかけて雪が降ったり道路が凍ったりするため休みにしていましたが、今年度の冬は開けてみようと思っています。冬は静かで読書が進むと思うので、もしご興味があったら冬にも訪れてみてください。

イベントの場合は有料ですが、基本的に入館も閲覧も無料です。近代とは異なる場所にしかかったため、お金を取ってしまうと違ってくるかなと考えました。サービスとしてではなく、お裾分けという感覚です。大学の図書館では利用者にサービスとして提供していましたが、ここは自宅の一部だし、無理せず続けたいという思いで始めました。

貸し出し期間は2カ月で、一人3冊まで借りられます。会員カードの作成料と

して500円お支払いいただければ、遠方に住んでいる人も借りることができます。県内外から500人ほどが来館し、合計200件程度の貸し借りがあって、会員カードを持っている方は現在200名程度です。2014年から「オムライ斯拉ジオ」というラジオも配信してまして、ラジオを聴いて図書館に足を運んでくれる方もいます。

#### 振るまいが変わる、ギミックとしての「図書館」

**海青子** もともと図書館ではない私有空間を「図書館」と名づけて共有することで、私たちも含めて、ここでの過ごし方や振るまいが変わってきます。動物たちも何となくオンオフがあるみたいで、猫も閉館中は真ん中で寝ていたりする。開館中も寝ているのですが、さすがに場所は選んでいるかなという印象です。プロレス用語で「設定」という意味合いのギミックという言葉がありますが、ギミックとして「図書館」と言うことよって、空間のオンオフが切り替わっているように思います。

**真兵** 僕はプロレスがすごく好きです。「ルチャ・リブレ」というメキシコのプロレスが有名ですが、スペイン語で「ルチャ」は「闘い」、「リブレ」は「自由な」という形容詞です。「リプロ」はイタリア語やスペイン語で「本」の意味ですが、プロレスと本という二つの好きなものを組み合わせて名づけました。

プロレスの世界観は、基本的に「善と悪」「ベビーフェイスとヒール」があり、ヒールが悪役を演じますが、本当に悪い人かというところではない。その役割を演じることをギミックと言ったりします。家だけ「図書館」と呼ぶことで図書館の空間が創出されます。

#### 来館者が参加の余地を見つけられる、統制しすぎない空間

**真兵** また、様々な人が参加する余地があることも、ルチャ・リプロという共有空



間の特徴です。空間を統制しすぎないことにより、訪れる人が自ら参加の余地を見つけ、空間に手を加えていきます。

**海青子** 空間や本を無料で提供していると、「何かお礼がしたい」と言って、自主的に自分でつくったものを持ってきてくださる方がたくさんいます。当館に置いている棚や看板もその一つです。植物を育てるのが得意な方は、「裏庭に花がないから」と言って、花を植えてくれました。得意なことでお返しをしようとするのが面白いなと思っています。すごく統一感があって美意識が行き届いている空間ではないため、そこにも余地がある。自宅ではありますが、図書館を皆でつくっているという感覚に自然となります。

**真兵** 岐阜の田舎に住んでいる方が草刈りをしてくださいました。僕は「このくらい草が伸びていても自然に囲まれていて良いな」と感じていましたが、田舎の人からすると「こんなポーポーにして」と感じる。根元から草刈りをしてもらって気づいたのが、草はすぐ生えてくるということ。やはり田舎の人は自然の驚異的なエネルギーを知っているから、感覚が全く違うのです。

#### 常識を相対化し、異なる考え方を発信するための様々な活動

**真兵** 僕の奥さんが作品をつくっているのので、マルシェなどで出店する時、作品に合わせて本を選んで持っていく出張図書館もしています。そうすることで売買という関係だけではなく、ある種の中間的な場所ができます。また、土着人類学研究会という研究会もしています。土着人類学は、僕が勝手に考えた言葉ですが、自然の中で生きていく力を取り戻すべきだと考えて名づけました。

京都の障害福祉団体であるNPO法人スウィングの木ノ戸昌幸さんもメンバーですが、彼の『まともがゆれる——常識をやめる「スウィング」の実験』という本はとても面白いので読んでみてください。戦史・紛争史研究家の山崎雅弘さんを招い

たりして、今の僕らの常識を少しでも相対化し、異なる考え方や生き方もあることを発信したいと思い、研究会を続けています。

「ルチャとほん往復書簡」は、悩みを聞いた上で僕らが選書した本を、大和郡山にある「とほん」という本屋さんからお送りするというレファレンス企画です。本の代金と宅配便送料をお支払いいただきます。コロナ禍で様々な判断を迫られる場面がすごく多くなり、少しだけ判断を手放してもらう機会を提供したいと思いました。僕らは本を選ぶことは全く苦にならないので、どんな感じで暮らしているかという状況を手紙に書いて送ってもらえたら、それをもとに本3冊を選びます。インターネットの「note」での月一の連載「土着への処方箋」でも、お悩みを送ってもらって3冊を選び、その理由についてお答えしています。これは『彼岸の図書館』を出版した夕書房と一緒にやっていて、今後は書籍化しようと思っています。

#### ルチャ・リプロは伸縮し、変化していく

**海青子** 現実の空間に来ていただかなくても、空間を共有できる方法がないかと考えた結果、このような企画もやるようになりました。

**真兵** 伸縮するルチャ・リプロと捉えて、現実世界ではなくウェブを通じて情報発信したり、参加する空間をつくったりしています。ルチャ・リプロという図書館は建物の中だけではなく、外にも拡張する。周辺環境は季節によって変化するので、それに合わせて生活も変わる。ルチャ・リプロでは変化することを前提にしていますので、真夏の暑い時にすぐ近くの川で研究会をしたこともあります。

冬の寒い時期は、築70年の隙間のある家全体を暖めるのは大変ですので、自然のパワーに勝とうとするよりは受け入れて、一部屋だけを暖めて、そこで皆がずっと過ごすことにした方が合理的です。春になって梅や桜が咲き、草木花が出てくると、図書館も開き、一部屋から二部屋、三部屋と変化していきます。

### 隙間や変化を許容することで、余地をつくりだす

**真兵** どうしても街だと、建築基準法などの定めがあって、空間が区切られ、社会全体でも隙間がない方が良いということになってしまいます。ルチャ・リプロは隙間だらけで、変化を前提にしているという点で、現代社会のオルタナティブだと言えます。隙間がすごくあるので、たくさんの虫が中に入ってきますが、全部の虫に対応していたら大変なので諦めるようになりました。うちには猫がいるので虫を殺してくれて、その後にアリが来て死骸を持っていくから、少し我慢すればいなくなる。時間をゆったりと持てば、自然が何とかしてくれると気づきました。

**海青子** 空間だけでなく、そのような時間感覚も一緒に共有している感じです。ここに来ると時間がゆっくりになる。それを体感するために定期的に来てくれる人も多いのかなと思います。変化することが前提ですので、『彼岸の図書館』や『山學ノオト』の中でも、私たちの考え方や意見は割と変わっていきます。本の中で一貫していないといけないという考え方もあるとは思いますが、変化していくことを許容する。そうすることで、読んでくれた人から「気が楽になった」と言ってもらえる。こうした考え方も共有していくことが、余地をつくるという意味で大事な部分かなと思っています。

このプログラムの趣旨である「空間づくり」以前の、青木夫妻の生き方、人生への姿勢に刺激を受け、自分自身の生き方を見つめ直す機会にもなった。質疑応答での「働くとは働きかけること。そこに対価を期待しない」「働きかけているからこそ、カオスな世の中でもぶれずにいることができる」という話が印象に残っている。「空間づくり」という観点では、「私を開くことで共有空間が現れる」という考え方が大変参考になった。共有空間をつくるのに共有という概念から入るのではなく、まずはそこにある「個」から始めて、それが開かれていくというプロセスが空間性を生むのかなと感じた。次回のワークショップでそれを大事にできればと思う。

安田翔

大学へ入学してから、いわゆる「住み開き」という営みに触れる機会が多く、自分でもやってみたくて思っていたところだった。自分がこれまで見聞きしたり、試みようとしていたのは、完全な「オープン」の空間で、誰に対しても開かれている、というようなものだったが、ルチャ・リプロのそれは、どこか他とは違うように映った。質疑応答での真兵さんの「閉じながら開く」「閉じることで開く」「結界は張っている」という言葉が印象的だった。これまでの自分の思考が、いわゆる「現代病」的側面を持っているというか、資本主義的な「平等」や「多様性」を謳うような、社会と自分の思考がすり寄っていったのかもしれないと気づかされた。コロナで「閉じる」ことが市民権を得て、我々の「共有空間」の概念が揺さぶられたのではないかと思う。

島田貴弘

青木夫妻が言っていた「日常生活の『あたりまえ』を問い直すこと」を真に実践するにはどうすれば良いかについて考えを巡らせていた。生活する場所を都市から農村に移しただけで、それは本当に達成できたと言えるものなのか。都市の喧騒がない農村は、物事を深く考えるためには適した場所かもしれないが、今や都市と農村における生活環境の設備にはそこまで大差はないと思う。都市で生活していた際に身の回りにあった全ての人工物と無縁になるべきではないか。そうでないと、かつての自分たちの日常生活を俯瞰して見ることはできないのではないだろうか。

内田環

## 「共有空間のモックアップをつくってみる」

小山田徹（美術家／京都市立芸術大学教授）



数十年にわたりカフェや焚き火など人々が集う共有空間の開発を手がけてきた美術家の小山田徹さんから、共有空間の概念とそこにアプローチする方法についてお話を伺いました。その後、事前に集めた約200個のダンボールを使って、1日目は「居心地の良い個人的空間をつくる」、2日目は「皆で共有できる空間をつくる」というお題のもと、空間のモックアップをつくってみるワークショップを実施。皆で一緒に共同作業をすることを通して、各自の個性やプロジェクトサイトの特性を感じとる機会になりました。

### レクチャー&ワークショップの目的と流れ

私は大学で彫刻の教員をしていますが、オブジェのような作品ではなく、美術の立場から、社会に人々と共有できる空間や時間をつくっています。その活動によってできたものが自分の作品だという認識はないのですが、周囲の人々が美術行為として捉えるようになり、美術家として活動してきました。

前半のレクチャーでは、「共有空間の獲得」という視点で活動を振り返りながら、「共有空間とは何か」「共有空間にアプローチするにはどんな方法があるか」をお話します。後半のワークショップでは、この空間を自分たちのものとして獲得していくために、作戦会議をしながらダンボールでモックアップをつくり、どんな空間ができるかを探ってみましょう。モックアップとは、建築や家具などをつくる際、大体のスケールで使い勝手を考えつつ手がかりになるようなモデルをつくることです。空間を仕上げるのではなく、どんなことができるのかを妄想する時間にしたいと思います。

### それぞれの人の周りに自然に在る共有空間

私の活動の基本形は、共有空間の獲得です。共有空間とは、人々が集い、自律的

に交流・交換・交歓し、世代を超えて価値観を共有したり、伝承したり、発展させたりして、社会の営みが行われる場や時間のこと。共有空間は無理矢理つくらなくても、それぞれの人の周りに自然に存在していて、他の人の共有空間とどういう形で手を結び、重なり合うのか、距離をとるのか、そのようにできあがっていくのが共有空間です。

誰とどういう形で意識的に結びつけられるかが、能動的につくる側になるのか否かを決める。今の時代は、大学の食堂や広場、公園など様々な公共空間が与えられ、「ここで交流をしてください」と準備されている。与えられた空間だと気持ちの良い空間にしようと掃除したり努力したりするのでしょうか。

### 共有空間の獲得は、愛の問題

共有空間の獲得は、愛の問題と関係しています。どうしたら愛が芽生えるのか。人間だけでなく、空間や時間に対する関係にも言えます。愛の種類、深さ、持続できるかどうか。愛という言葉は陳腐ですが、すごく重要。愛が湧く、愛を感じる、愛を受ける、それらは人類が何万年もかけて獲得してきたエネルギー交換の一つの形です。どうすれば愛が芽生えるかという視点で空間や関係性をつくることに、美術の立場で取り組んできました。

愛が湧くための最大の方法が、獲得感です。自分でつくったという感覚があるか否かで、空間への愛の深さが変わる。子どもが自分でつくった基地で過ごす時の空間への愛着は、公園で遊んでいる時よりも強い。今の時代は誰かがつくった何かを利用せざるを得ないけど、どこかに隙間をこじ開けて自分たちで何かをつくり、獲得感をもてないでしょうか。



### 共有空間に興味を持ったきっかけ——友人のHIV感染から始まった勉強会

私はダムタイプというパフォーマンス集団の創立メンバーでしたが、世界中を巡回している絶頂期に、同級生のメンバーがHIVに感染し、カミングアウトを受けた瞬間から、私の人生と価値観が変わりました。1990年代の当時は日本でエイズに関する情報が少なく、いつ死ぬかわからない友人を目の前にして、どのように共に活動していくのかをとっても悩んだ。その悩みを50人くらいの友人が共有し、皆で毎晩集まって話し合う。悲しんでいるだけでは前に進まないで、HIVの研究者や看護師を招いて色々な勉強をしました。

エイズを治すことはできないけど、エイズを取り巻く差別や偏見、社会問題に関与できるかもしれないというところから、私たちの活動方針が定まっていきました。メンバーの中には、社会活動家もいれば、セックスワーカーという身体を介した仕事をしている人もいて、色々なタイプの友人がそれぞれの立場で同じ問題に向き合うことになった。ダムタイプでは表現を核にして、その問題を取り込んだ作品を上演し、世の中に問いかけ、思考することを誘発するような作品をつくりました。

### 高い専門知識を持つほど、空間や活動の敷居は高くなる

その頃、私はダムタイプのオフィスに住んでいましたが、小さな部屋に毎日50人もいと仕事にならない。京都の特異な大家さんが「社会的な活動をするなら、自由に使って良いよ」と声をかけてくれ、京都大学の東の端っこの山麓にある古い一軒家を提供してもらった。50人全員で引っ越しをして、Art-Scapeという空間をつくり、ここを中心に、様々な社会活動が生まれました。

横浜で日本初の国際エイズ会議が開かれましたが、当時は政府と関係者、製薬会社だけが参加する秘密会議のようなもので、民間の活動団体は参加できなかった。そこで、国際会議場の前の広場を借りて「Love+ (ラブ・ポジティブ)」というレイヴ

パーティーを開催した。会議を終えて通りがかる人をパーティーに連れ込み、世界中の活動団体や患者本人がアピールしながら交流し、大成功でした。

私たちはパフォーマンスを専門としてきたのでショーをつくり上げるのが得意。舞台関係者も手伝ってくれて奇跡のショータイムになりましたが、少しずつ疑問が湧いてきた。色々な活動をして世の中はそんなに変わらず、燃え尽き症候群のような疲れが溜まってきて、なぜなのかを皆で考えました。至った結論は、答えを一つに求めすぎたのではないかということ。

エイズによる差別のない世の中をつくりたいという思いはあるけど、活動に注力すると、そうならなかった時のショックも大きい。こだわりすぎると活動は排他的になりがちで、誰もが入りやすい空間や活動体をつくっているはずなのに、ジェンダーやセクシャリティーについて2年間も勉強していると、高い専門知識を持つようになり、初めての人には敷居が高くて無言の圧力を与えるようになる。一つの目標を活動の中心に据えると、社会に対してある種の暴力性を帯びてくるのかもしれない。

### 対話し考え続けるための共有空間をつくっていく

自分にとって最も大事なものは、何か問題について議論したり共有したりする時間や空間をつくり続けていくことではと考えるようになった。時代が変わっても変更を重ねながら対話する場所をつくり続けていく。それぞれの段階で出す結論はあっても、正解を一つに限らず、何かを常に考え続けていくことが必要だと思い、それを「共有空間」と呼ぶことにしました。

自然に意見交換ができる方法や、可変的な組織のつくり方を考えるために、色々な活動を集約するようになり、気が楽になりました。私は舞台美術や工事現場のアルバイトをやってきたので、内装の施工もできるし、認が必要な場合は建築家の友人に頼める。世の中に色々なタイプの空間を忍び込ませていく活動を始めました



が、その頃はアートとは捉えられず、セミプロの建築集団としてインディペンデントのカフェのように認識されました。

### オールナイトカフェで得た、初めての獲得感

Art-Scapeでの2年間の活動で新しい人が入りやすくなったことを感じていたメンバーたちと次の方法を考えていた時、京都大学の近所の古い洋館の寮で、寮生と一緒にオールナイトのWeekend Caféをすることになりました。暖炉のある雰囲気が良い空間で、長机を置いてカウンターをつくり、向かいの酒屋から飲み物を仕入れて、端数を切り上げて、仕入れ値が230円なら250円で売る。営業許可がないのでホームパーティーでのカンパだという暗黙の了解にした。好きな飲み物を自分で持ってきて、お金をチャリンと入れて、自分で開けて飲む。2週間に1回のペースで、土曜日の夕方5時から翌朝5時まで。口伝えだけでネズミ講のように広がり、3回目には200人ほど集まって大盛況。大学の近くだから様々な分野の学生や教員も来るし、アーティストも集まってくる。京都中の重要な人が来て、会いたい人に会える場所になった。

カウンターにいるマスターはニコニコして、仕入れた飲み物を並べて渡す。それだけでお金が勝手に入ってくるという仕組みに皆が気づくと、マスターになりたい人が続出し、客の大半がマスター経験者になった。準備から片付けの仕方まで全員が知っている状態。標識で示さなくても分煙が自然とされるようになり、近所迷惑にならないように皆が勝手に動くようになる。

このWeekend Caféで私は初めて獲得感を感じました。そんな奇跡が3年間続きましたが、留学や進学でメンバーが抜けて、建物が歴史的建造物に指定されたため使えなくなった。でも京都のある時期に、ここである種の感覚を共有し、こういうことが可能なのだと皆が噛み締めることができました。

### バザールカフェでの実践

Weekend Caféがなくなり困っていた常連の看護師たちが、同志社大学の近くにタダで借りられる洋館を見つけてきた。今度はもっと開かれた場所にしようとして、皆でバザールカフェと名づけ、営業許可を取って運営しました。美術をやってきた人間は、デザインもできるし、空間もつくれるし、潰しが効く事務員的な能力があるので、私も積極的にその役割をこなしました。

外国のメニューがあるのですが、トラブルを抱えている外国の人たちに、故郷のレシピをつくってもらい、レシピ代として支払われる仕組み。誰かがそのメニューを食べると、そのお金はダイレクトに誰かに渡って助かるようになっており、食べることは重要なアイテムでした。昔から近所で焚き火がされていた場所だったので、奇跡的に焚き火もできた。その焚き火を使ってこっそり料理をする。保健所的にアウトだけど、保健所のスタッフも昼飯を食べに来るから黙認してくれていた。

この場所の一番の特徴は、全ての人に対して守秘義務があること。一緒に皿洗いや作業をしている時にポロッと聞いた秘密には守秘義務がある。先生や医者と同じように、他者の秘密を共有する機会が多いので、全スタッフが守秘義務を意識しなければなりません。

### できるだけ自分でつくることで、どんどん湧いてくる愛着

バザールカフェでは、できるだけ自分たちでつくることを心がけました。つくり始める前にオールナイトのカフェを半年間やって、さりげなく設計図を置いて「こんなカフェができたなら」と色々な話をした。数百人も集まると特異な背景を持った人もいて、計算が得意な人、庭師、大工経験者もいる。気がつくとも半年間でたくさんのお金も集まり、夏休みに40日間かけて改装しました。私は現場監督で、後輩の一級建築士を設計監督にして、大学で建築を学んでいた学生を口説いて助手にし



た。長期の現場では食事や休憩をするための飯場を先につくるのですが、ここがミーティングの場所になって楽しい。雑談をしているうちに仕事の分担ができて、皆が自律的に動きだす状態になる。

現場監督として恐ろしかったのが、毎日30人くらいの素人さんが来ること。プロだと一瞬でつくれる空間を、素人の技術で楽しく皆でつくる方法を考える必要がある。2時間でできる作業量を考え、少しずつ技術を身に付けてもらいながら、人手がないと組み立たないような設計をわざとする。ペンキ塗りなら皆でできるからスロープをつくって塗ってもらったり、ベンチもクッション一つを包めば済むところをわざと300個くらいに小割りしたりする。皆が「自分がつくった」と思えるから、気づくと裏に自分の名前を書いている。

失敗の跡はプロだとクレームの対象ですが、自分たちでやったのなら記念や風合いになり、どんどん愛着が湧いてくる。できあがると、参加した人は皆スタッフのようになり、自分の店という感覚になる。色気のあるサービングの仕方を考えたり、カウンターシステムをつくってみたり。そんなふうになら皆でつくってオープンしたので、色々な人が来てくれて、飲み食いしたら誰かが助かるから機嫌良くお金を使ってくれる。

ここは老舗のカフェの一つとして、今も京都に残っています。色々な団体からメンバーが集まって理事会を組織して運営している。理事会はトップダウンで決定せず、現場で解決してもらえようにするのが方針で、3年毎にシャッフルされてカフェの雰囲気や嗜好性が変わる。最初は私たちが中心だったけど、その次の代は経営戦略をしっかり立て、本格的なカフェを目指すチームになった。今は同志社大学やキリスト教系の人々が中心になり、ケアの観点でやっている。でも、飲み食いしたら誰かが助かるという理念は同じです。

### 今も日本で受け継がれている、屋台や小屋を活かした共有空間

その後、「ID 10」という施工集団をつくり、個人の家をゲストハウスに改装したり、ギャラリーをつくったり、仲間と一緒に色々な空間設計をしました。どのように共有空間を社会とつなげていくのか、そのような空間を過去の人々はどのように維持してきたのかを考えていた時、銭湯や屋台、市場など、今もギリギリ残っている共有空間があることに気づき、ちょっとずつ手をつけてみようと思いました。

最初に地域に入るためのスタートキットとして屋台は、とても有効でした。屋台を少しだけ大きくすると小屋になりますが、壁を立ち上げて屋根を載せた瞬間にワクワクする。子どもの秘密基地のように、そこに入った瞬間に感じる空間性を核にした作り方ができないかと考え、しばらく小屋づくりに取り組んだこともあります。例えば、福井県の陶芸家の庭につくった小屋は、陶磁器を乾燥させるためのものでしたが、使わない時はコンサートや読書会など色々なイベントができるようにつくりました。

火事や天災など様々なリスクがあるため建築物は簡単にはつくれません。10平米以上の建築物は申請が必要で、国家資格を持つ設計者が要る。電気やガスなどのライフラインに関わるものも勝手につないだらダメ。だけど、皆さんがこれからここでやっていくようなリノベーションは狙い目で、耐用年数が終わった建物が再利用される時代になっています。

### 人類が共有のために大昔から実践してきた、食と焚き火

太古の昔から人類が実践してきた共有のための要素の一つに、食があります。食にまつわることを組み込んだら、絶対に楽しい。焚き火をするようになってからは「焚き火に敵うものはない」と思っています。人類は大昔から毎晩火を焚いて過ごしてきた。戦後しばらくは、まちなかでも火を焚いていて、学校帰りの子どもも火



にあたりながら帰っていた。だけど一挙に直火がなくなって、特殊な場所じゃないと焚き火ができなくなった。それでも焚き火にあたると、遺伝子に組み込まれた何かが発動して、ワクワクする。自己紹介もせずに自然と喋っている。それって人類が長い時間をかけて蓄積した、共有のための要素の代表格なんじゃないかな。

大学の授業でも焚き火をしますが、火を前にすると自分のことをポツポツと話し始めたり、テーブルでの対面だと話せない問題を共有したりする。その空間性はどうしたら獲得できるのか、焚き火に代わるものは何かを考えると、本当に面白くて感慨深い。

#### どうやったら本当の愛をつくることができるか

照れくさいけど、最後に言いたいのは「どうしたら本当の愛をつくれるのか」ということ。用意された愛は嘘っぱちで、親や社会が語る愛は、偽善的で眉唾物で、ズレがある。自分の立場に置き換えて、愛を獲得し直す必要があります。パートナーや家族などの関係性も含めて、本当の愛を知りたいし、本当の愛をつくりたい。

パートナーの関係性だと、向き合ってお互いに引き合い同化する時期も必要だけど、家族をつくり一緒に長く生きていくことを目指すなら、向き合うのではなく、徐々に同じ方向を向くという、ベクトルを共有する必要がある。集団性においても同じです。イベントや共同作業だと、内側で向き合い盛り上がり一体感を得られるけど、持続していくためには、大きなベクトルを共有して同じ方向を向く状態をつくる必要がある。皆が同じベクトルに向いているというのは、それぞれが外に向いているということ。外部から入ってくるきっかけができて、自分たちを客観化できる。皆さんもそういう方向を見つけていけると良いですね。

長々とたくさん喋ってしまいましたが、ちょっと休憩してから、ワークショップに入りましょう。

ダンボールであれば身体を動かし、頭を使い、コミュニケーションが生まれ、ワクワクした体験は初めてだった。妹と一緒に、枕や毛布を使って秘密基地をつくり、その中で顔を合わせ笑いあった懐かしい日々を思い出した。小山田さんの共有空間は、子どもも大人も含めて他者を理解し、他者に優しく、他者の共感を呼ぶものだと私なりの解釈をし、魅力を感じた。私の装いに対する考え方とつながる言葉を、小山田さんがワークショップで口にした。「上手な引き算」だ。以前はたくさん服を買い、毎日違った服を着ることが好きだったが、今は長く大切にしたいと思える服をたまに買い、着回すことが好きだ。服を減らしながら装いの価値を高めるという上手な引き算に取り組んでいるのかもしれない。

柿原萌未

小山田先生の進め方の塩梅がちょうど良い。引っ張るけど、引っ張りすぎるわけではなく、こちらに考える余裕も与えてくれる。終始ご自身も楽しそうで、私も安心して楽しみながら参加することができた。気づけば子どもたちが続々と集まってきた。制約を加えることなく一緒に参加できるようにし、遊びも同時並行できていたのがすごい。まとめて一つの方向を向かせるよりも、それぞれが楽しく参加できる方法を考えるようにしていきたい。また、ダンボールの椅子を一緒につくったり、心地良い空間のコンセプトを聞いたりして、自分の性格や考え方の傾向がわかり、他者の良いところや違いが面白かった。場所だけでなく、自分自身や他者にも愛着が湧く経験になった。

杉山貴美

ワークショップを通して場所づくりの重要なエッセンスを学んだ。集まった人たち誰もができる仕事を与えること、達成感を味わえることが大切だ。私が運営するギャラリーの奥のスペースを改装するヒントをたくさん得た。昔、皆が集まっていた共有空間はどんどんなくなっている。銭湯や屋台、古い喫茶店もなくなり、個人という存在がどんどん重要視されてきているが、孤独を生んでいるようにしか思えない。皆が愛をもって同じ方向を向く時代はもう訪れないのかと少し絶望もしたが、私の周りの人が少しでも前に進めるようなことができたらと思った。

松本尚大

## 「“つながり”について考える」

梅田直美（社会学／奈良県立大学准教授）



孤立や虐待など関係性の諸問題とそれらを巡る社会的活動について研究してきた梅田直美さんから、つながりをテーマにお話を伺いました。前半は、古今東西の社会理論を参照し、近代社会でつながりがいかに変容してきたかについて。後半は、ケアなど生活者自らの経験を軸に起業したソーシャルビジネスによって、ユニークなつながりが生みだされている事例を紹介いただき、アートプロジェクトや共有空間と大いに共通する論点について学びました。

### 時代や文化によって孤立の捉え方は異なる

今の日本では孤立が問題視されていますが、海外の思想や活動に目を向けてみると、孤立が問題だとはいさほど言われていません。例えば、西洋の場合は神様との対話などで自分の存在が肯定されるので、人間の孤立が問題視されない傾向にあります。日本ではなぜつながりがそれほど重視されるのでしょうか。

歴史を遡ってみると、戦前は隣組や町内会が全国的に組織されていました。村や家制度もあり、つながりが制度化されていた。戦後になると、民主化や個の解放など昔の束縛から解放され、個人が自由になることが良いと謳われるようになり、孤立はさほど問題視されていませんでした。このような歴史的な積み重ねの中で、私たちは孤立を問題として捉えるように変化してきたことがわかります。

### 社会構築主義アプローチとは

社会学の方法論の一つに社会構築主義アプローチがあります。例えば、方法論的構築主義の立場では、何か物事について考える時、私たちが当たり前に使っている概念や言葉の意味を一旦括弧に入れ、「社会的に構築されているもの」として捉えます。家族を例に挙げるなら、現代の日本社会で家族と思われているものは、いつ

頃から、どのように形成されてきたのか。時代や場所が変わると家族の概念は当然変わってくる。子どもや孤立などの概念についても同じことが言えます。

制度のエスノグラフィーはドロシー・スミスによって提唱された研究方法で、大雑把に言うと、社会構築主義的なアクションリサーチです。人々の日常の経験における困惑や葛藤を出発点とし、その困惑や経験がどこから来ているのかを、歴史的かつ社会的に構築された認識枠組みと日常の経験とのつながりをマッピングすることにより、研究者と対象者との協同作業で解明していきます。

### 社会システムにより立ち現れる地域の課題

地域の人が直面する課題として、少子高齢や担い手不足、住民の孤立化、ケアやジェンダーなど、住民と話していると同じようなキーワードが出てきます。地域は空間ごとに特性がありルーツも違うのに共通する課題が出てくるのは、社会システムの問題があるからです。近代以降の社会で形成されてきた制度や認識枠組みと関わる歴史的で重層的な課題だということです。私の研究では、今この課題を歴史的、重層的な視点で読み解いた上で、目の前のものにアプローチしていく手法で行ってきました。

### 社会集団の類型論——ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ

産業革命や資本主義、都市化など様々なキーワードで語られる近代社会になってから、人間関係が変容してきたと常々言われてきました。近代ではフィールドワークが発展してきたため、近代社会におけるつながりの理論は単なる机上の理論ではなく、実世界をある程度反映しています。社会集団の類型論では、F. テンニースによるゲマインシャフトとゲゼルシャフトという概念があり、近代化に伴って社会集団はゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと移行していくという図式が唱えられました。



ゲマインシャフトは本来的で自然的な共同社会を指し、ゲゼルシャフトは作為的で物象的な利益社会を言います。ゲマインシャフトは村や家や町など本質意志に基づく有機的結合体で、ゲゼルシャフトは大都市や企業など選択意志による機械的結合体。どんだんゲゼルシャフトが増えていくという理論でした。

社会学や心理学などの様々な研究者や思想家が似たような図式を論じています。その中でコミュニティという概念を提唱したR.M. マッキーバーは、コミュニティとアソシエーションを区別しました。村や町などのコミュニティは、同じ場所に住み、同じ社会的特徴を持つ自然発生的集団で、我々意識と役割意識、依存意識の三つを要件として細かく定義しています。それに対して学校や営利組織などのアソシエーションは、共通の関心や目的などで集まった機能的集団です。

#### 近代化に伴う社会関係の変容に関する議論——大衆社会論、アーバニズム論、コミュニティ論

1960年代に大衆社会論が日本で流行りました。近代化に伴い、均質的な「大衆」が社会に影響を持つことになったと捉える理論です。人々が砂粒のようにバラバラに原子化して連帯なくなり、権力者がつながりを持たない個人を簡単に操作できるようになる。自由になったがゆえにそれに耐えきれなくなり、大きな力を持ったものに服従してしまいたくなるというわけです。

同時にシカゴ学派のアーバニズム論が広がっていきます。戦後の日本でもアーバニズム論はコミュニティの概念を広めるベースになりました。都市化により都市的生活様式が広がりましたが、第一次接触が減って機械的で間接的な第二次接触が増えていく。このような実態をフィールドワークにより明らかにしていきました。例えば、非行少年が非行に至った背景にはコミュニティの崩壊があるというような感じ。これに対してコミュニティ存続論という反論もありました。都市では皆が孤立していると言われていたが、一人暮らしの労働者が集まって住んでいるだけ。ライ

フサイクル的にコミュニティが見えにくだけで、郊外などの家族が集まって住んでいる地域ではコミュニティは全く失われていないと論じられました。

コミュニティ喪失論や存続論に対して、B. ウェルマンが提唱したのがコミュニティ解放論です。親族や近隣に代わる「友人関係」による親密な絆のネットワークが、空間的制約から解放された近接性なきコミュニティの形で広がっている。SNSが広がった今の時代では当たり前ですが、当時では驚くべき画期的な理論でした。集団としてコミュニティを語るのは時代遅れで、これからは個人のネットワークとして人々のつながりを捉える必要があるという流れで、社会的ネットワーク論が台頭します。日本では高度経済成長が終わる頃です。経済成長期には、都市開発が進んで、頑張れば頑張るほど豊かになれると思われていましたが、そうした時代が終わりに差しかかり、「ポストモダン」や「近代の終焉」が徐々に言われ始めました。

#### 後期近代におけるオルタナティブな理論——社会的ネットワーク論、親密圏と公共圏

今でもコミュニティという言葉はよく使われますが、つながりを捉える社会学の理論では、少し昔の懐かしいイメージです。現在は社会的ネットワーク論や、後述する親密圏、公共圏の話題が主になっている。そこでは個人が結節点になり、つながりがいかに広がっていくのかという、個人が主体の議論です。そのつながりが強いか弱いか、解放的か閉鎖的かについて分析する視点が出てきます。有名なネットワーク論の研究に、M. グラノヴェッターの「弱い紐帯の強み」という論文がありますが、個人の発展のためには、強い紐帯より弱い紐帯の方が有効であると示した、非常に面白い内容です。

もう一つ、後期近代に最適な考え方として、親密圏と公共圏があります。公共圏はハーバーマスの市民的公共圏という言葉がベースになっており、家族などの私的なものと、国家などの公的なものとの間にあり、市民が自律的に出会い討論できる



万人に開かれた社会的領域・空間を指します。いくら自由と言っても何らかのルールを決めたり統制したりする必要があるため、人々が社会的な統制を受ける領域・空間とも捉えられます。

公共圏の対概念として捉えられる領域・空間が、親密圏です。齋藤純一によると、具体的な他者との間の、関心と配慮によって結びつく持続的な関係性を意味します。親密圏と公共圏というふうに分けること自体が、近代の一つの特徴です。近代は私的な領域と公的な領域が分断化した時代で、そもそも共有空間をつくらうとする背景には、共有されていない空間が相当増えてきたという前提があります。

公共圏はすごく良いイメージで、親密圏は内にこもったようなイメージ。そんな傾向が研究にもありましたが、2000年代以降、日本だけでなく海外でも親密圏が再評価されてきている。例えば、先ほど述べた齋藤純一は次のように論じています。公共圏では、自律した強い個人が主体的・自律的に、市民として自分の意見や技術を持って参加することが前提とされてきました。しかし、現実には、その市民になることができない、見捨てられたような弱い人々がたくさん存在している。そのような人々が、自分の存在を肯定され、公共圏に現れる気力を回復させる場として、親密圏は重要な意義を持つわけです。これは後述するソーシャルビジネスの研究の理論的背景にもなっています。

#### 人生の様々な選択やリスクが個人に委ねられる時代

後期近代社会論における重要なキーワードとして、個人化があります。伝統的価値や制度の影響力がどんどん弱くなり、結婚するか否か、子供を産むか否かのような人生における様々な選択が個人の判断に委ねられる時代になっている。非常に良いことのように思えますが、その選択や判断の結果に伴うリスクも個人が負うことになる。

人間関係も個人の判断にもとづく選択の問題になり個人化しているというのが、

アンソニー・ギデンズによる親密性の変容論でして、「純粋な関係」と呼ばれています。血縁や地縁、社縁など人々を拘束してきた既存の人間関係が弱まり、自己選択の高い「純粋な関係」が増加している。ただ、その関係をうまく保つためには、社会が何も用意してくれないため、個人がずっと努力しないといけない。近年、いわゆる存在肯定や承認欲求のような言葉がよく言われるのには、そのような背景があります。

#### 個人化・多様化の時代——「オルタナティブな家族」から「家族のオルタナティブ」へ

日本でも社会経済が変動するなか、単身者や夫婦のみの家族、ひとり親、事実婚や別居婚、同性パートナーシップの人たちが増えてきています。また、性愛や血縁に依らないシェアハウスやコレクティブハウスのようなあり方もある。1990年代以降は人権が尊重される社会を目指すようになり、欠損や逸脱と言われていたような家族の在り方が、多様化という大枠で捉えられ、多様な生き方を肯定しようという風潮になっていますが、これは大きな転換点です。

今ではもう一歩進んで、家族という存在そのものに異議を呈するようになってきます。例えば、社会学者の牟田和恵や久保田裕之らが論じているように、従来の制度的婚姻家族にこだわらず、家族のオルタナティブについて考えるようになってきた。これまでは家族のオルタナティブの実践というと、シェアハウスが着目されていましたが、近年は介護付きシェアハウスや、シングルペアレントのシェアハウス、LGBTsフレンドリーのシェアハウス、ひきこもりの人たちのシェアハウスなどが、新しい家族に代わる親密性を包含した面白い場所として注目されてきています。価値観や生活形態の違いによる摩擦や葛藤が生じることもありますが、その中でどのように自分は考えるかを見出し、自らの立てた規範に従って動こうとする自律性が育まれていく可能性があります。



### 「家族のオルタナティブ」の実践における課題

しかし、この家族のオルタナティブに向けて進めていこうとすると、日本には色々な課題があります。まず、性愛や血縁にもとづく家族というつながりが、ものすごく根強いこと。様々なところで新しいつながりの試みがなされていますが、いつも同じ人ばかりが集まる。一時的に関わるだけなら良いけれど、他人とずっと一緒に暮らすのは抵抗があるというのが大多数の感覚です。近代以降の日本では、家族がつながりの軸であり、セーフティネットになってきたことから、家族以外の他者との境界を強く意識してしまうようになっている。

また、この課題と密接に絡み合うものとして、親密圏である私的な領域・空間と、公共圏である公的な領域・空間とが、強固に区分・分断されてきたことが挙げられます。その背景には、戦後日本における個人・家族の生活空間モデルの設計の責任もあるように思います。さらに、少し大きな話になりますが、日本では市民としての自律性や主体性がずっと未成熟なままだったということがよく言われています。民主主義の未成熟もそうです。自分のことは自分でデザインするとか、皆で話し合っただけで決めていくというような慣習が、なかなか根づかない。このような点については、おそらくアートプロジェクトが解決してくれそうな気がしています。

### 「つながり」の実践をめぐって——自らの経験を軸に生み出されるソーシャルビジネス

近年では、生活者自らが創意工夫を重ねながら起業した個人事業のソーシャルビジネスにより、ユニークなつながりが生みだされている事例が増えつつあります。もともと私がこのようなソーシャルビジネスに興味を持つようになったきっかけは、育児の孤立に関してインタビューをしている時、「相談できる場所があったり、育児のサポートをしてもらったりしても、結局、自分がしたかった仕事ができないのであれば、それが育児の孤立の本質です」という話を聞きました。そして、その後もインタビュー

を通じて、自分のしたい仕事をするために起業していくケースに関わるようになりました。成功事例とは言えないとしても、すごく面白くて、そのようなスペースの中では「家族」的な親密圏としての性質と、多様な人々に開かれた公共圏としての性質を併せ持つ空間やコミュニティが形成されつつあると気づきました。

様々な生活問題に直面した当事者が、自らの経験を軸として試行錯誤しながら事業を立ち上げるケースでは、当事者であるからこそその共感や社会的インパクトを生み、社会変革につながっている場合もあります。例えば、今はまだ研究の途上ですが、子育て期の親が自宅で営むソーシャルビジネスに関して、5年間ほど調べてきた事例があります。子供服のお店やペットのトリミング、親子レストランを自宅でしていたり、暮らしの提案を行っていたり。もともとはソーシャルビジネスを目標に始めたのではなく、普通に自分がしたいことを事業として立ち上げただけなのですが、思いがけない展開で変わっていくケースが多いのも事実です。初めから社会や他者のためにと考えているわけではなく、自分が困惑や葛藤に直面するなかで、自分のしたいことや問題の解決をしようと一生懸命に取り組んでいるうちに、いつの間にか事業の目的を超えて多様な人が集まる場になり、ソーシャルビジネスのようなものへと変わっていくという特徴がある。NPO法人や社会福祉法人など大きな組織が公的制度に位置づけられる事業を請け負って行うケースとは、全く異なります。

### 公私が曖昧な空間で、日々変化する思考と実践から育まれる多様性

事業目的や計画もない状態で試行錯誤していると、当然ながら自分の考えが色々な経験の中で変わっていき、そこに集まる人との関わりを通じて日々変化していく。だからこそ、固定化されない多様性が生まれ、どんどん面白い空間になっていく。また、自宅や職場など公私が曖昧な空間で、仕事なのか趣味なのか、ライフワークなのかもわからない。店の経営者でありながら、いつの間にか客のように雑談をし

ていたり、本来は客であるはずの人が、色々とネタを持ってきてワークショップをしたり、自分がつくった面白いものを売ったり。誰が店主なのか客なのかわからない。プロなのか、素人なのかわからない。今までは親密圏と公共圏は対立概念で考えられてきましたが、社会に開かれた場でありながら、親密圏で得られるとみなされていた関係のあり方が目指されています。

インタビューをしていると「家族のような」という言葉が頻繁に出きます。その家族的なものとは一体何なのかについて、実践を通じて探っていきたいと思っています。家族的なものの一つにケアという機能がありますが、血縁や配偶関係による家族を形成しない人々の増加が見込まれる今後の日本社会において、ケアの他にも何が個人と社会との関係性の中で引き継がれていくべきなのかを考えていきたいです。

コロナ禍を経て、オンラインコミュニケーションの利便性や価値を多くの人が体感したが、一方で「遠い人は近く、近い人は遠くなった」ように感じることもある。オンラインは、これまで壁となっていた時間と距離の問題をなくしたが、目的がないと始まらないし、雑談がしづらい。話が終わるとページが閉じられ、余白や余韻が生まれにくい。感情の機微や雰囲気も読み取りづらい。ちょっとした雑談や、行き帰りの道など「目的としていない時間」も込みで、人との関係性をつくってきたことを認識した。どれだけ「時間」「空間」「経験」を共有できるかによって、つながりの強さが変わってくるのではと感じる。リアルな共有空間があることの意義は大きいのではないかと感じた。

照喜名恵

これまでのレクチャーを通して根底にある問題は、社会規範vs.市場原理の対立だと思う。その落とし所をどう見つけていくのか。市場原理のポイントは、選択と集中による専門性と、金銭という交換可能な価値。この2点をぼかしていくことで溶け合う点が見つかるかもしれない。事例に挙げられていた、仕事／趣味、職場／自宅、店主／顧客、プロ／素人の区別が曖昧な場や、ケア施設なのに子どもが遊んでいたり仕事をしている人がいたりという総合的な場が良いのだと思う。私が運営している塾はかなり曖昧な空間だと思うけれど、もっとぼかしてみたいと思った。

恵美須屋直樹

私がずっと関心を持っていたけれど輪郭がぼんやりとしていた「近隣や職場などとは関係のない人々同士の自由で多様なつながり」は、従来の公共圏と親密圏という対立構造から脱した「開かれた親密圏」という言葉に置き換えられるのかもしれない。オンラインにおけるつながりの匿名性という話題もあったが、匿名性の強いつながり方は、対面でもあり得ると思う。名前も普段何をしているかも言わないまま、居合わせた人と趣味や特定の話題について盛り上がるという関わり方は、オンラインの匿名性と似た心地良さを感じる。オンライン上での人との関わりが生活に組み込まれているとなれば、オンライン的な関わり方がリアルなつながりにも拡張される可能性についても考えていきたい。

吉田珠世麗

# 付録

## プログラム4「共有空間」

アーティスト：西尾美也、鈴木文貴

プロジェクトメンバー（受講者）：内田環、恵美須屋直樹、柿原萌未、島田貴弘、杉山貴美、

照喜名恵、松本尚大、安田翔、吉田珠世麗

レクチャー講師：梅田直美、小山田徹、人文系私設図書館ルチャ・リプロ

プロジェクトマネジメント：西尾咲子

協力：櫻井莉菜、中島明日香、松下千尋

## 「DATSUEBA ワークインプログレス/グランドオープン」

空間デザイン：鈴木文貴、岩田茉莉江（やぐゆぐ道具店）

空間施工：高橋和広（KUSUNOKI WORKS）

プロジェクトロゴデザイン：長岡綾子

リーフレットデザイン：佐藤豊

DMデザイン：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）

協力：柴田衣料店、谷建設株式会社、西尾純一、西尾和美、曾根加代子、曾根政弘、松本典子

# 超教育学としてのアートプロジェクト

西尾美也 (CHISOUディレクター)

美術史の大きな流れの中で、「教育的転換」と呼ばれる動向がある。それは、アートがモノとして美術館の中で見られるものだけでなく、社会の中で提示される表現として重要視されることであったり、来館者が主体的に学ぶ教育プログラムが重要視されたりすることを言う。こうした動向を受け、アーティストのパブロ・エルゲラは、「Transpedagogy (超教育学)」という用語を提唱した。エルゲラは、次のように述べる。芸術教育において、それは伝統的には芸術の解釈や技術を教えることに重点が置かれているが、超教育学では、教育的プロセスがアートワークの中心にあり、それは学術的、制度的枠組みの外側に、独自の自律的な環境をつくりだす(2015:155)。

「超教育学」は、エルゲラが「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」について語る時に使った言葉だが、日本ではアートプロジェクトがそれに近いものとしてある。アートプロジェクトは、作品そのものではなく制作のプロセスを重視するもので、展示室の中ではなく社会的な文脈で表現を行い、それを媒介に地域を活性化させようとしたりするものだ。私は自らアーティストの立場として、アートプロジェクトもまた、これまでにないアートを生み出す「反芸術」の一つとして出てきた表現だと捉えている。しかし反芸術としては期限切れの時期が来ているとも言える中で、それでも私自身が未だアートプロジェクトに可能性を感じるのは、先の見えない時代において、他者と共に学び合う手法としてアートプロジェクトを活かせるのではないかと思うからだ。

エルゲラはまた、従来の芸術指導は、技術指導や鑑識眼、解釈などに重点を置きすぎているとして、次の3点を主張する(2015:159)。①教育行為は、創造的なパフォーマンスティビティをもつこと。②アートワークとアイデアによって芸術的環境を共同で構築することは、知識の共同構築でもあること。③芸術の知識は芸術作品を知ることと終わるのではなく、世界を理解するための道具になること。この主張に共感

しながら私なりに言い換えてみると、アートプロジェクトは、他者と共に「何かをやってみる＝表現してみる」ことを通して、世界を理解しようとする研究である。実際に、教育学や社会学、人類学などの他の学問分野においても、アクションリサーチやアートベースリサーチ、映像人類学、アートグラフィーといった形で、アートが得意としてきた「何かをやってみる＝表現してみる」研究手法が広がりつつある。

芸術系の学部・学科のない奈良県立大学の地域創造学部で、私はまさにこうした「芸術教育」を実践してきた。絵画や彫刻であれば才能や技術に左右されるが、アートプロジェクトの場合は、企画立案や会場交渉、予算の確保などリサーチやコーディネートの仕事も含まれる。つまり、アートプロジェクトの実践はアーティストに占有されるものではなく、あらゆる人に開かれているのだ。ゼミの活動では、大学構内で現代アート展を開催してきた。学生の日頃の研究成果を論文以外の方法で発表するという課題に加えて、学生自身によるキュレーションでアーティストを選定して交渉し、実際に展示を企画して展覧会を開催する。

この取り組みをより社会化すべく始めたのが、「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」である。アートマネジメントとは、一般的には作り手と受け手、作品と社会をつなぐ仕事のことを指す。CHISOUでは「つなぐ」をある種の口実にして、異なる関心や専門性をもったアーティスト、講師、受講者、スタッフが共に学び合うことを通して、分断された知と技術を生活の中に取り戻すことを目的にしている。想定する対象者として、極端な二つの例を挙げるとすれば、一方にはアーティストがいる。今の時代、例えば絵を描くだけではなく、それをどのように社会と接続させるかを考えなければならないからだ。また他方には、アートを敬遠するような人たちがいる。この場合は、鑑賞者教育や教養教育のように、アートや文化を個々人に接続していく方法としてのアートマネジメントである。

アフターコロナの時代は、「当たり前」を見直すことが誰しにも迫られた時代だ

## 奈良県立大学

### 「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」

#### 2021年度 受講概要

と言える。CHISOUは、こうした時代に「大学」と「地域創造」それぞれのあり方をプロジェクション（投影）する。CHISOUにおける学びの特徴は、以下の10点に集約される。①年齢や経験が多様な受講者が自然とそのテーマや内容に沿って集うこと。②プログラムごとに学びたい、話を聞きたい専門家を招くことで、学部や大学の横断、枠組みを超える学びが実現できていること。③まちそのものが学びの舞台になっていること。④手や身体を動かしながら、つくりながら学ぶこと。④大学の外に自分たちの拠点を持つことができていること。⑤コロナ禍であるかどうかに関わらず、対面とオンライン、SNSを使い分けながら学びや交流を深めていくこと。⑥毎週決まった曜日・時間のゼミではなく（プロジェクトはそのようには進まない）、内容に合わせたオーダーメイドのゼミが実現していること。そのことによって、⑦受講者の主体性そのものが、ゼミを、プログラム自体をつかっていくものになっていること。重要なのは、そこに先導者としてビジョンを持ったアーティストがいることだが、アーティストが絶対の存在ではなく、⑧アーティストも受講者と共に学びながら、スタッフが伴走し、知識の共同構築をしていくこと。その過程における学びは、⑩「地域のため」ではなく、個々の知りたい、学びたい、関わりたいという切実さがもとになっており、それが結果的にアウトプット（≒地域創造）につながっていくこと。

こうしたCHISOUという「超教育学としてのアートプロジェクト」が、大学教育や地域創造の可能性とは言えないだろうか。

#### 参考文献

パブロ・エルゲラ（2015）『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門—アートが社会と深く関わるための10のポイント』アート&ソサイエティ研究センター SEA 研究会訳、フィルムアート社

#### 実施期間

2021年7月～2022年2月

#### 実施場所

奈良県立大学CHISOU lab.\*を中心とする奈良市内の文化施設など

- プログラム1「感覚」は明日香村での実習が含まれます。
- プログラム2「生態」は生駒市や天理市などでの実習が含まれます。
- プログラム3「時間」は山添村や宇陀市などでの実習が含まれます。
- 新型コロナウイルス感染症の状況を考慮し、対面式とオンライン配信式を併用して実施する場合があります。

#### 募集定員

各プログラム7名程度

- 応募者多数の場合は、応募動機等を参考にCHISOU企画運営スタッフにより受講者を決定します。
- 新型コロナウイルス感染症の状況を考慮し、レクチャーやミーティングはオンラインシステムでの実施に変更する場合がありますが、対面で参加する意思のある方を優先して選考します。

#### 受講料

無料 ○実習場所までの移動に伴う交通費は受講者負担

#### \*CHISOU lab.

2020年夏に奈良県立大学地域交流棟3階にオープンしたCHISOU lab.は、「知の地層」を生み出す拠点となる空間です。各プログラムに沿ったレクチャーやワークショップの実施、アーティストや受講者による制作活動など、あらゆる実験的創造を行うことができます。各プログラムの受講者は、アートマネジメントに関する専門書の貸出や、自らの研究や作業などの場所としても利用できます。



## 受講者内訳

### I. 各プログラム受講者数

	プログラム1 「感覚」	プログラム2 「生態」	プログラム3 「時間」	プログラム4 「共有空間」	合計
受講者数	8名	8名	8名	9名	33名

### II. 受講者の居住地

居住地	大阪	奈良	京都	兵庫	和歌山	三重	岐阜
人数	13名	9名	4名	4名	1名	1名	1名

### III. 受講者の年代

年代	10代	20代	30代	40代	50代
人数	4名	21名	3名	3名	2名

### IV. 受講者の所属先

大学生、大学院生、会社員（企画制作・広報・人材育成・都市計画・福祉・銀行）、フリーランス（企画制作・広報・教育）、行政職員、団体職員（福祉・文化施設）など

### エッセイ「受講者から実践者へ」

古江晃也（CHISOUプログラムコーディネーター）

生まれ育った奈良でアートマネジメントを学べると知り、アートは社会にとってどんな意味があるのかをもっと理解したいと思い、昨年度にCHISOUを受講した。社会を読み解く視点を講師から学び、プロジェクトをアーティストと実践しながら、アートマネジメントに関する学びを深めていった。自分の感覚や経験とは全く異なる角度から社会を捉えて表現するアーティストと共にプロジェクトをつくっていきななかで、アートには自らの価値観を問い直し、創造性を育む力があると感じることができた。

今年度はプログラム1「感覚」を担当するプログラムコーディネーターとして、アートマネジメントを学ぶ側から実践する側になり、アートマネジメントと一言で言っても、関わる幅がかなり広いことを感じた。CHISOUではアートマネジメントを「作り手と受け手、作品と社会をつなぐ仕事」と定義しているが、つなぐためには地域の人々の理解やお金、情報発信、企画内容など、様々なものが必要になる。受講者の時は、限られた枠組みの中で自分ができるところを探して取り組んだが、実践する側になると当然だが枠も何もなく、いかにアーティストの表現を実現できるのかを常に考えて実行することが求められる。アーティストの社会の捉え方や、表現についての考え方を理解した上で、実現に向けて場を整え、広く伝えて周囲の理解を促していくこと。どうすればそれが可能になるかをとにかく考えて動き続けた1年間だった。

アートマネジメントを実践する側として、アーティストや受講者と関わるなかで、「アートマネジメントとはどんな役割で、何ができるのか」を問い直し続けた。アートマネジメントは、つなぐ役割であると同時に、創造性のある社会をつくる担い手でもある。アーティストの要望をただ叶えるのではなく、アーティストと共に社会を問い直し、体験する人々の創造性を刺激すること。自らの中に問いを立て、より良いものを目指し、創造する人がいる環境をつくっていくこと。これらがCHISOUを通して私が考えたアートマネジメントを実践する目的だ。今後もアートマネジメントの考え方を活かして、アーティストや体験する人々にとって創造的な場をつくっていくことに努力していきたい。

## 西尾美也（ディレクター）

1982年奈良県生まれ、同在住。美術家／奈良県立大学准教授。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目したプロジェクトを国内外で展開。ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」を手がける。近年は「学び合いとしてのアート」をテーマに、様々なアートプロジェクトやキュレトリアルワークを通して、アートが社会に果たす役割について実践的に探究している。

## 西尾咲子（プログラママネージャー）

1982年奈良県生まれ、同在住。アートマネージャー／編集者／奈良県立大学客員准教授。ケニアでアーティストによる作品制作と社会活動についてのフィールドワークや芸術文化事業の企画運営に携わった後、京都芸術センターのコーディネーターや京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAの学芸員、国内の芸術祭やアートプロジェクトのアートマネージャーを務める。

## 飯村有加（アドミニストレーター／プログラムコーディネーター）

1988年奈良県生まれ、同在住。コーディネーター／一般社団法人はなまる代表理事。「奈良・町家の芸術祭 はならあと」事務局長。奈良県内を中心にアートプロジェクトに従事する。出産を機に、自宅の1階を開放し「maru room(マルルーム)」と名づけ、展覧会や子ども食堂を企画運営する。

## 内山幸子（プログラムコーディネーター）

1977年兵庫県生まれ、大阪府在住。アートマネージャー。秋吉台国際芸術村を経てメキシコでコミュニティアートを調査した後、大阪府高槻市で五領アートプロジェクトを立ち上げる。京都精華大学「#わたしが好きになる人は／#The people I love arc」プロジェクトコーディネーター。

## 古江晃也（プログラムコーディネーター）

1994年奈良県生まれ、同在住。コーディネーター／Torch-Guide代表。地域企業と若者が共に成長するプラットフォーム「ミライ企業プロジェクト」大阪事務局コーディネーター、株式会社PRリンクのプランナーなどに携わる。NPO・市民団体とボランティアのマッチングを通してまちづくりや社会課題の解決に取り組むWorld Seed理事。NPO法人JAEにてアントレターンシップなど学生向けのプログラムを担当。

## 山本あつし（コミュニケーションデザイナー）

1971年大阪府生まれ、奈良県在住。事業プロデューサー／ならそら代表／大阪芸術大学講師。システムエンジニア、建築設計・施工の仕事を経て、ヒト・コト・モノ・バショに関わるあらゆる領域で、デザインによるプロデュースを行う。現在はシビックプライドを醸成する公共デザインのプロデュースに注力している。

## 石田理恵（調香家）

奈良県生まれ、同在住。鳥根県にある「香木の森公園」でハーブの研修を経て、東京で調香を学んだ後、奈良を拠点に活動。天然香料の調香やハーブティーの調合、調香とハーブの教室を行う。季節や雰囲気踏まえながら、その時々を感じる気持ちを大切に、その人らしく香りとハーブを暮らしに取り入れる方法を伝えている。

## 井上さやか（日本文学・日本文化（万葉古代学）／奈良県立万葉文化館指導研究員）

1971年宮崎県生まれ、奈良県在住。博士（文学）。専門は『万葉集』を中心とした日本文学・日本文化。著書に『山部赤人と叙景』、『万葉集からみる「世界」』（共に新典社）、監修に『マンガで楽しむ古典 万葉集』、『マンガはじめて読む 古事記と日本書紀』（共にナツメ社）、分担執筆に『飛鳥への招待』（中央公論新社）、『万葉集の基礎知識』（KADOKAWA）など。

## 井原縁（環境デザイン学・造園学／奈良県立大学教授）

1975年香川県生まれ、奈良県在住。農学博士。造園学を専攻し、史跡・名勝など文化遺産を基盤とした風景づくりに関する調査研究と実践を重ねている。主な著書に『造園学概論』（共著、朝倉書店）、『47都道府県・公園／庭園百科』（共著、丸善出版株式会社）、『みやこの近代』（共著、思文閣出版）など。

## 岩田茉莉江（音風景研究家／おとたまり主宰）

1983年奈良県生まれ、同在住。耳を澄まし音を聴き身体感覚・想像をひらく「音さんば」を2003年よりひらく。沖縄県南大東島で「海鳴りの聴き方」を軸にサウンドスケープを研究。音絵と音源集「うみなりとなり」を共同発表。土地の記憶として眠る音、季節に聴ける音、言葉から想像する音を辿るアートやワークショップを行う。「おとたまり」主宰。奈良の山里で聴察・研究を重ね「おとたまりハウス」を構想中。

## 梅田直美（社会学／奈良県立大学准教授）

1973年大阪府生まれ、同在住。孤立や虐待など関係性の諸問題とそれらを巡る社会的活動に関する研究を行う。近年は、起業家自らの経験を軸として着想されたソーシャルビジネスによって生みだされるコミュニティの性質とその意味を、「当事者性」と「自律性」に着目しながら探っている。主な著書に『OMUPブックレットNo.62 子育てと共同性—社会的事業の事例から—』（共著、大阪公立大学共同出版会）など。

## 梅守志歩（ume, yamazoe支配人）

1988年奈良県生まれ、同在住。大学卒業後、大阪での会社勤めを経て、家業である寿司製造メーカーの梅守本店で職務に就く。2016年9月に山添村へ移住。寿司販売の営業の傍ら、旅行会社向け田舎体験ツアーの企画・販売を行う。2020年3月、古民家をリノベーションした宿泊施設「ume, yamazoe」をオープン。

## 小山田徹（美術家／京都市立芸術大学教授）

1961年鹿児島県生まれ、京都府在住。1984年、大学在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。主に企画構成、舞台美術を担当し、国内外で数多くの公演に参加。1990年より様々な分野の友人たちと造形施工集団を作り共有空間の開発を行う。

## 齋藤精一（クリエイティブディレクター／パノラマティクス主宰）

1975年神奈川県生まれ、同在住。コロンビア大学建築学科（MSAAD）で建築デザインを学び、2000年からニューヨークで活動を開始。フリーランスとして活動後、2006年株式会社ライゾマティクス（現：株式会社アブストラクトエンジン）を設立。社内アーキテクチャー部門「パノラマティクス」を主宰。行政や企業などの企画や実装アドバイザーも数多く行う。

**人文系私設図書館ルチャ・リブ**

**青木真兵**（キュレーター／古代地中海史研究者）

1983年埼玉県生まれ、奈良県在住。

**青木海青子**（司書）

1985年兵庫県生まれ、奈良県在住。

奈良県吉野郡東吉野村にある、図書館、パブリックスペース、研究センターを内包する「人文知の拠点」。歴史や文学、思想、サブカルチャーなど人文系の蔵書約3000冊を貸し出す。話をどんどん先に進めるよりも、はじまりに立ち戻るような、そしてそのはじまりが抱って立つところをも疑問視するような場所。実験的ネットラジオ「オムライ斯拉ヂオ」を配信。主な著書に『彼岸の図書館——ぼくたちの「移住」のかたち』（夕書房）、『山學ノオト』、『山學ノオト2』（共にエイチアンドエスカンパニー）、『手づくりのアジュール』（単著〔青木真兵〕、晶文社）、近刊に『本が語ること、語らせること』（単著〔青木海青子〕、夕書房）を予定。

**鈴木文貴**（空間設計／やぐゆぐ道具店）

1978年千葉県生まれ、奈良県在住。インテリアデザイン事務所での勤務を経て、2012年に独立。2015年に東京から奈良へ移住し「やぐゆぐ道具店」を設立。「ものものがたり」を理念に、インテリアデザイン、プロダクト、インスタレーションの制作を行う。

**田中みゆき**（キュレーター／プロデューサー）

1980年大阪府生まれ、福井県育ち、神奈川県在住。「障害は世界を捉え直す視点」をテーマにカテゴリーに捉われないプロジェクトを企画。表現の見方や捉え方を、障害当事者を含む鑑賞者と共に再考する活動を行う。最近の仕事に「ルール？展」（21\_21 DESIGN SIGHT、2021年）、「語りの複数性」（東京都渋谷公園通りギャラリー、2021年）など。

**長岡綾子**（グラフィックデザイナー）

1984年三重県生まれ、奈良県在住。2015年に奈良市で「長岡デザイン」を設立。博物館の広報物や図録など紙媒体を中心としたグラフィックデザインの他、プロダクトデザイン、日用品を使用したアートワークの制作や本の出版を行う。

**中川真**（音楽学者／大阪市立大学特任教授／奈良県立大学学術研究員）

1951年奈良県生まれ、京都府在住。1981年に十津川の盆踊りに触れて以来、その素晴らしさに魅了される。「盆踊りの活性化によるコミュニティの再構築」（京都市）、「文化とコミュニティ維持のための村落・都市共創システムの構築」（サントリー文化財団）のプロジェクトのコーディネーターを行う。

**長坂有希**（アーティスト／香港城市大学クリエイティブ・メディア学科博士課程研究員）

1980年大阪府生まれ、日本・香港在住。日常の暮らしの中で出会う事象を綿密にリサーチし、自らの体験や記憶を織り交ぜながら物語を編み、語ることをとおして、物事の関係性の再定義や、周縁のものたちからの視点を提示し、異なる人々や生物のあいだに存在している権力構造の再考を試みる。

**西山厚**（仏教史・仏教美術史／半蔵門ミュージアム館長／帝塚山大学客員教授）

1953年徳島県生まれ、奈良県在住。奈良国立博物館の学芸部長として「女性と仏教」など数々の特別展を企画。現在は半蔵門ミュージアムの館長を務める。奈良と仏教をメインテーマに、人物に焦点をあてながら、様々なメディアで生きた言葉で語り書く活動を続けている。

**山口末花子**（動物人類学／北海道大学准教授）

1976年京都府生まれ、北海道在住。大学で動物生態学を学んだ後、人類学の分野で捕鯨者や先住民の古老から動物について学ぶ。主なフィールドはカナダ・ユークン準州、日本の宮城県牡鹿半島、西表島など。近年は自分でも狩猟や工芸品の製作をしながら日々動物について考えている。主な著書に『ヘラジカの贈り物』（単著、春風社）、『人と動物の人類学』（編著、春風社）など。

**山城大督**（美術家／映像作家／京都芸術大学専任講師）

1983年大阪府生まれ、京都府在住。映像の時間概念を空間やプロジェクトへ展開し、その場でしか体験できない「時間」を作品として発表。近年は映像や音、光による上演型インスタレーションを多数制作する。映像ディレクターとしてプロモーションビデオなどの制作を手がけている。

**吉岡幸次**（養蜂家／吉岡養蜂園）

1947年奈良県生まれ、同在住。中学校を卒業後、師匠に弟子入りして養蜂を学ぶ。1966年に吉岡養蜂園を設立。50年以上にわたって、家族で約1000の巣箱の蜜蜂を育てている。蜂蜜の販売や花粉交配用の蜜蜂の貸出の他、アカシアや山桜を奈良県内で植栽し、蜜源確保に取り組む。

**吉岡伸次**（養蜂家／吉岡養蜂園）

1974年奈良県生まれ、同在住。2003年にサラリーマン勤めを辞めて、養蜂家に転身。蜜蜂を連れて奈良から北海道枝幸郡中頓別町へと開花前線を追いかけて、より多くの蜂蜜を採り、次のシーズンに向けて良い蜂をつくる移動型養蜂を行っている。

**ラナシンハ・ニルマラ**（観光社会学／奈良県立大学准教授）

1983年スリランカ生まれ、奈良県在住。観光社会学、南アジア地域研究を専門とし、主に地域社会の独自性と主体性を重要視しながら、観光を活かした地域活性化や持続可能な開発を研究している。JICA奈良デスクと協力して、SDGsへの認識を高めるための活動も行う。

**listude**

**鶴林万平**（音響製作・設計者）

1975年大阪府生まれ、奈良県在住。

**鶴林安奈**（グラフィックデザイナー）

1980年奈良県生まれ、同在住。

2007年より奈良を拠点に活動を開始。能動的な「聴く」からはじまる、もの・こと・感覚などを通して様々な提案を試みる。その場、その時でしか生まれない音を通じて感覚の広がりを経験する「地奏」プロジェクト、多面体・無指向性スピーカーの開発を行う。2021年、屋号「sonihouse」を「listude」に変更。

超教育学としてのアートプロジェクト  
奈良県立大学「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」  
2021年度 記録集

編集

西尾咲子

編集補助

飯村有加、古江晃也、山本あつし

監修

西尾美也

撮影

在本彌生 (pp. 013, 024, 025)

小川美陽 (pp. 014 [左下、右上], 015, 031-077)

衣笠名津美 (pp. 028, 029, 081-083, 094-100, 101 [左], 146-151, 185-187, 198-205)

茶本晃生 (pp. 188 [左下], 190 [中], 207-212, 227-233)

鶴林安奈 (pp. 009-012, 014 [右下], 016-022)

前川俊介 (pp. 188 [右], 189, 217-224)

山中美有紀 (pp. 084 [右], 085 [左], 101 [右], 113-128, 133-135, 136 [左下、右],  
137 [左], 155-182)

ブックデザイン

Studio Kentaro Nakamura

ロゴデザイン

長岡綾子

印刷・製本

有限会社修美社

発行

奈良県立大学

発行日

2022年3月20日

令和3年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業



文化庁

大学から



POWER OF CULTURE